

海老名彈正著



基督之大訛謬釋

東京 文明堂藏版



序論

基督教には舊教もあれば、新教もある。その舊教にもまたギリシヤ教や、天主教がある。新教に至りては其教派の數夥しくして枚擧するには違がない。さて其教派の夥多に分れた條件を尋ねれば、教理の異同によるもあり、儀式の種別によるもあり、教會政治の差異によるもありて、之を一々究め盡さうとすれば、一生涯を此研究に捧ぐる専門家に非ざれば、其目的は達しえられない。よし又此研究を遂げたりとて、それで基督教が、能く了解せられやうとは思はれぬ。蓋し基督教の眞髓は其枝葉に存せずして、其根本にあるから、壯年は小兒の發達したもののなれば、前者の後者に優ることは論を待ない。けれども年漸く長くるに従ひ、人には種々の悪習が

つき加はりて、人間本來の面目を失ふので、人類は幾度も幾度も小兒となつて其本來の眞面目に歸らねばならぬ同じ道理で基督教もその面目を一新するに當ては、未だ嘗て其初發の状態に立ち歸らないことはない。近世は基督教界に革新の聲が甚だ高いのであるが、革新家はみなく基督教の元始に溯り、耶蘇の宗教其ものを研究することになつた。基督傳の著述の如きは實に近世の最も著しき特徴である。紀元三世紀以後基督傳に心力を盡したる學者あつたことを聞かない。歐洲宗教改革の時は始めて聖書の研究に立ち戻つたなれども、未だ基督傳の研究とまではならなかつたが、第十九世紀の前半期に於て、スツラウスが基督傳を著してより、宗教界の形勢頓に一變して、耶蘇の言行討究批評と

なり、人をして始めて耶蘇の言其ものに、耶蘇の行其ものに注目せしむることになつた。此時より耶蘇傳の著述は枚舉せられぬ程に多くなり、基督教の面目は實に此時より一新せられつゝある。

日本に渡來したる基督教の分派も東西二大舊教を始めとして、新教の數十派となつて居る。基督教を學ぶもの或は此に入り、或は彼に行き、各其入り又行く所に於て其教義や儀式を學ぶのであるから、其所謂學び得たる基督教は各派の信條儀式等にして、基督の宗教其ものを知る者甚だ少ないのである。吾人は之を痛歎するの甚しき、遂に不省を願みずして、基督傳を編するに至つた。然るに我邦人の之を愛讀するもの甚だ多く、著者をしていたく驚かしめた程である。

吾人が編輯によつて成れる基督傳は、専ら耶蘇の行爲を紹介したので、其高談明説の如きは之を紹介するの違なかつた。吾人之を補はんが爲に爰に我邦人に紹介せんとする耶蘇の言は、其千言万語の一部に過ないのではあるが、正しく其教訓の要領を得たるものであれば、假令耶蘇の凡ての言を味ふの便を有せざる人も、若し吾人の紹介する言語を玩味するならば、容易に耶蘇の教訓其ものに通曉することが出来ようと思ふ。吾人が紹介するものは古へより山上の説教といふて、最も有名なるものである。此説教以外に教示せられたる比喻の如き、演説の如き、論辨の如き、談話の如き、甚だ數多くあれども、其うちの多くはこの説教の説明といふてもよからう。讀者此意を了して此書を研究することあら

ば、基督教の眞面目に通曉すること決して六ヶ敷はあるまい。基督教を信奉するものも此教訓に通曉しないあいだは、未だ基督教の堂奥に昇りたるものとはいはれない、又之に反對せんと欲するものも、此教訓を論難攻撃して打破し去るにあらざれば、未だ基督教其ものを論破したとはいはれない。吾人は基督教の本城は實に此山上の教訓にありと信じて疑ひない。若し夫れ此教訓を蔑にして、徒らに基督教の神學又は哲學に注目するものゝ如きは、吾人之を以て基督教の糟粕を嘗むるの愚人と笑はざるを得ない。耶蘇と舊約聖書との關係を知らざれば、聖書といふ聖名に畏懼して舊約書に盲従するの憂がある。基督教徒にして舊約書の訓誡を旨とし、全く耶蘇の本意に違反するもの甚だ

少くない。耶蘇は釋加の古聖典に於けるが如く、絶對的に之を排除し給ふたのではない、却て之を成就するの態度を取り給ふた。然れども其成就といふ眞意を知らざれば、復大に過ることがあるから、深く注意せねばならぬ。幸に山上の教訓には此態度を明確に示してある。

舊約聖書は唯一つの心を種として生長したる千枝万葉の樹木である。一枝は一枝に異なり、一葉は一葉に同じからざる千差万別の枝葉が一々名狀せられないやうに、舊約聖書の誠律教訓は一々之を枚擧することは出来ない、しかも唯一つの種より生長したるもので、耶蘇は之を明確にせられたのである。耶蘇が「己れ人にせられんと欲することは爾亦人にもその如くせよ、是れ律法と預言者なるなり。」といはれ

たように、己れが欲する所を人に施すの精神が取りも直さず、千狀万態の枝葉を一貫する所の生命である。耶蘇の千言万語は此人道の原則を万事に應用したるに外ならない、此原則が實行さへせらるれば、其千枝万葉の如きは時代と場所とに由つて千變万化すべきである。耶蘇は此原則を取り、其深意を發輝して、舊約書の千訓万誠を超絶し給ふたのである。

此人道は其基く所深遠にして一朝一夕の出來心より發したものである。耶蘇が最も力を込めて示し給ふたるは「己れ其ものである。此「己れ」が何程の價值を有するかが最も注目すべき所で、もし此「己れ」が一朝一夕に盛衰榮枯して、草木禽獸と何の擇ぶ所もないならば、其欲する所も亦知るべき

のみだ。耶蘇は「己れ」其ものを説明して、馬可八章の三十六節人は全世界を得るとも、もし其生命を失はゞ何の益あらんやといはれた。して見れば「己れ」は地上の富貴利達を以て贖ふべからざる無限の價值あるものと思はれる。此の如き價值ある「己れ」は固より万有其ものを以て其宗教的對象となし能はざるは、論ずるまでもないこととて、万有を超絶する所のものにあらざれば、其對象とはならぬのである。耶蘇は偏く日を照らし、雨を降し、空の鳥野の百合花を保養する無窮の靈能を以て「己れ」の對象となし給ふた。それとても不生不滅の物質的能力でないことはいふまでもないので、其仰向愛慕するものは則ち至善の靈能である。耶蘇は「己れ」をして此至善の靈能を愛慕して天父、又は單に父と號呼せしめ給ふた。至

9

善の靈能を天父と號呼する「己れ」は、則ち靈能其ものと性情を同うする神子であれば、其欲する所は至善の外に出づべからざるは言はずとも知れるであらう。耶蘇は爾曹の天父の純全なるが如く純全となるべしといひ給ふたが、元と神と人とは父子有親の關係あることが、耶蘇の宗教的意識によつて明に示され、又彼を尊信したる者の發見したのであれば、此「己れ」は即ち神の聖殿、しかして神は即ち「己れ」の原型なので、「己れ」が欲する所の如何ばかり高尙遠大なるべきかは推して知られるのであらう。「己れ」の内容は神其ものであれば、其の欲する所なんで博く世界の人にしき施されることがあろう。耶蘇は自から「己れ」其のもの、最も圓滿にして、完全なる標準たるを認め、巍々として人類世界に立ち、其

言行を以て救主となり給ふたのである。彼れの言行は弟子共によつて後世に傳へられた。然も彼は其自からの言行よりも其精神の勢力に、其事業の成功を托し給ふたのであれば、自から其言論を記録する如きは、全く彼れの思ひ付かなかつた所。彼は其自己の精神が弟子から弟子に發輝せられ、世界人類を靈化することを企圖せられたので、彼れの言行の如きは寧ろ簡にして甚だ少ないのである。彼の精神は彼に親炙したる弟子共や、精神に感激せられたるパウロの如きに由て愈發輝せられ、新約全書の大部分を占めて居る。耶蘇の言行其ものは重に馬太、馬可、路加の三福音書に由つて傳へらる。此三福音書は互に能く相類似して居る故に、共觀福音書といふのであるが、亦各特色があ

る。耶蘇の行事は馬可能く之を傳へ、其博愛人情の特徴は路加能く之を傳へ、しかして其言の要領は馬太能く之を傳ふるのである。馬太の傳ふる山上の教訓なるものは路加も之を傳ふれども、決して前者の如く詳にはない。しかし路加の傳記は山上の教訓其ものばかりを記するのであるが、馬太は此教訓を骨子として種々の教訓を附加し、しかして耶蘇の大訓とはなしたのである。譬へは馬太の十福の如きは、斯の如く耶蘇が決して順序立てをして教へられたではあるまい。路加がモーゼの十誡に比することもなく、作爲を假らずして叙したる方が耶蘇説教の其原型を寫生して居るやうに思はれる。又其五誡の如きも必ずしも時と場所とを同うして語られたものとは見えない。著者が之を編輯したる

形迹が見えるのである。彼の主禱の如きは決して山上に於て同時に教示せられたものではない。路加は弟子の請求に應じて、耶蘇が之を語り給ふたと傳ふるのであるが、其れの方が事實であらう。けれども耶蘇が時を異にし場所を異にして教示し給ふたるものを、順序をなして編纂し、讀者をして一目瞭然、耶蘇の大訓を了解せしむることに至りては、馬太傳の功亦路加傳を起ゆること甚だ遠しといつてよからう。故に吾人は馬太傳の山上説教を註解して、耶蘇の大訓を讀者に一目瞭然たらしめんと欲する。

耶蘇の教訓に註解を加ふるは吾人の固より憚り懼れる所であるが、しかし其一小徒弟たるものが、聖師の意義を如何に解したるかを發表するに外ならざるのであれば、必ずし

も僭越とは言ふべからず、誰れにても其師の意志を何とか解して居るべき筈なれば、吾人聖師の言に對する意見を發表するも亦當然であらうと思はれる。思ふこと勿れ、吾人の註解を読む者之を読んで直に是れ耶蘇の意なりと、寧ろ之を読んで耶蘇の言に對する吾人の意見なりと了得せよ、是れ吾人の固より欲する所である。若し此註解によつて耶蘇の發輝せられたる「己れ」の神に對し、人に對し、世界に對し、又「己れ」自らに對する内容の幾分か、紹介せられ、人をして耶蘇の言と肝膽相照らすものあらしめば、吾人の喜悅之に加ふるものが無いのである。

明治卅六年十一月

基督の大訓註譯

目次

序論	一
第壹章 天然の教壇	一
第貳章 十福	一〇
第參章 クリスマスチャンの使命	三〇
第四章 憲法(五ヶ條)の序	四三
第五章 憲法五ヶ條	五三
第六章 善行三例	八六
第七章 主の隣	九九
第八章 生活と信仰	一一五
第九章 社交道徳	一三三
第十章 奨励警告聴衆の感想	一五三

基督の大訓註釋

海老名 彈正 著

天然の教壇

耶蘇許多の人を見て、山に登り座し給ひければ、弟子等も其下に来れり。耶蘇口を啓き彼等に教へ曰けるは、馬太傳五の一三

註

許多の人は善男善女の求道者で、ガリラヤ洲の人々ばかりではない、東西南北より群り来たものである。此人々の多數は言ふまでもなくユダヤ人なれども、亦異邦人も少からずあつたのであらう、其譯はガリラヤ州は當時雜居地で、異邦人の往來も頻繁であつたから。

山は祝福の山として言ひ傳へられるが、ゲネサレ平原の南端、マゲダラの近傍にある小山テルハツチンと言傳へられる。東西に二角あつて、中央の高平原より六十尺ばかり秀づ、遠方より見れば鞍状を形作つて居る。即ち南高平原の北端にして、是より四百尺ばかり低平原に直下する。東に近く翠湖を見下し、北に遠くヘルモン山の高峰を仰ぎ、又西北にゲネサレの沃野を見やり、眺望實に絶景の地である。或はいふ、耶穌説教の山はテルハツチンにあらずして、コラジンとカベナウムカペナウムの中央に發ゆる一山ならんと。此山は即ち耶穌が屢人を避けて親しく天父に祈禱し給ひたる所、テルハツチンを北に距ること凡そ三里なれども、東南近く湖水を見下し、背後にヘルモンを控へ、西南地一帯はゲネサレの樂園を見下し、又遙に青空に發ゆるダボル山の古戰場を想ひ遣られる。

弟子等は十二弟子は云ふまでもない、篤志の人々である。耶穌口を啓きとあるは其最も嚴にして恭しき態度をいふ。耶穌の口より出るものは神國福音の宣言、天國憲法の發布である。路加の傳によれば、耶穌目を舉げてとある、

孰れも耶穌の壯重なる態度をいふ。

解

パプテスマのヨハナが天國の顯現を論じて、そが決して遠き將來にあらずして、時節の切迫したるを絶叫したるより、猶太の人心は海水の狂風に於けるが如く、業に已に痛く動搖して居たのであれば、耶穌が引續いて天國の福音を宣傳し始め給ひたるより、天下の猶太人は響の如くに應じ、影の如く彼のの周圍に群集して來たので、彼は時機の逸すべからざるを知り、獨り祝福の山頭に登り、夜を徹して親しく天父に祈禱し、翼朝夙に其撰拔の十二弟子を其膝下に召集して、福音宣傳の使徒となし、之を携へ下りて、群集の善男善女が集合する廣やかなる所に來り給ひ、目を舉げ口を啓いて、天國の祝福と憲法とを宣言し給ふたのである。馬太四の二三以下、路加六の一二以下を參照すべし。

論

祝福の山の風光とシナイ山のそれと甚だ相異なるが如く、耶穌の福音とモ

一七の誠律とは相隔たるが故に、しばらく祝福の山の風光を叙するの必要があると思ふ。祝福の山はそがマグダラの小山であらうが、又はカペナウムの某山であらうが、琴湖の西岸に聳ゆるものであれば、ガリラヤ湖は其風光の主人公である。此湖は南北長さ五里強にして東西幅三里餘で、黄色なる石灰岩の障壁は高く峙ちて、低く湛へたる碧波に映じ、北には上部ガリラヤの連山の起伏するあり、其の後方には遙にヘルモンの高峰白雪皚々として雲表に聳ゆる。此の高山の麓より涓々潺々として湧き出る源泉は、漸く滔々として急下し、此カリヤ湖の水をして漫々として湛へしむるのである。東岸は狭く平坦なる砂濱波に洗はれ、背後は兀々たる斷崖、崎嶇たる岩壁、削立してガウラニテスの外城をなす、西岸なるマグダラとカペナウムとの間に渡れる豊沃の耕地は層をなして傾斜し、即ちゲチサレの牧野は此所に青絨を布くのである。此緑野は耶蘇の時代に在つては、殊に人目を悦ばしむる庭園であつた。猶太の史家ヨセフスは誌して曰く、各種の植物はこゝに生育し、あらゆる作物は其繁茂を極めて居る。此地の中和なる空氣は諸種の植物に適

するが故に、寒冷を要する胡桃は、高熱を要する椰子、及温和の氣候に適する無花果、橄欖とひとしく無量に産するさま、自然の配劑の如何にも妙なるに驚がざるを得ない。しかして土地の種々なる果實を産すること、單に一年一回に止まらず、殆んど季節に關りなく、幾度も成熟する。葡萄及び無花果は一年の中十ヶ月間相次いで登り、其他の果物も終年熟果を見ざることをなしと。此西岸には許多の温泉と冷泉とが潺々として湧き出つゝあるが、ゲチサレの緑野を濕らすカペナウムの冷泉に付ては、土地の大いなることを言ひ傳ふるが中に、此泉はナイル河水に通ずとの口碑もある。今尙此處には倭樹に圍まれたる小池ありて、透徹なる水中を多の魚は游泳し廻つて居る。池の末は若干の小溝より流れ出て、下なる牧野に灌で居るのである。佛國の東洋文學の大家ルナンは曰く、カリヤは翠綠滴る蔭翳と快樂との國で、ソロモンの雅歌の謠はるべき、眞に戀歌の國である。三月、四月の比は花やかに咲き香ふ百花爛熳の天地で、其動物も亦可愛らしくして極めて溫柔である。快活にして溫柔なる鳩や、野草にとまつて其一葉をも撓むことなき輕小の

緑鳥や、旅人の足下に馴々しく飛び来る菊戴の雲雀や、輕快にして柔和なる
 面持したる川鶴や、又莊重にして温公なる鶴の如きは、親しく人の足傍に來
 つて、さながら人の親交を求むるやうである。世界眺れの所かカリヤの如
 く連山相唱和して屹立し、高遠の理想を鼓吹するものがあらう。耶蘇は特別
 に連山列峰を愛し、此處に於て古聖賢と親しみ無限の神興を受けたのであ
 ると、此等の湖畔、此等の谿谷、此等の原野盡く耶蘇説教の資料となつたので
 ある。こゝは彼主人が籬を廻らし、酒槽を掘り、塔を建てたる葡萄園の多くあ
 る所。こゝは彼の古き酒が已に熟し、新しき酒が將に成らんとして主人之が
 爲めに新しき草囊を用意する釀酒場のある所。こゝは春はソロモンの榮華
 に装はれ、冬は爐火の中に投せられる百合の花が千々万々數知れず、競ふて
 咲き亂れるゲネサレの綠野のある所。こゝは牧羊者が九十九の羊をおきて、
 一匹の迷へる羊を尋ねて、そを見出したらんとき歡び躍りて荷ひかへる牧
 場も多くある所。こゝは多くの鴉がアルベラの岩間に群れ居て、倉廩をも穀
 舎をも有せざるに、尙其食を岸邊に見出す所。こゝがあゝの鷲が連峰の巢より

舞ひ出で、雞の雛を襲ひ去る所。こゝがかの園丁が三年間其果實を見ざり
 し無花果の生ひ茂り、又育ちては空の鳥さへ宿る芥子畑の多くある所、東岸
 ガウラニテスの峰、晨に紅の狭霧棚引けば徒食せる學徒が今日は雨ならん
 といふ所、マクダラの丘、夕陽晴れやかに其肩に沈めば、拱手せるラビが明日
 は霧ならんといふ所、雲、南方のタリケヤより北方サフエドの山に深へば、古
 老が今日の暑を預言する所、又こゝは空の激變甚しく、颶風俄に起りて旋風
 を湖上に巻き、或は急雨忽ち流下して砂上の屋を漂はす凄しき風景を示す
 こともある所、然かして此ゲネサレ沃野の一帶は漁者、酒造家、農夫、商賈、收税
 吏、王公貴人、軍隊兵卒の往來絡驛として繁華を極めた所である。
 耶蘇は實に如上の如き風光を有する天然の教壇より神國の福音を宣言せ
 られた。其の宣言のシナイ山のそれと其意義を異にして居ることが自から
 分るであらう。

イスラエル民族の律法はシナイ半島のシナイ山より授けられたと傳へら
 る。モーセ、エヂプト國の奴隸たりしイスラエル民族を其憐むべき苦界より

救ひ出し、辛うじて紅海を渡つてシナイ山の麓に導き、到れば、エホバの神は威嚴赫々として山嶽に降臨し、雷電暴風雲煙暗々の中より新興國イスラエル民族の憲法十ヶ條を宣布し給ふたといふ。著者はこの恐ろしきシナイ山に對して愛すべき至福の山を擇び、新人類の律法即ち天國の憲法發布所となした。シナイ山は凄じき荒野の風光を示すのであるが、至福の山はエデンの樂園と稱せられたるゲネサレの平原を壓する、彼は恐怖の山、此は至樂の山、彼れよりは威嚇の律法授けられ、此れよりは祝福の人道を示される、モーセは十誠を宣布し、耶蘇は十福を啓示す、前者は民族的で後者は人類적이다。一は形式的の誠律、一は精神上の品性、一は外より來る制欲主義、一は内より發する自由の心情である。馬太傳の著者は至福の山をシナイ山に、十福を十誠に、耶蘇をモーセに、恩愛の天父をエホバの神に對せしめ、彼此の懸隔實に天地も雷ならないことを教示するのである。

何故に許多の人々が耶蘇の周圍に雲の如く集り來つたのであるか、天國の近けるを説き給ふたからである。天國は猶太人の待ちに待ちたる理想の王

國で、ダビテ、ソロモンの王政にも優つて福なる王政である。當時猶太人は羅馬の隸屬で、其壓制を受けて重税を絞り取られ、經濟上の困苦を嘗めたばかりではない、其最も厭ひ惡みたる多神教偶像教の汚辱をも蒙つて居たので、彼等に獨立心の盛であつた丈、其れ丈其屬國たるを痛歎したのである。國民舉げて上天に號泣したるは羅馬の壓制より自由にせられることであつた。彼等が悲境に陥りたる丈、其丈天國の建設を熱望して居つたので、耶蘇が馬可傳一章の十五節に、期は満てり神の國は近づけり、爾曹悔ひ改めて福音を信せよと、公言せられるや、人民は大旱の雲霓を望むの心地して、耶蘇の周圍に雲集し來つたのである。

耶蘇は親しく其撰拔の十二弟子に圍まれ、目を舉げて群集の善男善女を見、恭しく口を啓いて天國の福音を宣言し給ふた。此宣言は山上の説教といふて、基督教の宗教と倫理とは皆説き盡してある。此宣言は天國の真相を啓示するのみならず、又其憲法をも明にする。天國の王と自覺する耶蘇は威儀堂々天國の新憲法を發布し給ふので、口を啓くといふてある。此口はさて何

の口であらうか、又其口より出で来るものは何んであらうか、この口は即ちヒユウマニチー(人)の口である、ヒユウマニチーの裡面に存在する神は則ちヒユウマニチーの口よりして諄々と其衷情を語り出し給ふのである、其一言一句は即ち神の聲で、千万無量の意味を有する、吾人をして其深長の意味の万が一を語らしめよ。

第二章 十福

心の貧き者は福なり、天國は即其人のものなればなり、哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり、柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ぐことを得べければなり、飢え渴く如く義を慕ふ者は福なり、其人は飽くことを得べければなり、矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければなり、心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得べければなり、和平を

求むる者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり、義きことの爲に責めらるる者は福なり、天國は即ち其人のものなればなり、我が爲に人爾曹をのしり又せめ、譎りて様々の悪言をいはん、其ときは爾曹福なり、喜び樂め、天に於て爾曹の報賞多ければなり、そは爾曹より前の預言者をもかくせめたりき。

註

心の貧きとは靈の貧き有様をいふ、原語のブニウマニは常に靈と譯してある、靈は人の神と類を同うする性情をいふもので、特有なる個人的性質にあらずして、普遍なる共通的性情である、即ち凡ての人類が神と共通の普遍性で、人と人と又は神と人と平等無差別になれる性情である。

此性情は一刻も聖善の神と交らずしては居られない、真正なる宗教と倫理との本源である、神を父とし人を兄弟視し得る人の性情は即ち此靈の性情

である。この靈の薄弱を自覺し、この靈の貧乏を感發するものを靈の貧き者といふ。之を別言すれば深く靈の宗教的不満足を感じ、又倫理的不完全を覺つて居るものが即ち靈の貧き者である。天國はイスラエル民族の理想の神政である。天國は元來神の國のことである。イスラエル民族の政治は神政で、此神政の完美したものを神國といふ。古へより預言者等が理想したるもの、其形狀についての意見は固より自から異同がある。耶蘇の腦裡に存する天國と普通人民の心頭に浮ぶ天國とは固より同日の談ではない、しかし兎も角も各々が理想し得られる丈の最大幸福の理想國であるのである。哀む者は人生の現狀に安んずることの出来ないもの、其心情に永遠の眞理があこがれて、遣る方なく哀慟する者は即ち哀む者である。安慰を受くるは天國の顯現に由てのことである。柔和なる者は道理に従順なるもの、本心の聲を靜聽するもの、從て患難に處して不平を鳴さず、貧窮に處して苦情を言はざるもの、換言すれば絶對的に神の聖旨に従順なるものである。かやうの人は決して柔弱の人ではない、外強うして内弱き人と正反對で、外弱きやうにして

内極めて強い人をいふ。(一)耶蘇の如き保羅の如き人は即ち柔和の人である。人我が右頬を撃たば我れ左頬を轉じて彼をして之をも撃たしむるは
(一)我は心柔和にして謙遜者なれば我軀を負ふて我に學べ。爾曹心に平安を得べし。馬太土の二九、乳母その赤子を養ふ如く我爾曹の中にありて柔和にせり。結

撒前一の七。

土地を嗣くのである。假令尺寸の地であるとも、天を仰いて恥しからぬ權理を以て土地を所有するので、必ずしも法律上の所有權ではない。地球上の土地は結局天に従順なる者の所有に歸するといふ意義である。飢え渴く如く義を慕ふ者は義に飢うる人である。義とは人の達し得べき至善である。或は誠律の義もあり、或は信仰の義もあり、或は信條の義もあるが、耶蘇の義は仁愛の義である。各人の深き心底より發し來る善意志の義である。此義に飢え此義に渴く者は既に此義の美味を知り、其能力を自覺したるもの。必ず飽くことを得とは義の顯現である。耶蘇の人格に由て、凡て義に飢え渴く者は眞の義を見、又之に同化することを得るので、満足が出来るのである。

矜恤ある者は人の不遇や弱點を思ひ遣つて憐憫の情に堪へぬ者である。矜恤は基督の著しき徳性で、税吏罪人娼妓等下劣の人々に無限の同情を注ぎ給ふた所である。何西阿書六章六節の「我れ矜恤を愛して、祭祀を愛せず」とは豫言者ホゼヤの言、耶蘇此言を引いて當時の無情なる宗教家をいましめ給ふた。矜恤を得とは神より之を得るのである。矜恤ある者にあらざれば神より矜恤を得可らず。(一)吾人の罪が赦される條件は即ち矜恤である。心の清き者は情念の清きをいふのである。邪念なく、妄念なく、嫉妬猜疑なく、一筋に至善を渴仰して餘念なき清淨赤誠の情念を有する者が即ち心の清きものである。心を盡して神を愛すべし。

るといふ至誠の情念が此清き心である。醇乎として醇なる矜恤に充ち満る者は則ち心の清き者、神を見るは聖人の最も希ふ祝福である。神を見るとは自己の清き心情に照らして見るのである。哥林多後書三章十八節にボウロ

(一)爾曹もし人の罪を赦さば、天に在す爾曹の父も亦爾曹を赦し給はん、然れども若し人の罪を赦さずば、爾曹の父も爾曹の罪を赦し、給はざるべし、馬太六の一四、一五、及同十八の二四以下の比喩を見るべし。

が「我等帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮いや増りて其同じ像に代る」といふたやうに、矜恤の神を見るのである。愛する者は神を識る、神は即ち愛なればなりとは此邊の消息である(約翰四の七八)「和平を求る者の和平は神人の和平と人々の和平とである。耶蘇は人々をして神を父と叫ばしむるやうに、天父の無限なる至情を啓示し給ふた。彼れの天職は神人をして親愛の父子たらしめ、又人々をして兄弟たらしむるにある。彼れが神子たるの資格は此使命を遂行する熱血、至誠に存する。故に凡そ此使命の遂行に盡力する者は神子と稱せられる。神子とは神と同情の靈性を發揮するものである。義きとは耶蘇の人格に由て示されたる博愛仁義で、之を自己の身上に修め成すのみならず、之を廣く天下の社會に實施せんと奮勵するが故に、彼形式的義を以て自負する人々に排斥せられ、迫害せられるをも厭はざる人は必ず天國の祝福を失はないものである。我が爲の我は耶蘇自からを指すのである。義は抽象的に存するものではない、必ず人物を待て始めて存するのである。耶蘇は則ち義の人格で、耶蘇の興廢存亡は則ち義の興廢存亡で

ある。又天國は則ち此義の社會團體であれば、耶蘇の黨なる故を以て迫害せられるは、則ち建國者となり得られるの辛酸であるから、天國建設の曉に於て享受する所の幸福は、亦言語を以て名狀すべからず、只欣喜踴躍するの外ないのである。天に於て報賞多しとは、靈界に於ての祝福である。靈界は必ずしも死後の世界ではない、清き心の境界であるので、現在より始まりて永遠無窮に至る。爾曹より前の預言者をもかくせめたりきとは、古への形式的義を旨とした俗輩が其時の靈的預言者を迫害したやうに、今の形式的義に熱中する俗輩が精神的義を旨とする爾曹を迫害するといふものである。

解

古への宗教は威嚇の宗教であつたが、耶蘇は祝福の宗教を啓示し給ふ。祝福は必ずしも來世のそれではない、此世に於ける祝福であつて、此世の中を清め、此世の有様をして上天の状態に變せしむるものである。此祝福にあづかるものは先づ貧人、即ち靈の貧しき人であつて、眞に靈の貧しきを自覺し、神の前に深く謙遜して天國の恩恵を受くる心情あるものか、くの如き祝福は

自からを義とする、又人に義とせられるパリサイの人の受け得るものではない。此貧者について天國の祝福を受くるは哀む者である。世の不完全を歎き、人生の墓なきを哀み、分けても自己の罪惡を後悔して、哀む者は其心の奥底に於て、既に罪惡に打勝ちたるが故に、中心安慰を得、之をして實に永久に至らしめ得るのである。彼のパリサイ人が野心勃勃として支配權を得やうと熱心するに引替へて、功名富貴を求めず、天をも怨みず、人をも尤めず、辭に其境遇に處して其分を盡す柔和なる者は、却て地上に於て幸福の生涯を送り、凡ての義人の上に来るべき祝福は、其人の頭上にも下り、大勝利を得て、地上に於て眞の支配權を賜はるに至る。福なるかな、眞の義に飢え義に渴く者は中心に於て義に飽き足ることが出来る。彼のパリサイ人が誠律の義に熱心して眞の義に達するをえない、憐むべき禍の生涯とは、日を回うしては語られない。耶蘇自から憐憫に充ち満ちて、其兄弟姉妹の罪咎を赦しいたはり給ふやうに、憐憫を人に施す者は、既に耶蘇と同情の人であれば、神の憐憫を了解し得るの福がある。更に心の清き者に至りては、人の心腸を鑿し給ふ清

き神の交際に入るものであれば、神の知己となるの祝福がある。彼のパリサイ人が信條を重んじ、洗ひ潔めを旨とし、儀式を専らとするに由て、到底神に見ゆることの出来ないとは、雲泥の相違がある。和平を求むる人の福に至ては、實に神の子と稱せられることである。彼のパリサイ人は宗派心に驅られ、人を排斥し、兄弟を疎外し、終に神より悪魔の子と呼ばれるに反して、神と人との和平を求め、人と人との和平を求め、凡て此和平の妨碍となるものを取り除く人は、實に神の心を得たるものであつて、神と同情同心の人で、取も直さず神の小體である。此の如き神の家庭を地上に建設せんが爲に、パリサイ人の如き形式的義を重んずる人々に責められ、惡まれるは却て大なる幸福である。蓋し天國の凡ての祝福は既に此人の所有となつて居る。耶蘇は是等の義人に卒先して、精神的義の國を建設せんが爲に、迫害を受け給ふのであるが、此眞の義人と主義を同うするの故を以て、罵詈せられ、厭惡せられ、誹謗せられ、迫害せられるは、最も喜悅すべきことである。神の子キリストと同心同腹の人となり、同志同主義の人となり、義人の遭難をも同うするに至つ

ては、亦何の不足する所があらう、宜しく欣喜雀躍すべきである。天上界に屬する靈の悦樂祝福は實に多いのである。今基督と其同志者とを迫害する俗輩は、則ち古へから其統系があるので、むかしは其當時の預言者を迫害したのである。しかし預言者の系統に屬する者の祝福は、永久に保全せられるのであれば、預言者と苦樂を共にするに至つて、義人の祝福も亦其極致に達するのである。

論

以上の祝福を路加傳のそれに比して考へて見れば、路加六の二〇以下、前者は後者を布衍したるものと思はれる。路加は單に貧者といふて、靈の貧者といはない、單に飢えたる者といふて、義に飢うるといはない、又單に哀む者といふは彼と此と同様であれば、馬太は貧者の意を解して、靈の貧者といひ、餓者の意を解して、義の餓者といふた、之を以て考ふれば、耶蘇は馬太傳の如く、いはずして、路加傳の如くいひ給ふたるや、明であらう。馬太傳は基督教會が耶蘇の意を解したるものと見え、(一)古書の引照も、靈の貧者といはないで、

單に貧者といふてある。雅各書二の
 一以下七節を玩味すれば最元始教
 會の聲が社會變遷の新狀態に對し
 て反正を示したる跡が見える。又柔

(二)クレメント講義録一五の一〇ヤコブ
 カリフ書二の三には單に貧者と引照し
 て豊の貧者とはいふてないとブライデ
 レムはいふ(元始基督教第一の五六〇頁)

和なる者の一節が毫も其反響を路加傳に見せないのは、恐らくは詩篇三七
 の十一のキリシヤ語譯より其儘引照し來りたるものと思はれる。乍併元始
 教會は能く耶蘇の眞意を解し得たものといふべきである。彼貧乏主義を固
 執して貧乏の本義に通曉し得なかつたイビオ派の如きは、寧ろ耶蘇の眞意
 を了解し得なかつたので、全く時勢後れしたものとといふべし。吾人は馬太の
 註解と布衲とを以て寧ろ其當を得たものと考ふるのである。

貧乏は當時猶太人の實情であつた。貧乏も見やうによれば強ちに不幸では
 ない。古へり社會は不完全であるから、義人は多く貧乏である。其主張する所
 の義が社會の風俗習慣と合はなければ、どうしても逆境に立たねばならな
 い。義人は決して富貴を厭ふ者ではないが、其義を賣つて富貴を買ふことは、

義人の肯じない所、彼れは、義を抱いて貧乏に安んずるのである。是れ
 が猶太國に於て多くの義人が、~~此~~境遇にあつた。是れは境遇に合はない立場よ
 り、無據貧乏に處する義人の、~~下~~であるが、眞個の義を取らんが爲に自から
 貧乏を擇ぶ義人もあるのである。此義人の觀る所によれば富貴利達も浮べ
 る雲の如きである。試に思へば、朝には紅顔夕には白骨なるもの、人生の貧苦
 ではあるまいか、集散離合は人生の貧苦ではあるまいか、無常轉變は人生の
 貧苦ではあるまいか、歡樂極つて哀情多きものは人生の貧苦ではあるまい
 か。是れ佛菩薩が富貴榮花を擲つて雲水の身と自から成つた所以である。更
 に一步人心に歩み入つて見れば、朝に眞理と認められたもの、夕に誤謬となる。昨
 是今非は人智の貧乏ではあるまいか、限ある生命を以て限りなき慾を有す
 るは人情の貧乏ではあるまいか、猜疑嫉妬は人情の貧乏ではあるまいか、心
 の欲する所之を實行すること能はざるは意志の貧乏ではあるまいか、善を
 行はずして惡を行ふも意志の貧乏ではあるまいか、是れは實に倫理界の貧
 乏である。更に奥深く歩み入つて見れば、之れより甚しき貧乏がある。永遠の

神と性情を同うしながら、神と相去ることの天地も雷ならざるを感發するの貧苦である。神を父として親むべき靈を有しながら、之を恐れ憚かつて戰慄するが如きは、貧苦の最も甚しきものである。人類を同胞視すべき靈のあるべき筈に、却つて之を仇敵視するが如きは、貧苦の最も堪え難いものである。併乍是等の靈の貧乏を自覺するは、則ち天國に入る門であれば、耶蘇は寧ろ其最も福あることを認め給ふた。

故に人生の貧苦を哀むは、眞實の福である。貧苦の境涯に居つて貧苦を知らない程不幸はあるまい。其貧苦を知るとも、之を痛く哀まざるときは、其憐むべき境涯より脱することが出来ない。是れ程不幸なる状態はあるまいと思はれる。大患者がその大患なることを致へられるも、その大患なるの苦痛を感ぜざれば、之を醫するの念切ならず、苦痛必ずしも不幸にあらず、之れあるが故に却て福である。耶蘇は、ルカの猶太人が肉體及精神上悲哀極りなき状態を見て、却て其最も幸福なることを示された。猶太人が理想なきの人民であつたら、苦痛も悲哀も堪へられぬ程ではなかつたらう。又此理想に達し得ら

れる元氣を自覺するともなかつたら、左程に悲鳴する筈もなかつたらう。彼等は過去歴史を顧みては、如何に幸福ある榮光の地位より墮落したるかを思ひ、又其神は彼等を此墮落の悲境より救ひ出し給ふとの約束を立て給ひたるを考へ、或は其過去の状態に比し、或は其將來の理想に比し、又は至上の神を奉載しつゝも、猶逆境に居らねばならぬ問題を理解し得ず、悲哀に悲哀を重ねたのである。耶蘇は此悲哀が即ち歡樂を得る道であることを看破し、却て其幸福なるを啓發し給ふた。基督教は皮相の樂天教ではない、悲哀極つて後始めて發する樂天教である。如何にして安慰を得べきかといへば、人間本來由て立つべき無限絶對至愛至仁の神を抱き、否寧ろ神に抱かれて、邪情惡念を一掃し、又從來の社會を根底より革新して、道義の新天新地を形成し、本心の希望する境涯を造り出して、以て眞實の安慰を得、仰いては天父に事へて孝順を盡し、附しては同胞兄弟の情を完うして、靈の安慰を受くるに至る。耶蘇は此安慰を分與するに足る能力を自覺したる故に、悲哀の人に向つて福音を約束し給ふたのである。

自から貧苦を嘗めて、其苦境に呻吟する者は、自然に柔和の品格を修養するに至る。然れども此逆境に處して、苦情を詠へ、不平を鳴らし、堪へ忍ぶこと能はずして、反逆を企て干戈に訴ふるが如きは、無謀の策にして、自己の徳性を傷ひ、又災害を自己の頭上に招くのみである。當時の猶太人が此無謀の舉に出で、家を亡ぼし、國を亡ぼさんとなしつゝあつたのを見て、耶蘇は此無謀の暴行に代ふるに、柔和の品格を養成すべきを教へられた。是れ實に万善の策である。此反逆は陽に愛國の行爲と見えて、實は國を亡ぼし、此柔和は陽に軟柔主義と見えて、實は土地を鬪くのである。耶蘇が猶太人を救はんとし給ふの眞意、中々に深かつたのが分る。柔和は決して臆病怯懦に隣する者ではない。柔和は却て艱難困窮に練り鍛へられた品格である。血氣の勇にあらずして、眞の沈勇である。此柔和は活ける神に對してのそれである。上天に對する柔和は純良優美にして、又豪壯勇健である。猛將の下に弱卒なしといふが、弱卒は猛將に向つて不平をいひ、苦情を鳴らし、遂に猛將に従ふことを肯じない。只之に快く従ふものは勇卒に限るのである。懶惰なる番頭は勤勉なる

主人に向つて不平を鳴らす、只勤勉なるものばかり能く其主人に従順なるを得る。無智なる婦人は賢明なる良人に苦情をいふ、只之に従順柔和なるは賢婦のみである。活ける神に柔和なる者の品性は推して知られるであろう。神に柔和なる者にして始めて、世人の暴行虐待に向つて柔和なることが出来る。馬太が貧き者と哀む者との次に柔和なる者をおいたのは、深い意味あることと思はれる。耶蘇が世に來られたるは人々を未來の天國に移すが本意と思はれない。寧ろ人々をして此地上に嗣業を得て安堵せしめんが爲であろう。先づ嗣くといふことを玩味せねばならぬ。人道を踏み公道を行ひ、上天に柔和にして土地を得たる者にあらざれば、皆盜賊である。眞の嗣者ではない。假令尺寸の地であつても、上天に柔和なるを以て得た土地は、則ち上天の恩賜にして、是れが眞實の所有である。上天は終に柔和なる者に世界の土地所有權を賜ふのである。世界の現状を見る者或は耶蘇の言を空想と嘲けることもあろうが、是れ彼盜賊の所爲を是認して、智謀と羨むと、何んで異つたところがあろう。天道は決して欺き得らるべきものではない。假令上天に柔和なら

すして、土地を所有する者世界多々ありとするも、是等は天國の建設と同時に亡ぼされるのである。天國果して地上に顯現すべきものならば、世界の土地が柔和なる者に歸するや疑いはなからう。眼前無道を以て數千の町歩を所有せんよりは、寧ろ公道を以て尺寸の土地所有者となる方が最も幸福である。是れ亦猶太人を刻下の災害より救ひ出す萬善の策であつて、更に永久に傳ふべき勝利の福音である。柔和主義は基督の人格に發揮せられて、爾後其(二)教會の徳性と (一)人もし受くべからざる苦難をうけ、神を敬ひて之を忍ばなつたのである。

人心は飽食煖衣を以て飽かしむべからず、之を以て此心を飽かしめんとす

肉體の食慾を飽かしめるのと、何も異らないのである。人心は功名利達を以

得前書二の一九以下

て飽かしむべからず、之を以て此心を飽かしめんとするは、猶蕪を以て食慾を満足せしめんとするやうである。限りあるものを以て人心を飽かしめんとするは、是れ此心を欺くのである。人心は義理に飢え、博愛に渴し、神恩を求る者である。然れども餘りに此本心を抑壓するか、又放擲して養育せざるときは患者の食慾を失ふが如く、義を慕ふの慾望を失ふに至る。これほど人に取て憂ふべきことはない。之に反して食慾を失ふたる患者が頓に食慾を發し來るは、則ち恢復期の兆候であるが如く、義に飢え渴き始むるは、則ち健全なる精神の發生し來るのであつて、其幸福の大なるは實に死より生に移ると一般である。義といふは何んである。之を内にしては人の意志が神聖なる意志に合同一致する状態である、之を外にしては人の行狀が神の動作に一致和合する品行である。蓋し神の意志は至善であつて、其行動は一々此至善の現象に外ならない。此至善は則ち愛である。人心は此愛の義に飢えて、始めて其飢うるべき者に飢うるものであれば、神の義に飢うるほど幸福なるはないのであらう。古人曰く志は成るの半なりと、既に此切實なる慾望の發する

は乃ち義人の境涯に踏み入るのである。此義に飢うる人心を飽しめやうとして、誠律や信條や儀式や無意義の神秘などを主張するものがある。是れ葉や瓦石を以て胃腑に満たさんとするので、人心を欺くもの之より甚しきはない。若し夫れ義に飢えて誠律や信條などを與へらるべきならば、義を慕ふ者は決して福ではない。吾人は寧ろ其不幸なるを痛歎せざるを得ない。然るに耶蘇が之を福なりと祝し給ふ故は彼れ其高明正大なる人格を以て、此渴仰を満たさんと望み給ふからである。彼れ其人格に實現し來りたる限りなき天父の恩愛を啓示し給ふからである。耶蘇は實に義ある人格の顯現であれば、耶蘇は則ち其身を以て人心を飽かしめ給ふことの出來るのである。耶蘇が此福音を宣言せられたるは、眞に義人の請求に應ずるものといふべきであらう。

嚴格なる義人は恰も秋水の如くにして、矜恤なきの弊なきにあらざれども、天國に於ける眞正の義は限りなきの矜恤を生ずるものである。形式の義は禮義の義であれ、信條の義であれ、兎角人の罪を咎めて、直に之を審判し、永遠

の宣告を下すの弊あるを以て、耶蘇は屢之を戒しめ給ふた。他人の弱點を思ひ遣らすして猥りに之れを罵詈譏し、之れを慘酷に批判するの似て非なる義は、耶蘇嚴しく之れを排撃し給ふた。之れに反して、天國の眞正なる義は他人の弱點を思ひ遣り、他人の罪惡を赦し、限りなきの同情を同胞に傾注するものである。約翰第一書第一章九節に、神は信實なる公義者なるが故に、必ず我等の罪を赦し、諸の不義より我等を潔むとあるは、則ち天國の義である。

矜恤は基督の來り給ふたる動機である。神が我れ矜恤を好みて、祭禮を好まずと、教示し給ふたるは、乃ち救世の眞義である。故に此矜恤ある者は亦矜恤を受くることを得るのである。此矜恤は神の矜恤と同情なるものであつて、神の矜恤を我れに引き付け、又神に引き付けらるゝ自然の因縁である。愛と愛と相引き、義と義と相引き、矜恤と矜恤と相引く。矜恤ある者は限りなく神より矜恤を蒙ることを得る。故に矜恤ある者は福である。

心の清きとは明鏡止水の如き消極的の状態をいふのでない。明鏡に物影の

うつり、止水に秋月のやどるは如何にも奇麗なれども、活潑なる心の本體を圓満に説明せる者とは謂はれない。邪念忘想の取り去られたるばかりでは、未だ以て心の清まりたりとはいはれない。餓え渴く如く義を慕ひ、又矜恤を施すごとき、煖き燃ゆる情念は神彼れ自身の潔き活動である。神は心の明鏡にうつしてのみ之れを見るべきにあらず、神の聖像を我が身上に活人として、神を實現するのである。是れ眞に神を見るの良法である。客觀的に神を拜み見ることは、榮譽は則ち榮譽なれども、主觀的に神の面影を自己の心底明鏡に映するに若かない。主觀的に神を映することは、確實は則ち確實なれども、神の聖像を自己の身上に活人となして、實現するの適切なるに若くものはあらざるべし。基督愛を實現して能く愛の神を見給ふた。〔約翰傳一章十八節〕約翰が基督の神識を評して、未だ神を見し人あらず、唯生み給へる獨子即ち父の懷に在る者のみ之れを彰せりといへるは、最も能く神を見るの秘訣である。神を見んと欲するは人の至情である、人の最も高等なる欲望である。此至情と此欲望とを満足せしむることの、如何ばかり大なるは、父子相見、

夫婦相見、君臣相見るの福なるに優るのである。然かして此幸福は義と仁と信とを以て心を清むる人の頭上にやどるのである。

和平とは兄弟相和らぎ親み、夫婦相和らぎ合ふばかりでない、敵と敵との和平、國と國との和平、人種と人種との和平、宗派と宗派との和平、黨派と黨派との和平、天地万物の和平を實現せんと欲望し企圖するのである。此大和平を實現せんとして、神子基督は地上に來り給ふた。此大和平は容易く得らるべきものではない。此大和平を實現する爲には、萬難を侵して白刃をも蹈むの勇斷なくてはならない。此大目的に向て雄進猛斷するは、則ち神子基督の行爲である。神が基督を遣はし給へるは、此大目的を達せしめんが爲で、基督は之れを實現せんが爲に十字架にさへ磔せられ給ふた。是れ正しく神子の本領である。故に和平を求むること基督の如くなるものは福である。蓋し神の子と稱へらるゝことを得るから、神の子とは神と行爲を同ふする者をいふ。神と行爲を同ふする者は亦神と性情を同じうする所あるべきである。心の清き者は神の聖像を自己の性情に實現するものであつて、其を實際行爲上に

顯現せしむるは、則ち天地万物の和平を求むることである。此行爲の事實を以て人は始めて基督と偕に神の子と稱へらるゝを得るのである。人たる者の尊榮之れに比ふべきものはない。稱讚と貴尊と光榮とは則ち神子の盛徳である。是れ人間の極致である。

義しきとは神の意思と人の意思と一致和合したる状態であつて、以上七福の徳性を總括したるものである。一言にて盡さば、神子の徳性品格である。此義の爲に責めらるゝとは此義を實施するが爲に、世上の反抗を受くるのである。此大反抗を受けて勞易することなく、愈進みて奮戦勇闘する者は、既に天國の福徳を有するが故に福である。爰に天國とあるは福徳の總名であつて、天國は即ち其人のものとあるは、第一福の意義とは其淺深固より比ふべからず。心の貧しき者の福なるは、將に天國を其所有と爲さんとするにあつて、義の爲に責めらるゝ者の福なるは、既に天國を所有し居るの境涯である。

義は人格に存す。人格を離れて義は空に抽象的に存するものではない。爰に

基督が我れと言はれたるは義の生命である。

此我れなくば天國は空想である。理想のみである。今此我れあるが故に天國は實有である。此我れは世の不義罪惡と戦端を開いた。不義の人格は此義の人格と相容れない。此不義の人格に罵詈せられ、誹謗せられ、惡口せられ、迫害せられ、敵視せらるゝは、是れ其義の味方であつて、義の人格を代表する基督の旗下にあるを證明するのである。其福なること亦何に譬へやう、其報賞は不義世界の名譽利達でない、至聖至愛なる神の在します天に於ける光榮福利である。天とは青雲の天でない、神の在す聖なる境涯である。更に又此迫害を榮譽とすべきは則ち預言者が昔時受けたる所のものであつて、預言者と苦樂を供にするもの、預言者の志を継ぎ、預言者の事業を全ふするのである。天國は遽かに天より降臨すべきものでない、義人が其公義博愛の槍劍を掲げて開拓する所の新天地である。基督は則ち此義軍の將帥で、其教徒は則ち其兵卒である。世上の罪惡を撲滅するに至るまでは、天國は地上に之れを見るべからず。天國の建立せられざる間は、義人は枕を高ふすべからざるは當

り前である。故に義人の生涯は戦争である。然かして世上は此戰場、又此戦争を宣言したるは、義人の方からであれば、義人は勇奮戦闘して以て勝利を得る外はない。天國は義人自ら奮闘して開拓したる天地であつて、高價を以て賤ふべきものなり。馬太傳十一章十二節基督曰く、勵みたる者は之れを取ると其れ之をいふか。

結尾

以上は天國の福音である。始めの七福は七樂ともいはれやう。貧極まれば富あり、哀極まれば喜あり、柔和なれば地をつぎ、餓え渴く如く義を慕へば之れに飽き、矜恤あれば上天の矜恤を受け、心清ければ神やとり給ひ、平和を求めれば神の子とあがめらる。貧は衰を生じ、哀は柔を生み、神に柔和なれば義を慕ふの情切なるべく、義を慕ふ者は矜恤深く、矜恤深き心底は流水の如く神像輝くべく、神像輝く所には平和の聲高く、平和の聲高き者は則ち神子である。基督信條を説き又は祭式を示して天國に入るの條件となさず、唯人心の状態を以て天國に入るの條件となし給ふた。終りの三福は始めの七福を總

合一括したるものであつて、天國は一種の理想にあらで、義人の建設すべき實在たることを明にしたのである。天國が如何に道義的なるかは、又如何に實際的なるかは、以上説き明したることにて疑ひなひのであらう。

第三章 クリスチャンの使命

爾曹は地の鹽なり。鹽もし其味を失はば、何を以てもとの味にかへさん、後は用なし、外に棄てられて、人に踐まるゝのみ。爾曹は世の光なり。山の上に建られたる城は隠るゝことを得ず。燈をともして斗の下に置くものなし。燭臺に置きて家にあるすべての物を照らさん。斯の如く人々の前に爾曹の光をかゝやかせ、されば人々爾曹の善行を見て、天に在す爾曹の父を榮むべし。

註

爾曹は靈の能力と價值とを發揮するクリスチャンを指す。鹽は生物の腐敗を止むる保存力にして、又食物に美味を加ふるもの。地は世界人類を指す。ユダヤの鹽は其鹽味を失したる後にも、尙其形を有するが故に、道路に棄てられて路かためとせられる。猶我邦に於ける灰燼の如し。世は地と同じく世界人類を指す。光は倫理宗教の光明である。神は天地万有の光明、神の子たる基督は人類の光明。其の如くクリスチャンは世の光明である。蓋し基督の兄弟にして神の子であるから。山上の城はサフエド府又はタボル山の城を指すのであらう。祝福の山より見れば後者は南方に前者は北方にあたる。山上の城は卓爾たるクリスチャンの品格をいふ。斗の下に置くは徳を隠し光を蔽ふの意。人々の前に爾曹の光をかいやかすはクリスチャンの社會に於ける積極的態度をいふ。

天は靈界なので、日月星辰の世界をいふのではない。神は靈にして又靈界の主宰者である。有形の万有界は無形靈界の現象である。故に神の所在は現象界といはずして靈界といふのである。爾曹の父とは神を指すのである。神は

クリスチャンの父にして、クリスチャンは神の子である。父子は親愛の極致をいふ。クリスチャンのクリスチャンたる性情は神と類を同うするそれであるから。若しクリスチャンが神の愛であるやうに、相愛することが出来れば、神と無限の親愛に入ることを得るのである。

解

儀式の義にあらず、信條の義にあらず、誠律の義にあらず、心の奥底に存する信仰の義を見出して、之を發揮する。言ひ換ふれば十福に相當する義の資格を有するクリスチャンの使命は何んであるかといへば、道德の力を失うて腐敗しつゝある。又神に厭はるべき状態に陥りたる人類世界に道德の能力を與へて、之を保全し、之れに團欒和合の美味を加へて、神の悦び給ふ供物として、之を神前に献納することである。然るにクリスチャンが罪惡の慾情を漸滅し、然かして世界人類を靈化する靈能を失うたら、其使命は忽ち奪ひ去られて、無用の長物となり、其甚しきは人類世界にも厭ひ棄てられ憐むべきものとなる。クリスチャンは基督に啓發せられたる眞理を天下に發揚して、

人類の迷信と誤謬と矇昧とを照らし開くべき使命がある。クリスチャンは基督に靈化せられ、神の如く光明の人となりたれば、神の光明なるが如く、基督の光明なるが如く、亦世界人道の光明である。山上の城が巍然として青雲に聳え、人目に明なるやうに、クリスチャンの高明正大なる品格は超然として俗界の上に秀で、どうして隠れることの出来ないものである。燈は物を照らす筈のものであるに、之を升の中に入れてしまつたら、無用となるやうに、クリスチャンも社會を離れて獨り其徳行を守りては、何の用にも立たぬのである。然るに之を社會に投じて、其指導となるときは、天下の人々は始めて其愚蒙を開き、光明の本源であるクリスチャンの天父を尊崇し、クリスチャンと同じく神子の祝福を享るに至るのである。

論

光と鹽との比喩は能くもクリスチャンの資格を形容したものである。光は智の功用をあらはし、鹽は情と意との作用を示す。鹽が魚肉や獸肉の腐敗を止め、之を保全するは道義的意志の能力を示し、其又滋味を加へて食ふ

に快からしむるは情愛の美を示す。故に光と鹽とはクリスチャンの智情意の圓滿なる品格を形容し盡して居る。蓋し地は天上の清淨なるが如くならずして、無常慕なき肉欲の生活を縦にする所である。世は罪惡の横行して是非善惡の區別すら判明せざるやうになつて居る。此地上の人類界に顯現したるクリスチャンは、基督に靈化せられたるものなれば、既に上天の靈界に屬するものである。既に上天のものであれば、地上の人類界を靈化するの資格がある。既に此資格あれば、亦従つて之を救済する使命があるのである。先づ其光明たる資格と使命とを論ずれば、世は神を識るの明に乏しく、公道を認むる道理に暗く、正しき信仰なきが故に、本心の眼明ならず、道徳を磨かざるが故に迷信に陥り易く、偶光明なきにあらずと雖も、流星の如くして消へ、花火の如くして散ず、到底暗黒を照らすこと能はざるのである。クリスチャンは基督の指導に由つて、眞實の義は儀式にあらず、新條にあらず、誠律にあらずして、乃ち貧しき心に存し、悲む情に存し、義に飢うるの熱誠に存し、人を矜恤する愛情に存し、邪意妄想なき心底に存し、和平を求むる赤心に存する。

を發明したれば、儀式を宗教とし、信條を信仰とし、戒律を道德とする宗教道徳界の光明である。況んや戒律をも守らず、儀式をも行はず、只肉欲の促す儘に行動する彼流連荒暴の社會に光明たることは、辞せんと欲するも能はざる所である。其鹽たる使命について言へば、地上の人々は道義的意志の薄弱なるが故に、其是とする所を行ふを得ない、其非とする所を去ることを得ない、義を見て猛進するの元氣なく、非を見て怒號するの至誠なく、私利私慾を貪つて、獸慾に飽き足らないのである。然かして彼所謂宗教道徳家といふものは、乾燥無味の教理に盲従し、之に違反するものは天國の人たるを得ずと妄想し、刻薄殘忍に至らざるなき偽善を旨とする世界に於て、クリスチャンは碎けたる靈と眞理とを以て神を拜し、矜恤と博愛とを以て人を遇し、義の爲には迫害を厭はざる、否、迫害を受けて却て、欣喜踴躍する元氣を以て、義の爲に戦ふものであれば、社會の鹽とならざらんと欲するも得ないのである。人類界は愈腐敗して神の厭ひ給ふ所となる、神に悦ばれるクリスチャンが社會の鹽となりて、之に滋味を加へ、神前に献するにあらざれば、社會は到底救

はれないのである。神は人類の祭壇に献じつゝ、ある儀式を悦び給はない、其信條の朗讀を厭ひ、其唱歌の虚禮なるを憤り給ふのである。眞實のクリスチャンが至誠と博愛とを以て社會の精神となり、良能良知となり、之を靈化して神前に献するでなければ、人類社會は神の悦び給ふものとはなられない。クリスチャンたるもの宜しく其使命職分の重大なるを識り、自重自尊して、其致命の辞すべからざるの自認を確實ならしめねばならぬ。クリスチャンの立場は獨り山上の城の如く高く聳えて、衆目に仰き見らるべきばかりではない、最も安全なる地位といふべきであらう。義人は人爵なくとも天爵がある、其高きこと王公貴人の尊敬を引くに足る。又義人の地位が堅固なるは爵位の如きものではない、朝に高位に昇り、夕に貧賤の身となるが如きではない。義人の義人たる品格は即ち其地位の遠久堅固なる所である。富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、貧賤も移す能はずといふ地位である。其品格の巍々たる、又堂々たる、猶山上の城や塔の如きである。山上の城や塔は衆目の注目する所、軍隊の攻撃が集中する所、天下の毀譽褒貶が

集合する所なれども、固より堅忍不拔の精神と堅牢不動の要害であれば、泰然自若として侮り奪ふべからざるものがある。斯くの如くクリスチャンは社會の裡面にありては、鹽となりて、之を保全し、社會の表面に發えては、光となり、城となり、之を教導するが故に、天下の人々は此高明なる品格と雄大なる行爲とを見て、始めて精神的仁義の能力を認識して其本源なる神を崇敬するに至る。是れクリスチャンの使命である。世界何の處にか此の如き重大なる使命があらう。

路加はクリスチャンが地の鹽たる比喻を其大なる勇猛心と和睦心との説明として紹介した。馬太が單に爾曹は地の鹽なりと、前後の關係を取り去つたるに比すれば、(一)路加の紹介の方が餘程耶蘇の意を了解するに便利なのである。

然れども馬太は多くの人々耶蘇と偕に行きしが、耶蘇以上の十福に連ねたので、之と連絡して考へて見れば、クリスチャンたるものは兎も角も十福を具有して居るべき筈、殊に義の爲に迫害を厭はない

願みて彼等に曰けるは、凡そ我に來りて、その父母、妻子、兄弟、姉妹、又己れの生命をも惜む者にあらざれば、我弟子となんことを得ず。又其十字架を負はせしめて我に従ふ者は我の弟子となんことを得ず。爾曹誰れか城を築かんに、先づ坐して其費え、この事の成功するまでに足るや否や計らざらんや。恐くは基を捨てて之を成し能はずば見る者皆あざわらひて、此人は築き始めて成し遂げざりしといはん。又王いで、他の王と戦はんに先づ坐して此一万人をもて彼が二万人に敵すべきや否やはからざらんや、もし及ばずば敵なほへだたれる時に使を遣して和睦を求むべし。然れば爾曹その所有を盡く捨てざる者は我弟子となんことを得ず。鹽は善き物なり、然れども鹽その味を失つて何を以て之に味をつけんや、田にも養にも益なく、外に棄らるゝなり。耳ありて聽ゆる者は聽くべし。路加傳十四章二十五節以下

ものであれば、耶蘇が路加傳に於て其隨行者に要求し給ふたるものは、既に十福の資格の中に含められて居るのである。燈の比喻も路加は耶蘇の言の前後の意味を説明せんが爲に之を紹介した。エダヤ人が奇跡によらないでは發心することの出来ない、頑迷固陋を照らす光明の比喻として此燈の比喻を紹介し來つたのである。路加第十一章二十九節以下を参照すれば、理性の光明が迷信を照らし明にするに如何ばかり必要なるか、分るであらう。

第四章 憲法(五ヶ條)の序

我れ律法と豫言者とを廢る爲に來れりと思ふ勿れ、之を廢

るにあらざる成就せんが爲なり。我誠に爾曹に告げん、天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂げつくさずして廢ることなし。是故に人もし誠の至微き一を壞り、又其如く人に教へなば、天國に於て至微きものといはれん、凡そ之を行ひ且人に教ふる者は天國に於て大なるものといはるべし。我れ爾曹に告げん、學者とパリサイの人の義しきよりも爾曹の義しきことすぐれずば、必ず天國に入ること能はじ。馬太五の一七より二〇に至る

註

律法と豫言者とは、舊約聖書の總稱である。舊約書を細別すれば律法と豫言との外に歴史もあり、詩歌もあり、箴言もあるけれども、歴史は律法と豫言との史的説明に外ならない、詩歌は之を誦ふたもので、箴言は之を訓諭したのであれば、律法と豫言者との二部が舊約書最大要部である。故に舊約書を總

稱して律法と豫言者といふのである。馬太七の一、二、三、同、一、一、廢る……成就…… 耶蘇は舊約聖書の教訓、約束、理想等を廢棄するが其使命ではない、否却て其約束と理想と教訓との真義を完成するが其使命である。成就にも色々ある、舊約書の誠律を儀文のまゝに之を實行するも成就である、パリサイの人の如きは、この實行を務めたものである。舊約書の神國を豫言者の想像の儘に、建設せんと務むるも成就である、バプテスマのヨハネはこの成就を期したのである。耶蘇は律法と豫言者との精神的成就を期したのであるから、パリサイの人には破壊者と見えた、蓋し形式の成就に注目せられなかつたから、天地の盡ざる……これは律法の神聖にして犯すべからざる權威の證明である。獨り其神聖のことばかりではない、必ず其目的の成就すべき價值の證明である。人目には天地ほど確實なるものはない、よし之が滅することあるとも律法の一小部が廢たるとは決してない。一點一畫は最小の部分といふのである。彼いろはの一點一畫をいふので、瑣末のことである。この一點一畫は固より儀文にあらず、精神の事である。然らざれば耶蘇も亦パリサイ

イの人のみ誠の至微は精神的に見るべきである。然もこゝが見方によりて一毫の差は千里の謬といふ所である。猶太のクリスチャンにはパウロの如きは此天國に於ける至微の人と見られたのである。然かしてヤコブの如き人は誠律の至微を尊守したから、天國に於ての大人と思はれたのである。學者とパリサイの人の義は儀式的義、信條の義、誠律の義である。學者とは舊約聖書に、通曉したる當時の學者である。パリサイ派は専ら誠律の尊守に熱中して其儀文の一點一畫をも破らざるやうに、修行する團體で、當時の猶太の人心を收縦して居つた。爾曹の義は愛に根ざす精神的の義である。すぐれずばとは何の點に於てすぐれるのであろうか。彼此の義は全く其性質が相違して居るので、其性質のすぐれるのをいふのである。パリサイ主義の義では天國に入られないから、耶蘇は此義以上の義を示し給ふのである。

解

當時の學者とパリサイの人々は耶蘇の言論と行爲とを見て、彼を舊約聖書の破壊者と認めたのである。耶蘇が安息日に對し給ふ行爲と言論との如き

は、儘に舊約聖書の破壊者とパリサイの人々に見えたのであろう。是れ耶蘇とパリサイの人との見地が全く違つて居つたからである。耶蘇は其精神的見地より我れ律法と豫言者とを廢る爲に來れりと思ふ勿れと喝破し給ふた。更に語を繼ぎて我が來りたるは之を廢せんとにあらず、其精神的理想を成就せんが爲なりといひ給ふた。律法と豫言者とが其形式的儀文に蔽ひ塞がれて、人々に誤解せられ、埋没せられるが故に、耶蘇は是等の儀文を取り除き又其外皮を拂ひ去り、然かして其眞髓を啓發し、其本義を發揮し、其理想を伸張して、律法と豫言者との眞義と目的とを成就せんことを期し給ふのである。此精神的生命は愈發育して、地上を支配すべきものなれば、決して廢たるべきものではない、必ず地上に於て其目的を達すべきであれば、天地の盡きざるうちに其眞理の一毫一厘も實現せずして、空しく廢たる筈はないのである。律法も豫言者も其細大綱目が決して個々別々に存在するものではない、即ち統一的一個の生命であれば、若し其一小部を破壊して傷害するならば、全體を傷くるのである。恰も指一本たりとも、齒一本たりとも、眼一個た

りとも、之を害するときは則ち身體を不具ならしむるが如く、聊かにも誠律の精神を傷けることあらば、つまり全體を傷けるのであれば、誠律の全部を遵守するものにあらば、天國に於て大人とはいはれないのである。若し小事にても之を軽んずれば、是れ即ち小人である。路加傳十六 小事に忠なるは大事にも忠、小事に忠ならざるものは大事にも忠ならずといふのである。故に誠律を片々にして其輕重大小を論じ、一誠又一誠、一律又一律を修行するが如き形式的の義は、學者やパリサイ派の旨とする所で、此義を以て天國に入ることとは到底六ヶ敷のである。必ず靈眼を開いて律法の真相を看取し、一以て千百の誠律を貫く大道を體達するにあらざれば、決して天國の人とはなられないといふのである。一以て之を貫くものは何んである。パウロ曰く羅馬書第十 愛する者は律法を全うすと、愛する者には何の誠もないのである。此れが天國の唯一憲法で、耶蘇は諒々として是れより之を説明し給へし。

論

前段に爾曹の善行とあるが、善行とは何んであるうか。パリサイ派の見る所とクリスチャンの見る所と全く相違して居る。パリサイ派は耶蘇の行狀を見て律法をなみし、豫言者を輕んじ給ふものとなした。耶蘇は罪人と飲食し、税吏と親しく交り、又安息日に病人を醫し、弟子が麥の穂を摘むを看過し、且食前に手を洗はざりしこともあつた。形式派の猶太人より見れば、是等の行狀は律法と豫言者とを破壊するものであつた。耶蘇を認ふる者が議會に於て馬可傳第十四 彼れ手を以て作りたる此聖殿を毀ち、三日の後手を以て作らざる別の殿を建んと言ひしことありといふた。耶蘇が破壊的行狀をなし、破壊的言葉を吐かれたといふは、彼等の言觸した所である。成程耶蘇の言行には破壊的なる所があつたに相違ない、然るを彼れ自らは我が來りしは律法と豫言者とを破壊する爲にあらず、成就せん爲なりといひ給ふたが、猶太人の其地より見れば、破壊的であつた。此は破壊的といひ、彼は破壊的でないといふ。其相違の因て起る所を考ふれば、律法にも豫言者にも二様の見解がつけられる。一は形骸であり、一は精神である。一は儀文であり、一は理命であ

る。一は皮殻であり、一は生命である。形骸は精神の道具、儀文は理想の衣服、皮殻は生命の家屋である。其輕重優劣は同日の論でない。猶太人は形骸や儀文や皮殻の見地より耶蘇の言行を批判したのである。耶蘇は此形骸や儀文や皮殻を破壊されたに相違ない故に、彼等の眼前には耶蘇は慥に破壊者であつた。然れども耶蘇の見地よりすれば、形骸や儀文や皮殻は永久的のものにあらず、一時眞理を保護するに必要なのみであれば、世移り時過くるときは、寧ろ其生長を妨碍するものとなる。故に耶蘇は律法と豫言者との精神と理想と生命とを發揮せんが爲に、其形骸と儀文と皮殻とを破壊し給ふたのである。耶蘇が我は律法と豫言者とを成就せんが爲に來れりといはれたのは至極尤もであらう。なせなれば、律法の律法たる、豫言者の豫言者たる所は其形骸と儀文と皮殻とにあらずして、其精神と理想と生命とであらう。さらば耶蘇は律法と豫言者との形骸には罪せらるれども、其精神と理想と生命とには義とせられ給ふたのである。此事は基督以前にも以後にも吾人が史上に徴し、又現在の出來事にも徴する所である。ステパノも斯くの如くして

罪せられ、斯くの如くして義とせられ、パウロも斯くの如くして罪せられ、又斯の如くして義とせられ、ルーテルも斯の如くして罪せられ、又斯の如くして義とせられた。此に死して彼に生きる、是れ基督の生命である。クリスチャンは基督主義のものなれば、其着眼點が律法と豫言者との精神にあることは論を待たざれども、凡ての形骸を草履の如く脱き棄ることは亦決して容易の事ではない。初代のクリスチャンが基督の靈を有しながら、尙誠律の瑣末に拘泥して、之を脱却した保羅の如きを厭ふたのである。彼等は誠律の輕重大小を辨明して居つた。然かも誠律の重且大なるものを有するものは、必ず其輕且小なるものを遂行すべしと考へ、パリサイ派の踐行する律法の輕且小なるものを踐行して餘すなきを務めたのである。保羅は愛の中て働く信仰の義を認めたる後は、斷や乎として凡ての形式的誠律を脱却したのである。故に彼は自から誠の小且輕なるものを破つて、人にも其の如く教ゆるものと排斥せられたのである。馬太傳は猶太のクリスチャン派に屬するものなれば、此五章の十九節に於て其保羅に對する初代教會の態

度の消息を漏らしたものと見てもよからう。哥林多前一五の九に於てパウロが自からを使徒の中にて至微といふたるを引き來つて、猶太クリスチャンが極端と認定したる彼れの主義を譴責したる底意が透見せられるのである。故に一九節は耶蘇の言にあらすして、初代教會の聲と思はれる。

クリスチャンの義は學者とパリサイ派との義にすぐれないでは、クリスチャンたるの資格はないのであるが、このすぐれるといふ言葉に深重なる注意を加へねばならぬ。初代のクリスチャンは學者とパリサイ派との形式的義に加へて、彼等の精神的義を立てたのである。義と仁と信との如きは固より重且大なれば、之れを第一として遵奉せねばならぬなれども、物産の十分一を馬太傳第二十三節薄荷、茴香、馬芹に至るまで、一神殿に獻納するとも必要であるとした。パウロは律法の義と信仰のそれとが全く其性質を異にして居ると論じた。彼は信仰の義さへあれば、天國に於ては律法の義は無用といふたが、吾人はパウロの見解を以て最も當れりと思ふ。信仰の義は絶對的に心意の發動に存するのである。此心意の義と形式のそれとは固より同日の論

ではない。この信仰の義を忘れ、又は之に加へて形式的信條や儀文の義を重大視するは、古今宗教家の通弊。天國の門を閉鎖するものは則ち此種の宗教家である。パリサイの人は之を閉ぢて其同胞の入るを許さなかつた。固陋の猶太クリスチャン之を閉ぢて、異邦人を入れなかつた。彼の信條の義を喋々するものは之を閉ぢて多くの具眼者や求道者を入れまじと務むるのである。若し夫れ基督の教示し給ふクリスチャンの義が赤裸かにして宣傳せられたらば、天國の門には雲の如く集り來るのであらう。欺すべきことである。

第五章 憲法五ヶ條

第一條

古の人に告げて殺すこと勿れ、殺す者は審判に干らんと云へることあるは、爾曹が聞きし所なり。然れど、我れ爾曹に告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん、又其

兄弟を愚者よといふ者は集議に干らん、又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし。是故に爾もし禮物を携へて壇に往きたるとき、かしこにて兄弟に恨るゝことあるを憶ひ起さば、その禮物を壇の前におき、先づ往きて爾の兄弟と和き、後來りて爾の禮物を献ぜよ、爾を訟ふる者と偕に途前にある時はやく和げよ、恐くは訟ふる者爾曹を審判官に付し、審判官また爾を下吏に付し、遂に爾は獄に入られん、我れまことに爾に告げん、分釐までも償はざれば必ずそこを出ること能はざるなり。

註

古の人は猶太人の祖先である。出埃及記第二十章十三節 殺す勿れはモーセ十誡中の第六誡である。審判は死刑の裁判である。殺人罪は死刑に當るをいふ。此殺す勿

れの誡が古人に授けられたことは、爾曹がよく聞き知る所である。然どの一言は先を打切つたる言葉で、文儀上モーセの誡律を廢して、精神上之を成就するのである。凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らんと、殺すの精神的眞義は怒るにあれば耶蘇は怒を誡め給ふた。故なくしての語は古寫本になきものもあれば、トルストイの如きは斷じて取らない。愚者といふは一念の怒が口上に顯はれたものである。愚者とは是非善惡の分別を知らぬ者との義、馬鹿野郎といふ意である。狂妄は不敬不忠不孝なものといふ義で、邦語の外道といふにあたる。審判は地方裁判、即ち會堂の七人會判決をいふ。集議は中央裁判、即ち高等法院の七人會判決をいふ。地獄の火はエルナレム城の南方豁谷の火をいふのである。此谷をヒンノムの谷又はヒンノムの子の谷といふ。此谷に列王記下第二十三章十節、耶利モロクの淫祠ありて、子女を犠牲にしたることがあつた。後神殿の灰燼が棄てられ、罪人の死體が投せられて、實に蟲つきす火消えざる汚穢の谷であつた。審判と集議とヒンノムの谷とは皆死刑の場所なれども、審判よりは集議の方重く、集議よりも地獄

即ちヒンノムの谷の方重いのである。怒よりは愚者といふ方罪重く、愚者といふより狂妄といふ方罪重し、然し五十歩百歩にして、妻は怒らざるにあるのである。壇は祭壇である。兄弟は憐人をいふので、骨肉の兄弟ではない、憐人とは天下の人である。兄弟に恨まるゝは兄弟に對して不義無禮あるが爲に恨まれるのである。彼に對し我分を盡さないから起る恨である。爾の兄弟と和らぎは自分の罪咎を認めて兄弟の宥恕を乞ひ、相方和睦し然かして後神前に出でよとの事である。借に途間にあるときは裁判所に訟へられる途中である。はやく和げよとは一刻も早く和睦すべきをいふのである。分旅でも償はざれば云々は當時の裁判及刑法をいふ。概言すれば一たび牢獄に投せられた後は、容易に出獄することは出来ないので、卑近の例を引いて和睦の必要を示されたのである。

解

古人に殺人の誠律が教へ示されてあつたことは、凡て爾曹が聞き知る所であるが、我が天父と親しく交りて聞く所によれば、此誠律の精神的意義は形

式の凶殺で、事すむものではない、パリサイ派や學者共が淺薄の儀文的解釋で盡きるものではない、我れは改めて爾曹に教へて聞かせよう、怨み惡むといふのが抑も善くない、故に怒や罵言は一切していけないのである。たとへば殺人は直に死刑の審判を宣告せられたのであつた、怒や罵言も同じく死刑の宣告を受くべきである。故に和睦が何よりの大事である、我れ憐憫を愛して祭祀を愛せずとあるやうに、神は爾が至美の禮物よりも、爾が憐憫を悦び給ふのであるから、若しも兄弟に恨まれる事件がありて、相方不和となり居らば、禮物は先づ祭壇の傍に置いて、兄弟と和睦して來い、和睦して後に禮物を献ずれば、神は悦んで受け入れ給ふ。故に裁判所に告訴せられることあらば、一刻も早く途中で和睦せよ、判士の耳に達した後では、和睦の時機がおくれるのである人には、誰れも過があるから、爾も全く過失ないともいへない速に詫せよ、然かして後心清々しくして神前に出づべきである、然るを裁判の手順を経て牢獄に投せられては、最早仕方がないのである。

論

是れより基督は律法を成就するの眞義を明にし給ふ。此殺人の誡律は十誡中の第六誡であつて、生命の神聖を教へたものである。此誡律はモーセがシナイ山に於て神より賜はりたるものとあれば、萬古不易の聖誡たるべく、従つて之を批判するは不敬の至極と猶太人は思ふて居つたのであるが、殺人といふは元來天國に於てあるべき事實でないから、天國の建設と同時に廢せらるべきであらう。蓋し此律法は天國に於ては不用である。然しながら此律法の精神は中々深遠なるもので、元來心意に根ざすのであれば、天國に於ても遵奉せらるべきである。基督はされど、の一言を以て舊律を廢して、新に天地の律法を立て給ふのである。天國の律法とは何んである。我れ爾曹に告げん。の一句は、基督が天國の立法者たるを自覺せるもので、此自覺は彼れが天父と深く親しく交際して、發揮せられたのである。基督は勿殺の誡律を一轉して、勿怒の誡律となし給ふた。怒るは心意の状態で、強がちに悪しき情成ではない、けれども宥免といふがクリスチャンの實情であれば、假令故あるの怒とはいへ、長く縦にすべきではない、況んや多少の理由ある怒も、決して

純白なることを得ないので、怨悪は忽ち怒の裡面を支配して居るのであるから、寧ろ怒は斷じて絶つべきである。是に於てか情念清くして罪を免れることが出来る。ましてや怒が言葉に發して、兄弟を愚者と語るに至るは、怒の罪に一層重きを加ふるのである。又知識判斷力の足らないと卑下するばかりでなく、之を狂妄外道と排斥するに至りては、罪更に重を加ふるのである。狂妄とは道心なく敬神の念なきもの、兄弟を見かざりたる言は之に過ぎたるはない。怨悪、忿怒、暴言、クリスチャンの最も誠むる所である。以上は神の厭惡し給ふ罪惡であれば、假令禮儀三百威儀三千の美を盡して、恭しく神前に禮物を携へ來るとも、人の思念を知り給ふ神は之を非禮として受納し給はない。故に憐憫よりよきものはないのである。況んや兄弟に怨惡の情を發せしむるもの我れにあらば、直に和睦の道を盡して神前にあらはるべきである。兄弟の不和ほど神の嫌惡し給ふものはない。禮物の如きは若し夫れ兄弟親和の感謝祭ならば、神の受納し給ふ所なれども、禮物其ものには何の價値もないのである。基督は禮物其ものを排斥せざりしも、其靈と

真理とを以て拜する禮拜主義が實行せられるの日は、禮物の如きは全く顧みられざるに至るのである。

全躰人に訴へられるといふのは、果して我れ自からの罪なるや否、篤と自反すべきである。我れ自から健全なる情感と公平なる思想とを以て自分の是非を判断すべきである。我れ果して訟へらるべき理由なくば、親切を盡して兄弟に説き諭し、和睦の道を講せざるべからず。多少は我に損害を受くとも、和睦の道を講せざるべからず。況んや我に訟へらるべき咎あらば、速に悔悟して原告と和睦すべきである。若し夫れ我慢を主張して和睦を拒否することあらば、悔ゆとも及ばざる運命に陥るべし。其時は切齒扼腕するとも及ぶべからず。若し我れ無理にして人と争ふて、假令一時勝つことあらうとも、決して眞の勝利ではない。蓋し是の如きは人と争ふにあらずして、神と争ふのである。到底勝ち得べきものではない。假令我に十分の利ありとも、原告と不和となるは基督主義ではない。基督は神に代りて人類に和睦を求め給ひ、使徒は基督に代りて同胞に和睦を求めたのである。和を求むるは神子の本

意である。怒は則ち不和の萌、クリスチャンたるもの慎ますしては居られまい。

第二條

古への人に姦淫すること勿れと言へることあるは爾曹が聞し所なり。然れど我れ爾曹に告げん、凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したるなり。もし右の眼爾を罪に陥さば、拔出して之を棄てよ。蓋は五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝れり。もし右の手爾を罪に陥さば、之を斷りて棄てよ。そは五體の一を失ふは全身を地獄の火に投げ入れらるゝよりは勝れり。又曰へることあり、凡そ人其妻を出さんとせば、之に離縁状を與ふべしと、然れど我れ爾曹に告げん、姦淫の故ならで其妻を出す者は之に

姦淫なさしむるなり、又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。馬太五の二七より三十二に至る

註

姦淫する勿れはモーセ出埃及記第二十十誠中の第七誠で、有夫姦を誡めたるものである。モーセの第七誠は數妻を禁じたのではない、又畜妾を禁じたのでもない、他人の婦を犯すを誡めたものである。婦を見て色情を起すは心意上のことである。中心すでに姦淫したるなりとあれば、耶穌は未だ行爲にあらはれざるもすでに此色情發すれば之を邪淫と認め給ふ。姦淫は行爲上のことにあらずして心意上のことである。邪淫誠の眞義は之を行爲上に求むべからず、此の如きは枝葉であつて、根本義ではない、邪淫の眞義は心意上にあれば、一念忽焉として發すれば、既に邪淫である。眼と手とは邪念邪行の方便である。本邦で妾を眼かけ手かけといふは思ひ合はされて、最も善き説明と思はれる。

眼を抉出し、手を斷り絶つは克己の猛断である。地獄はヒンノムの谷、全身で此谷に落るより不具で此恥辱と苦惱とを受ざる方便ありとのことである。離縁狀は妻に汚行を見出したるときにのみ認むべきである。人妻を娶りて後、恥づべき所の之にあるを見て之れを好まざばなりたら、離縁狀を言きて之れが手にわたし、之を其家より出すべし、云云。申命記二四の一。當時離縁問題に付ては學者中二派あつた、一はラビ、シヤムマイの徒で、一はラビ、ヒルレルの徒であつた。前者は汚行を不義姦淫と解し、後者は汚行を良人の眼に不快感を與ふるものと解した。耶穌は是等の議論註解を避け、一刀兩断に離婚を否定し給ふた。姦淫をなさしむる不當の理由にて離婚されたる婦は、法律上の儀文によれば最早妻たる權利を失ふたものなれども、神の前にては依然として正當の婦であるが故に、此婦が他人に嫁するは姦淫するのである。其れ故に婦を離婚して他人に嫁かしむるは、取も直さず之に姦淫をなさしむるのである。此の加く神前に於ては未だ夫婦である婦を娶る所の者も亦姦淫を行ふものとせられる。

解

姦淫する勿れといふ誠のあることは爾曹が能く知る所であるが、我れ改めて爾曹に告げん、婚姻は神聖である、婚姻の生活に入りたる男女は最早二個の別人にあらず、一身同體の人である。馬可傳第十神は一男一女を創造し之を合體せしめて一身となし給ふた。モーセは爾曹の心の不情なるが故に離縁状を以て離縁することを許可したれども、是れ決して夫婦本來の道ではない、神は元始に一男一女を創造して夫婦となし給ふたから、男子は其父母を離れて女子に合し、二人一體たるべきである。故に、決して離婚すべきではない、我れ誠實に爾曹に告ぐる、夫婦の道は前述の如く神聖なるが故に、何人も色情其ものを慎むべきである、若し此慾情を懐いて他人の婦を見るは、既に姦淫するのである。故に此慾情が發したら、直に之を撲滅すべきである。若し爾の眼が爾をつまづかさば、之を抉出すべし、若し爾の手爾をつまづかさば、之を斷ち切るべし、若し爾の足爾をつまづかさば、之をも斷ち切るべし、爾は不具にして神聖の生活をなす方が、全體を以て火消えず蟲盡きざるヒンノムの谷に投せられるよりは遙に益あるのである。

此の如く貞潔の道は心意の發動に根ざすが故に、夫婦の道は極めて神聖なるものである。邪情の發動を許すことすら、既に邪淫であれば、況して其妻を離縁することの罪深きは自から知るべきである。

論

家庭の基礎は夫婦であらうか、父子であらうか、儒教主義の學者は父子を以て家庭の基礎となすのであるが、基督教主義の家庭は其基礎を夫婦の上に置くのである。夫婦の倫あつて始めて父子もあり、兄弟もある、夫婦なければ、父子もなく、兄弟もない、故に夫婦の倫が定らねば父子の道も兄弟の道も行はれ難いのである。儒教にも君子の道は端を夫婦に發すとあれば、父子の倫を以て家庭の基礎とするは疑もなく真に謬説であらう。

さて夫婦の道は一夫一婦とすべきか、一夫多妻とすべきか、又は一妻多夫とすべきか、吾人は基督教の主張する一夫一婦を以て眞實なる夫婦の道と信するものである。一夫一婦は最も清き人情の自然に要求する所である。夫が其婦に求むる所を其婦に行ひ、婦が其夫に求むる所を其夫に行ふならば、一

夫一婦となる外は道ないのである。己れが欲せざる所を人に施さず、又己れが欲する所を人に施すときは、一夫一婦の倫を生ずるは善き樹が善き果を結ぶが如きであろう。佛教も儒教も回々教も此一夫一婦主義の家庭を遣り出すことの出来なかつたのは、三教の大欠點にして基督教に及ばない所である。既に一夫一婦と定りたる以上は、離婚を許可すべき筈はない、男女の感情が家庭の神聖を結ぶ方便となり、感情其ものを超越する精神の結合が家庭の神聖を保全するに至らば、感情は此結合を破壊する權能を有しないのである。故に此高潔なる精神を有する男女は、斷じて離婚を許可しないのである。夫も妻も他の男子や女子を見て色情を發し、之をして縦ならしめば、假令行爲に及ばずとも、心中既に或は其妻に對し、又は其夫に對して姦淫を行ふのである。夫婦の道は實に男女をして神聖ならしむるものである。哥林多前書第七章パウロが淫行を免るゝ爲に人各其妻をもち、女も各其夫をもつべしといふたが、此意味深き消息をいふたのであろう。

馬太のいふ所によれば、離婚の許可せらるべき一理由あるやうである。それ

は一方が姦淫を行ふことである。然し姦淫の故にあらすして離婚せられたる女が再び他人に婚姻すれば姦淫を行ひ、又之を娶りたる人も姦淫を行ふとあれば、女子は其夫の姦淫を見て何時までも其行爲に反對して、其道を主張すべきやうに思はれる。故に若し妻が姦淫を犯したならば、其夫は何時までも其貞操を守りて其不義に對し、抗議すべきやうに思はれる。其譯は夫もし此機に乗じて他婦を娶らば、則ち姦淫を行ふのではあるまいか。又彼の離婚されたる女が其夫の悔改を待て、其罪惡を許し、また本の如く和合すべきものならば、男子も其妻の不義を赦して其悔改を待ち、復歸するを期すべきであろう。男女等しく其罪を赦すこと七回を七十倍すべきものならば、姦淫の故を以て離婚する筈はないやうに思はれる。馬可十章の一〇、一一を参照すれば、姦淫の故云々の理由は附してない。故に基督は離婚を以て絶對的非倫となし給ふたやうである。今日の如き不完全なる非倫の社會に於ては、基督の非離婚主義は直に實行するは難事の中の難たるべけれども、凡そクリスチャニたるものは深く婚姻を慎まざるべからず、其婚姻の始を慎むものは

其終を完うすることが得られる。若し夫れれやまつて其始を慎まないならば、悔ゆとも及ぶべからざるものあるべし。

男女の慾情を一轉して天國の尊榮と爲すことは固より容易の業ではない。然し人が禽獸界を超絶し得られると得られぬとは、此等に淺からぬ關係あることを忘るべからず。耶穌が吾人に一大英斷の必要を示されたるは、吾人を靈的の人物視し給ふからである。若し夫れ慾情を本位として家庭を論ずるならば、一夫多妻もよかるう、一妻多夫もよかるう、且又離婚の如きも勝手たるべしであらう。然し人には慾情よりも大なるものがある、即ち靈妙の愛情である。此愛情の完美を全うせよと思はば、肉體の慾情を制御するの必要あるは自から分るであらう。家庭の完美は此慾情を制して彼の愛情を完うする、と否とにある。

第三條

又古への人に告げて、偽の誓を立ること勿れ、爾ち誓ふ所は必ず主に遂ぐべしといへることあるは爾曹が聞し所なり。

然れど我れ爾曹に告げん、更に誓ふこと勿れ、天を指して誓ふこと勿れ、是れ神の座位なればあり。地を指して誓ふこと勿れ、是れ神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふこと勿れ、是れ大王の京なればなり。爾の首を指して誓ふ勿れ、そは一すぢの髪だに白くし黒くすること能はざればなり。爾曹たゞ是々否々といへ、此れより過ぐるは惡より出るなり。

註

偽の誓を立ること勿れ云々はモーセの律法中にある利未記一九の一、二、民教記三〇の三、申命記二三の二、二以下を参照すべし。偽の誓は誓を立て、實行しないのである。イスラエル民族は其の神エホバの聖名を指して誓ふた。出埃及記第七節エホバの名を猥りに唱ふべからずとあるも、誓約を實行しないことをいませめたのである。律法の目的は人々をして信義を守らしむるに

ある。然るに耶蘇の時代には誓詞の種別を立て、其輕重大小をつけたのである。或る種の誓詞は破りても神罰を受くることなく、或る種の誓詞は必ず履行せねばならぬなど、事々しく論辯したのである。耶蘇は其惡習を根本的に排除し給ふた。耶蘇は絶對的に誓詞を禁じ給ふた。天を指して誓ふ勿れ云々、當時の人々は神の名を唱ふことは罪を招くなれども、天を指すことは差支なし、又地を指して誓ふことは差支なし、或は地を指し天を指して誓ふたるは實行しないでも言責なしといふた。耶蘇は以賽亞書第六十六章一節天は神の座位、地は神の足凳とあれば、天地も神聖である、神以外の存在物として観るべからずといひ給ふた。エルサレム城も同じく神聖である。詩篇第四十大王は神を指す。神殿のあるエルサレム城は決して神を離れたものではない。爾の首を指して云々、爾の首とて神以外の存在物ではない、毛髮を黒白にすることは老人や青年の勝手に爲し得る所ではない、其力の及ばない物を指して誓ふは即ち神威を蔑にするのである。是々否々是とすべきを是なり、否とすべきを否なりと一言以て斷言することである。此より過るは惡より出る。

なり。是々否々の言より多きは社會の惡習又は人々の心事が潔白ならざるを表白するのである。

解

モーセは爾曹が神を呼びて立てたる誓詞を實行すべきことを教示したのであつたが、尊る單純に是を是とし否を否とするの眞實なるに越したことはない。誓詞其ものが強ちに惡事ではない、誰れか天を仰いて其眞實を認めないことがある。古人が誓詞の神聖を教へたのは深い意味のあることである。然るに其意を解せずして、神の名を唱へて誓ふものは實行すべく、然らざれば言責を免れるなど言ひ傳ふるもの出來て、或は天を指して誓へば言責なしといふものがある。嗚呼爾曹は恐なるかな、天は神の座位ではないか、或は地を指して誓つて曰く我に言責なしと、嗚呼恐なるかな、地は神の足凳ではないか、或はエルサレム城を指して誓ふて曰く、我に言責なしと、嗚呼恐なる哉、エルサレム城は神京と教へてあるではないか。馬太傳第二十三章或は神殿を指して誓は、言責なし、神の金品を指して誓は、言責あり、或は祭壇

を指して誓は、言責なし、壇上の禮物を指して誓は、言責ありなど、無用の區別を立つるものがある。嗚呼恐なるかな、神殿を指すものは神殿の金品をも指すのではないか、祭壇を指すものは壇上の禮物をも指すのではないか、嗚呼恐なるかな、禮物を神聖ならしむるは祭壇ではないか、祭壇や金品を神聖ならしむるは神殿ではないか、又神殿を神聖ならしむるは神ではないか、爾の首すら神のものではないか、其毛髮の一筋だに黑白にすることは出来ないものであろう。左らば神はあらざる所なし、従て天地の物一として神聖ならざるものなし。爾曹無用の區別をやめよ、爾の諾否は一として犯すべからざる誓約ならざるはなし。故に是々、否々、是れ爾曹日常の交際たるべきである、之より過きて更に誓詞を用ゆるの必要はなからう。畢竟するに之れより過くるは惡より出るのである。

論

誓詞は上天を仰いて各自の是非を認ふる人情の至誠より發するものなれば、誓詞其ものは決して惡なるものではない。敬虔なる人の日常交際の諾否

は一として誓詞ならざるはない。古人が誓詞を以て一の宗教的行事として教へたるは、人々をして眞實の本心に立ち歸らしめんが爲であつた。耶蘇は誓詞を廢して誓詞の目的を達せしめ給ふた。彼は日常交際の諾否を特別な誓詞と同一の價值あるものとなし給ふた。故に彼の眼中には特別な誓詞ないのである。既に此誓詞ないが故に、之に拘泥することをしない。是れ彼が法廷に於て誓詞を拒否することなく、いさぎよく議長の前に於て誓詞を立て給ふたのである。馬太二六の六三以下を見るべし。パウロも時機に應じて誓詞を使用したことがある。羅馬書九の一、哥林後一一の一〇。彼のクウエーカル派やメノナイト派が絶對的に誓詞を拒否するのは、吾人は彼等が儀文に拘泥するにあらざるなきやを疑はざるを得ない。又日本帝國の法廷の如き實に誓詞の無意味なるに於ては、吾人は無神論の極此處に到りたるを悲しまざるを得ない。

第四條

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へることあるは爾曹

が聞し所なり。然と我れ爾曹に告げん、惡に敵すること勿れ、人爾の右の頬をうたば亦ほかの頬を轉らして之に向けよ。爾を訟へて裏衣を取らんとする者には、外服をも亦とらせよ。人爾に一里の公役を強なば、之と偕にゆけ。爾に求る者には、予へ借らんとする者を卻ること勿れ。

註

目にて目を償ひ云々は復讐主義の格言で、イスラエル民族の立法者は之を其公平無私の法廷裁判に應用したのである。惡に敵すること勿れとの真義は復讐主義を否定したるものである。惡は惡事災害である。其數枚擧すべからず耶蘇は惡事災害の四種を擧げ給ふた、(一)暴行者より受くるもの、(二)法律上の訴訟より受るもの、(三)政府の威力を以て壓するもの、(四)貸借の損害等である。右頬を撃つは暴行である。之を赦して、却て左頬を轉じて暴行者に撃たしむる裏衣よりは外服の方貴重なるもの、從て亦高價である。法廷に於て裏

衣を奪ひ取られんとするは訴訟上の災害である。斯の如き人には寧ろ高價なる外服を與へて争はない。一里の公役云々は郵便荷物等の運搬を人々に言付ることである。ペルシャ王シラス此郵便法を組織したれば、爾後羅馬天下に實施せられて居つた。驛より驛に荷物等を運送するに、人馬を使役するので、我封建時代に行はれて居つた公役なるものと同種である。一里の公役を命するは、政府の威を假つて人民を壓することである。然かも之を二倍して報ゆるのである。乞食や借用者に對しては他まで忍容して其要求を拒まぬことである。

解

利未記第二十四章二十七節以下、申命記第十九章二十一節以下、被害者は其損害高以上を要求すべからず、裁判人は決して依姑最負をなすべからず、公義は一步も曲くべからず、裁判人は此公義を重んずる爲には憫み視ることすらなすべからず、生命は生命、眼は眼、齒は齒、手は手足、足は足を以て償はしむべしと復讐主義を教へてあることは、爾曹イスラエル民族が能く聞き知る所である。然と我が爾曹に示す所は是

れ以上である。人に取るべからざる義務があるばかりではない、亦大に與ふべき職分がある。目にて目を償ふは取るべからざる主義に基くものである。與ふべき主義よりいへば、此復讐主義を超越して、損害要償以上に超脱せねばならぬ。且又人を懲戒するは必ずしも復讐主義によるべきではない、寧ろ之を善良にする目的より出づべきである。故に復讐主義を脱却して、断じて惡に敵せざるを要する。爾曹決して惡に敵してはならない。然し是れは惡の横行を縦にせよといふにはあらず、却て之を撲滅せんが爲である。之を撲滅するには復讐以上の力を要する。それは愛である。善である。故に人が爾の右頬を撃たば、左頬を轉じて撃たしめよ。人もし爾を法廷に訴へて爾の裏衣を取らんとするならば、外服をも呉れてやれ。人もし政府の威を假りて爾を虐待するならば、二倍して彼に報ひてやれ。求むる者や借らんとする者には一も拒むことなくして盡く與へ、聊も其返報を待つ勿れ。斯くして世間の惡事災害は除去されるのである。爾曹決して惡に勝たるゝこと勿れ、必ず善を以て惡に勝つべし。

論

モーセの復讐主義は復讐千倍といふに比すれば、遙に優等なるものである。人は財産又は名譽或は身體上の損害を受ければ、憤懣に堪へずして加害者に復讐せんとするの熱情は、實に復讐千倍の勢を示すのである。然るに被害者をして相當の要求を得せしめんと欲したるが、即ちモーセ律の主旨である。此眼は眼で償ひ、齒は齒で償ふの律法は公義を立つるにあれども、イスラエル民族の神政治の法律として、勢倫理法と政治法とが混同して居つたので、パリサイ派や學者等は政治的意義を日常交際の倫理法に應用せんと、試みたから、モーセ律も極めて淺薄なものとなつたのである。耶蘇は同じ法律の倫理的方面を發揮して、天國の新憲法となし給ふたのである。申命記二四の一〇以下等を考ふれば、律法の大精神には甚だ深き憐憫の情があるのである。然かして律法の目的は惡事を撲滅し、勸善懲惡の主旨を完成することにある。しかも此目的は法律其もので達せらるべきものではない、法律以上の倫理的精神に由て始めて達せられるのである。故に耶

蘇は律法に正反對と觀せられる絶對的非復讐主義を示し給ふた。彼は最も適切なる四例を擧げて、最も適切に教示し給ふた。彼は高深遠の倫理的、精神を此四例に由て示し給ひたれば、實例其ものに拘泥すべからず、精神其ものを體達せねばならぬ。此精神の實施法は臨機應變、千狀萬態にして名狀すべきものではない。此四例は實行上一々採用すべからざるやうに見ゆれども、斯く嚴肅に斷言せざれば、基督の眞意は貫徹せぬのである。此精神は時處、位に由つては全く正反對の形狀を取ることがある。死せる形式に泥みて、活ける精神を殺すならば、是れ此倫理の大本義を閉塞するのである。求る者に與へず、借る者に耳を傾けざる、却て最も多く與へ、親しく耳を傾くることとなることもある。讀む者活ける眼を開いて、死せる形式に於て活ける精神を看取せざるべからず。

第五條

爾の隣人を愛みて其敵を憾むべしと言へることあるは爾曹が聞し所なり。然れど我れ爾曹に告げん、爾曹の敵を愛み

爾曹を誼ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害もの爲に祈禱せよ。斯くするは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり。夫れ天の父は其日を善者にも、惡者にも照らし、爾曹を義者にも、不義者にも降せ給へり。爾曹おのれを愛する者を愛するは何の報賞かあらん、税吏も然せざらんや。安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過れたることかあらん、税吏も然せざらんや。是故に天に在す爾曹の父の完全が如く、爾曹も完全すべし。

註

予の隣人は猶太人の同胞兄弟である。利未記一九の一八に曰く、汝ち仇をかへすべからず、汝の民の子孫に對ひて怨を懷くべからず、己の如く爾の隣人を愛すべし。と、其敵は外國人である。爾曹の敵を愛み云々、此敵は獨り外國人

ばかりではない、異教人、異人種、異端者、不信者等、我と我主義に敵するものをいふ。詛ふは悪事災害を祈ること、祝するはそれの正反対である。憎むは害を加ふるに至り、善視しは其正反対で善をなして、

申命記二〇の一三以下に曰く汝の神エホバの
を爾の手に付し給ふに重らば及を以て其中の
男子を盡く撃殺すべし。惟その婦女、嬰孩、家畜
よび凡てその邑の中に汝が奪ひ得たる物は
己に取るべし。……汝の神エホバの汝に與へて
産業となさしめ給ふこの國々の邑々に於ては
呼吸する者を一人も生し存べからず。即ちヘテ
人、アモリ人、カナナン人、ペリシ人、ヒビ人、エブス人
などは汝必ず之を滅し盡して汝の神エホバの
汝に命じ給へる如くすべし。申命記七の二、一五
の三、二〇の一三以下、二三の二一、二五の一七以
下を参考すべし。

利益を與ふることである。祈禱も迫害者の爲に冥福を祈ること。天に在す父の子は最も高く大なる品格を有するもの、敵を愛する人にして始めて神の子となられるのである。十福の中に平和を求むる者は神の子と稱へられるとあるが、敵を愛する程平和を求むることはあるまじ、故に愛敵は其神子の實を證明するのである。天の父は其日を善者にも不善者にも照らし云々、天父の眼中善者なく、不善者なく、義者なく、不義者なく、一視同仁あるばかり、蓋し人類は皆神の愛顧し給ふ子供である。税吏は羅馬人の手代となりて同胞の

膏血を絞るもの、多數は破廉恥の人々である。故に同胞兄弟に擯斥せられて、良民の社交に入るを禁せらる。兄弟は同胞兄弟といふよりは同教兄弟といふ意義である。天父の完全は其愛をいふのである。其一視同仁にして博愛の極致をいふ。爾曹も完全すべし、亦一視同仁にして博愛の極致に到達すべきをいふ。

解

パリサイ派の人々や學者共はモーセの愛隣誠に基き、同胞兄弟を愛するを以て、愛人の道を盡したやうに考へ、更に隣人の區域をせばめて、同教の兄弟を以て其隣人となし、異邦人を厭ひ悪んだのみならず、其同胞といへども、税吏罪人の如きは宗教上の主義行爲を同うしないから、異邦人と同様に之を擯斥して厭ひ悪んだのであるが、天國に於ては隣人の意義をかく狹義に解してはならぬ。爾曹の天父は其日を善者にも悪者にも照らし、雨を義者にも不義者にも降らし給ふて、其恩愛を普く天下の人々に授け給ふに由つて、爾曹は猶太人や異邦人の區別を立てず、又は同教や異教の差別をつけないで、

普く天下の人々を隣人として愛せねばならぬ。爾曹と全く主義を異にして、爾曹を仇敵の如く取り扱ふ人々をも愛せねばならぬ。爾曹を誣ひ惡み迫害する人々をも愛して其幸福を祈つてやらねばならぬ。斯く一視同仁の博愛主義を實行するは天父の聖旨にして、此博愛主義の實行によつて始めて神子となられるのである。

己を愛する人を愛することは一種の利己主義であれば、神より報賞を受くべき價値はないのである。此位のごときは平常利己主義の生活をなす税吏の如きもなすのであらう。又同胞や同教の兄弟を愛して安否を問ふが如きは、凡俗の所行であつて、何も勝れたる行爲ではない。此位の事は爾曹が罪人として排斥する税吏も、日常實行しつゝあるから、爾曹は民族や宗教や人種や信條の異同を問はず、博く之を愛し、又爾曹を厭惡し、迫害し、呪詛する人々をも深く愛すべきである。蓋し爾曹は至上なる神の子であれば、天父の純善あるが如く純善なるべきである。天父は恩を忘れる者にも不善の人にも同じく慈愛を施し給ふのである。爾曹は仰慕して天父に效ふべきである。

論

愛敵は基督教倫理の絶頂である。同胞や同教の人々を愛するは個人主義に優ること數等である。自己を愛することは人の本能なれども、眞の自愛は本能の能くなし得る所ではない、必ず善良なる教育を待たねばならぬ。家庭の愛も人の本能なれども、眞正なる家庭は一夫一婦の人道主義に由らないで、一家團欒の美を盡すことは出来ない。同胞や同教人を愛することは自愛や家庭の愛に比すれば、頗る上達したものなれども、決して人道の極致ではない。耶蘇の愛敵は個人、國家、教團を超越したるもので、之れより以上の愛はないのである。然かして其愛が普く天下人類に及ぶのみならず、凡ての仇敵にも及ぶものであれば、人類以上の本源より湧き出る愛に涵養せられるにあらざれば、其目的を達することは出来ない。

基督以前の道徳は愛國を以て其極致となして居つた。猶太、ギリシヤ、羅馬の如き、其隣人を愛して其敵を憾むべしの道徳を以て最大道徳と心得て居つた。基督が愛敵の大道を示されたるは、自己の愛、家庭の愛、國家の愛を破壊せ

んが爲であらうか。萬々然らず、之を廢せんが爲にあらず、却て之を成就せんが爲である。自己の愛は家庭の愛に由て其光輝を放ち、自己と家庭との愛は國家の愛に由て其目的を達し、又自己と家庭との愛は基督の博愛に由て始めて其完成を見る事が出来る。凡ての順境に處するの愛は逆境に處して其光明を放つにあらざれば、眞實の愛とはいはれないのである。基督の博愛は社會道德の極致たること誰れも疑ふものはあるまい。

吾人は基督の博愛がクリスチャンの中に何程實現したるかを思へば、赧顔の至に堪へない。彼等が未だ全く人種的偏見を脱却せずして、猶太人の如きを厭惡するの甚しきを悲まざるを得ない。異宗異派に對する厭惡の如きは容易に去り難いものと思はれる。クリスチャンが異教人を輕蔑し來りたるの習弊は、基督教傳播上少からざる妨礙となつて居る。又其同宗異派に對する厭惡の如きは、言語に絶する程である。天主教がプロテスタントを厭惡し、プロテスタント、オルンドツクスがユニテリアンを厭惡することの如き、正しくパリサイ派の行爲にして、基督の博愛を去ること遠い、悲ますしては居

られまい。

前陳の如く基督の博愛を實行し得ないのは、基督を法外に尊敬し過ぎて、天上に祭り上げ、其吾人と同情なることを否定するからである。吾人が基督に親炙して其博愛の精神に同化し、彼れが天父を觀るが如く、天父を觀するに至らば、天父の純全なるが如く純全を期すること六ヶ敷ことではない。若し之れが法外に六ヶ敷ことであるならば、基督の言は空文虚名に過ぎないのである。基督は其博愛を彼と同情の神子に教示し給ふた。既に神を天父と仰ぐものは神と異性たるべからず、若し夫れ異性ならば、神は人の父ではない。苟も神を父と呼ぶ以上は、神と同性的のものたるや、論を持たないのである。子をして父母に倣はしむるは決して苛酷の命令にあらず、彼得前書一彼得前書に爾曹孝子なるに因り……爾曹を召し給ふ聖者に倣ひて凡ての行を潔くすべしとあるやうに、基督は吾人に最も行ひ易いことを命じ給ふたのである。然かし神が永遠なるが如く吾人の期する所も永遠なれば、前途渺茫として固より知るべからざれども、惟純全なる神を期して進むのみである。

猶太人は神子の資格は神と特別な契約あるによるとなし、ギリシヤ人は神子の資格は神の分霊を有するによるとなしたが、耶蘇は愛敵の至誠あるに因るとなし給ふた。耶蘇の神子たるは此の至誠の充ち溢れたるが故である、吾人が神子たるを得るも亦同じく偏視なき博愛の實を擧ぐるの一事である。

第六章 善行三例

爾曹人に見せん爲に其義を人の前になすことを慎め、もし然らずば天に在す爾曹の父より報賞をえじ、是故に施濟をなすとき、人の榮をえん爲に會堂や街衢にて偽善者の如く菰を己が前に吹かしむる勿れ、我まことに爾曹に告げん、彼等は既に其報賞をえたり、爾施濟をするとき、右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ、如此するは其施濟の隠れん

が爲なり。然らば隠れたるに鑒たまふ爾の父は明顯に報いたまふべし。馬太六の二、三、四に至る。

爾祈る時に偽善者の如くする勿れ、彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈ることを好む、我れ誠に爾曹に告げん、彼等は既に其報賞をえたり、爾祈る時は嚴密なる室にいり、戸を閉ちて隠れたるに鑒たまふ爾の父に祈れ、然らば隠れたるに鑒たまふ爾の父は明顯に報い給ふべし、爾曹祈るときは異邦人の如く重複語をいふ勿れ、彼等は言語多きを以て聽かれんと思へり、是故に彼等に倣ふこと勿れ、爾曹の父は求ざる先に其需用物を知り給へばなり。馬太六の五、六、七、八に至る。

爾曹斷食する時偽善者の如き憂容をする勿れ、彼等は斷食

を人に見せん爲に顔色を損ふ、我れ誠に爾曹に告げん、彼等は既に其報賞を得たり、爾斷食する時は首に膏をぬり、面を洗へ、如此するは爾の斷食人に見えずして、隠れたるに在す、爾の父に現はれんが爲なり、然れば隠れたるに鑒たもふ曹の父は顯明に報い給ふべし。
馬太六の一六より一八に至る

註

其義は善行である。當時施濟、祈禱、斷食を以て三大善行となして居つた、然かして施濟は人に對する道、祈禱は神に對する道、斷食は己に對する道、人に見せん爲に云々、當時の人々は善行を重大視したなれども、其實行の至難なるを感じ、善行其ものに熱中すること能はずして、名譽を求るに至つた、當時の宗教家は善行其ものを爲すの力なく、名譽を得んが爲に之を實行し得たのである。天に在す爾曹の父より報賞をえじ、天父の報賞は善行其もの、報賞である、人よりの譽ではない、善行其もの、報賞は本心の喜悅、徳性の發達、天

國の勝利である、名譽の爲にする者は是等の報賞を愛することは出來ない。會堂や街衢は人々の群集する場所、彼を己が前に吹かしむるは吹聴するをいふ、偽善者は善行ありて之に相應する善心なきもの、彼等は既に其報賞を得たりとは、偽善者は其善行に由て其期したる名譽利達を得たといふのである、右の手の爲すことを云ふ、二心なきをいふ、憐憫の意志の外、他心なきをいふ、施濟の隠れんが爲なりとは、人目に隠れんが爲である、隱微に鑒たまふ、神は知らざる所なし、人の心腸を鑒み給ふ、明顯は隱微に對する言葉、人が隱微に行ふことは神之を明顯に報い給ふ、隠れたるより顯はれたるはなく、微なるより明なるはなしといふは即ち此事である、會堂や街衢の隅に立ちて祈る云々、當時の宗教家は祈禱を定めて居たので、其時間來れば、街衢の隅に立つて祈つた、祈禱の姿勢は一にして足らない、或は立ち或は伏し、或は手を伸べ、或は跪くのである、嚴密なる室に入るは密に神に親み交らんが爲である、異邦人の如く重複語云々、異邦人は外國人のこと、其意義は異教人といふに同じ、重複語は念佛唱名や題目繰返等の如きである、異教人は念佛唱名の

多き功德によりて其念願が聽れると想ふ。クリスチャンは此の如き行爲に效ふべからず、蓋し天父は祈り求めない前に其需用物と知り給ふ故に、重複するの必要ないのである。斷食は反省して自己の罪惡を悔ふる修行である。パリサイ派の人々は毎週數回斷食した、此時灰煤を被り、麻衣を纏ふこともあつた。彼等は顔色憔悴し、形容枯槁して、會堂に出入し、街衢を往來したのである。首に膏をぬり、面を洗ふは祝宴に行くの装で、偽善者の行爲の正反對である。

解

爾曹は各々期する所高大深遠で、天父の純全なる如く純全にならねばならぬ。従て爾曹の善事を修行するに當ても、誠意に心力を注がねばならない。パリサイ派や學者の善事を修行するを觀るに、其心根は名譽を求むるにあるのである。施濟や祈禱や斷食の如き善事の修行も其動機は名譽心である。彼等に取りては此等の修行は中々の難事である、何か他の動機に動されないでは、實行が出来ないので、衆人の前に普く仰山に吹聴して慈善を行ふことを

得る。其祈禱とても祈禱其もの、眞味を知らないで、世間の人々より敬虔者の名譽を受けんが爲に、會黨や街衢の隅に立ちて祈るのである。且又斷食するにも外見を飾ることゝなつて、灰や煤を被りて其顔色を損し、憔悴枯槁の面容を装ふて、街衢を往來し會堂に出入するのである。彼等は眞に偽善者である。彼等の行狀は善なれども、其心の動機は榮譽心に驅られて居るから、心意と行爲とが全く齟齬して居る。故に、眞正の偽善者である。彼等が善行の目的は榮譽を得れば足るのであるが、彼等は既に其目的の如く衆人に譽め揚げられて、羨人とせられた、其希望の如く十分に報賞を得たので、何も神より受くるものはない。爾曹の爲す所は全く之と異ならねばならぬ。爾曹は天父の恩愛に見效ふて慈悲を人々に施すので、施濟をなすには慈悲の外は何もないのである。右の手の施濟をなすときに左の手には知らせない、別言すれば慈悲の外には二心なく、自己を慮ることなく、全心を注いで専心一意に之を實行するのぞなけれねばならぬ。

祈禱をするにも、心情已むに已まれぬ動機より天父に號泣し、又は感謝する

のであれば、別に人から見て貰い聞いて貰ふ必要はない、たゞ見ざるに戒慎し聞かざるに恐懼するので、心の密室に入りて隠微の神に交るばかり。

断食も已むに已まれぬ心惜より發するもので、作爲の必要はない。冠婚には欣喜し葬祭には断食し、自己の罪惡を見ては断食し、罪惡を脱却して欣喜するが自然である。耶蘇は断食を命じ給はなかつた、然し断食すべき日あることは豫じめ示し給ふたのである。其時ヨハネの弟子耶蘇に來て曰けるは我佛とマリサイの人はしばしば断食するに、師の弟子の断食せざるは何ぞや。耶蘇彼等に曰けるは新耶の友その新耶と偕に居るは喜むことを得んや、のち新耶をひきとらるは時來らん、其時には断食すべきなり。馬太九のさて断食の必要あるときは決してパリサイ派の行爲に效はず強て外貌に顯はすことなく、見ざる聞ざるの隠微に齋戒沐浴して自己の罪根を断ち、以て天父の照鑒を仰ぐべきである。かくすれば善事の修行は必ず功を奏して、内心に祝福を加へ、其目的を貫徹すること明々白々である。

論

眞の宗教道德は善事や義の働きに存せずして誠意正心にある。誠意正心に於て未だ修養の至らざる所あらば、假令義行を行ひ善事をなすとも、是れ眞

の義でもなく眞の善でもない、却て偽善となるのである。眞の義者と偽善者との區別は行狀にあるではない、心情に存するのである。天國の王は神である、然らば其住民の義は人の心腸を鑒み給ふ神の是認する所なくてはならぬ。誠意とは何である。義其ものをなして餘念なきのである。若し夫れ一片の餘念を發して功名を求むるところあらば、是れ神の義とし給ふものではない。そこで義を行ふを心念の一筋に傾注して餘念あるべからざることを基督は劈頭第一に教示し給ふたのである。凡そ善行には必らず報賞あるべしとば、猶太人の普く信頼せる所であつた。彼等は此報賞を得んと欲して善行をなしたのである。既に此報賞を得んが爲に善行をなすは、最早純然の善ではない。此報賞はよし神から來るものにせよ、之を得んが爲に善行をなすは、最早純然の善ではない。況んや人の毀譽褒貶に心を傾くるに至つては、論ずるに足らぬのである。然れども善行には必ず報賞の附隨するのであれば、強ちに之を排斥するは亦君子の所爲ではない。唯天父の聖旨に信頼して善事を行ふまでである。若し夫れ聊かにても人より報賞を受くるの念あらば、天

父よりは萬々報賞を受くることはない、何となれば天父の是認し給ふ義でないからである。

當時施濟は善行其ものとせられたのである。財を散じて貧人の爲にするは固より善行である。財を散らす方法は基督の教示し給ふた所ではない、是れは時處位に由て變化するものである。數錢を乞食に施すも施濟である。數萬圓を費して圖書館を建て、學校を造り、種々の事業を起して天下公衆の爲に謀るも施濟である。其方法は舉て數へられぬ。故に基督は施濟の方法は教示し給はなかつた。唯施濟の義たるべき所の奥義を教示し給ふたのである。彼等は既に其報賞を得たりとの一言は偽善者の癡愚を罵倒し、其赤恥を暴露したものである。世人より義者と譽め揚げられて、得々たるが如きは、眞に淺間敷次第である。偽善者の如きは、實に馬鹿の骨頂である。

右手の爲すことを左手に知らずる勿れとの言の發する基督の心情の如何ばかり至誠なるかは吾人の固より端睨すべき所でない。羅馬書第七節パウロが我れ善を爲すときに惡の我れに伴へるを知るといふたのは吾人の同情

を引く所のものである。乍去パウロは基督に由て此凡俗の境涯を脱却したのである。世間に公然と世俗の名譽を得て、陽に得々然たるものを淡白な可愛らしき人であるといふ、強て其施濟を隠蔽して人に知られざらしめ、長き時間を過ぎて大に顯はれ、天下の義人たる名の赫々たるを期するものがある。之れを腹黒い偽善者といふ。又善事を獨り自ら之れを知りて、毫も天下に顯はれしめず、自分免許の義人たるを以て、心底得々たるものがある。是れは眞の傲慢である。又は神より報賞を得んと欲して、強ひて其善行を隠蔽するものがある。是れ神を知らざる宗教家である。以上の人物は大同小異、基督に在る君子の取らざる得である。吾人は知る、善なる神の無窮の經綸中には無心なる善行の影響如何ばかり遠大なるかを、吾人は偏に此神を信賴して一筋に善行をなし、人譽を以て足れりとせず、自ら是として驕らず、唯天父の大經綸によつて天地振興するの日に於て、天父と偕に悅樂するの子たらんことを期するのみ、吾人は吾人の善行が神の聖旨と和同して、神彼れ自身のものたらんことを期するのみである。

祈禱も施濟と同じく善行とせられた。本來祈禱は神明に對する人靈の態度であつて、やむにやまれぬ人の至情である。然るを一種の善行として行狀にあらはるべきものとするは、既に過て居るのである。當時の人は最大なる善行儀式として之れを尊重し、日々何回と時間を定めて、街衢の隅に於て祈るの風習があつた。此風習は今尙回々教の社中に行はる。基督は此偽善の惡習を厭ふて人をして祈禱の本義に立ち戻らしめ給ふた。嚴密なる室にいり戸を閉ぢて隱微に在す爾の父に祈れとの言は、正しく祈禱の本義を明にせるものである。心底ほど隱微なる所はない。しかして良心は則ち神殿の門戸である。約翰傳四の二七に、神は靈なれば拜する者も亦靈と眞とを以て之を拜すべきなりとあるは、祈禱の本義を言ひあらはしたものである。

異邦人とは猶太外の人々である。基督は先づ猶太人の惡習を戒め給ふたが、又異邦人の惡習をも戒しめ給ふたのである。異邦人の惡習とは重複語をいふことである。重複語といふは元と是れ祈禱の甚た道義的ならざるを意味する。若し夫れ神明にして道義的の靈ならば、非禮非義の祈禱を聽かざるこ

とは明白、何ぞ言語の多少を論せん、又若し神明と之れに祈る者とが親密なる關係あらば、重複語を以て神明を強迫する必要はない。畧言すれば、重複語の祈禱は極めて機械的である。決して道義的ではない。故に此風習は天國の臣民間に行はるべきものでない。基督の心情を以て考ふれば、猶太人の祈禱も異邦人の祈禱も實に厭ふべきの仕方である。基督の之れを排斥し給ふたのは尤も千万である。曰く爾曹の父は求めざる先に其需用物を知り給へばなりと、畢竟するに重複語をいふは親しき父に對してせられることではない。之れを使用するが如きは實に父の恩愛に對して限りなきの不敬である。求めざる先に知り給ふ神に對して何んで祈禱の必要があらうといふものもあらんが、是れ亦祈禱の何たるを知らざるの言である。若し夫れ始めから之を知らず、祈つて始めて知る所の神ならば、何んで之れに祈禱するの價値があらう。吾人は事物を得んよりは、寧ろ事物を得るに足る心情を有せんことを願ふのである。慈父に對する孝子の態度、是れ吾人が天父に對して有せんと欲する所のものである。

斷食も善行の一として賞讃せられた故に當時の義人は頻りに斷食を行ふたのである。バプテスマのヨハネも斷食の善行たるを認めて、其弟子に教へた。それほどに斷食を重んずるの風習があつたから、パリサイ派の人々の如きは毛髪をあらし、鬚髯を長ふし、灰を被り、麻を纏ひ、顔色憔悴として、其如何ばかり善行を修むるかを務めて、人々の前にてよそうたのである。基督の之を嫌ひ惡み給ふたことは實に思ひ遣られる。基督は斯る所業に反して、斷食の時は面を洗ひ、首に膏して、祭日を祝するが如くせよといはれた。斷食とは自己の罪惡を惡み、其不徳を慨き、或は悔改し、或は悲哀し、或は痛心して、食の味を忘るゝに至るをいふのである。斯る心情は神前にあつて有すべきものであつて、何も人に見すべきものではない。人々の知ること能はざる心底に於ける状態であれば、外見よりして其果して斷食の状態であるや否やを判せらるべきでない。

故に基督かくは極言せられたのである。今若し其斷食の實を強ひて蔽はんと欲し、首に膏をぬり面を洗ふが如きは亦一種の偽善である。此處一考を要

すべきところである。基督の言によつて竊に考ふれば、斷食の行爲其ものには是もなく非もない、保羅が神の國は飲食にあらず、義と和と聖靈によれる悦にありといつたが、結局精神上のことである。要は罪を悔ひ、憂ひ、慨き、哀しむるにあるばかりである。食を斷ち斷たざる如きは別に算ふるに足らぬものである。

第七章 主の禱

されば、爾曹かく祈るべし。天に在す我等の父よ、願くは聖名をあがめさせたまへ、聖國を來らせ給へ、爾曹の天に成る如く地にもなさせたまへ、我儕の日用の糧を今日もあたへたまへ、我儕に負債ある者を我が赦す如く、我儕の負債を赦し給へ、我儕を試にあはせず、惡より救ひ出し給へ、國と權と榮とは窮なく、爾のものなればなりアーメン。爾曹もし人の罪

を免さば、天に在す爾曹の父も亦爾曹を赦し給はん、然れど若し人の罪を赦さずば、爾曹の父も爾曹の罪を赦し給はざるべし。馬太六の九より一五に至る。

註

然れば爾曹かく祈るべし、異邦人は言葉の多きを以て神明に通ずると心得違ふから、無止に重複語を使用するのである。猶太人は名利に驅られて祈禱を勵むのであれば一も取るべき所はない。天父は隱微に鑒み給ふなれば、祈禱の動機を慎まねばならぬ。又天父は何も彼も知り給ふが故に重複語を使用するは不敬であるから、耶蘇は祈禱の形式を教示し給ふた。天に在す、天は蒼々の天ではない、神聖なる靈界である。神は普遍なれども、其聖位は靈界にある。我等の父、神は一個人の父でもあれば、亦天下億兆の父でもある。我等の父と叫ぶは眞個人類の聲である。聖名をあがめさせ給へ、名は神の特種なる顯現をいふ。神が万物の本源である方面を名けて造物者と唱ふ、之を支配し

給ふ方面より觀たるを主宰とも、上帝ともいふ。故に社シヤの名は許多にして、枚舉するに遑あらず。其恩愛限りなき顯現を名けて天父と唱へ奉る。爰に聖名とあるは父の名である。是より高大にして、又神聖なる名はないのである。此聖名即ち此聖なる顯現が、自分の心にも廣く天下にも明に認識せられ、仰向せられ、尊崇せられ、愛慕せられるを願ふのである。聖國を來らせ給へ、聖國は神の國、天國、天父の國である。天父の國は天父の恩愛限りなき仁政をいふ。來らせとは人類社會に生長し擴張し建設するをいふ。爾旨の天に成る云々、神の聖旨の靈界に行はれるやうに、地上界にも行はれるを願ふのである。日用の糧は衣食住のことで、其のうち食が第一に必要な故に、糧をあげてある。日用は日々の必要をいふのであるが、何の爲めに必要であるかといへば、天國を建設する爲に日々必要である。我儕に負債ある者云々は罪の赦免を願ふのである。天國の建設に餘念なく熱中すべきものなるに、聖旨に違反する意志と言葉と行爲とあるを痛歎して、其負債の赦免を願ふのである。負債は爲すべきものを爲さざるをいふ。我儕に負債ある者を赦すは人の罪を赦

すことである、人の罪を赦すことが神より赦罪を受くる條件となる譯ではない、神は其限なきの恩愛に基いて吾人の罪を赦し給ふので、吾人が人の罪を赦すを待て始めて、吾人の罪を赦し給ふのではない、吾人が人の罪を赦すことを得るは、神より赦罪の恩恵を受けたる證明である、故に赦罪を願ふときは、飽くまでも他人の罪を赦す心がなければ、神の赦罪の恩恵が自覺せられないのである、此恩恵が自覺せられない間は、罪が果して赦されたるや否や知られないから、神の恩愛に同化して神の心其ものになるが最も肝要である、我等を試に遇はせずは、赦罪を願ふ程の者が、再び罪を犯さないやうに、反省辭退することである、或は神を疑ひ、或は臆病にして躊躇するが如きは、決してクリスチャンの心事にあらず、クリスチャンは自己の弱點に心付て、過ちて危険を侵さないのである、惡より救ひ出し給へ、刑罰より又は災害より救ひ出し給へといふにあらず、惡より救ひ出し給へといふので、惡より救ひ出される爲ならば、亦災害をも何をも厭はないといふ精神である、惡とは神の聖旨に違ふをいふ、國と權と榮とは神の絶對無限なる權能を讚美す

るので、アーメンとは誠實をいふ、以賽亞書第六十五章十四節十六節神は本來アーメンであるから彼に祈禱する者もアーメンたるべきである。

解

施濟、祈禱、斷食のうち祈禱ほど重大なるものはない、従つて愛に主禱が附け加へられたのである、耶蘇は嚴密なる室に入りて隱微に祈禱するを教へられたのであるが、之は彼れが常々の行狀であつた、彼は天父と親しく交るを最上の悦樂となし、人を避けて寂寞の地に到り、時としては終夜祈禱し給ふたさりとて祈禱は獨居のときのみ實行し給ふたにあらず、許多の弟子の中に於て其長者として感謝の祈禱を捧げ給ふたこともあつた、主禱は則ち耶蘇の口より出たる第一の信仰表向で、後世之に優る表向はない、クリスチャンは恩愛限りなき慈父に向つて祈禱を捧呈するのであれば、異教人の如く重複の語などを使用する筈はない、是れは天父を知らない異教人に似合しいしき所爲で、クリスチャンの斷じて爲すべきことではない、祈禱は神を感動せしむるものではない、天父は吾人の祈禱を聞いて始めて吾人の必要即

に心付くが如きものにあらず、祈禱は吾人自からを指導して神意と一致せしむるものである。祈禱は吾人の向上心が吾人を喚起するものであつて、神と一致和合の道であれば、至誠を盡して主禱の如く、無限の信頼と忠實とを以て祈るべきである。罪惡界に生存する自分より神を觀すれば、神は遙に高き聖なる靈界に在るので、天に在すとは叫ぶのである。其天に在す神は世界人類を統治し給ふなれば、天を仰く者は同時に同胞兄弟のことを思はざるを得ない、同志相會して親しく天父に祈るときは、我等と言はざるを得ないのである。然かして天を仰いで觀する神は吾人と最も親密なる關係を有する、吾人の事を一々知り給ふ恩愛限りなきものであれば、父と叫び奉る外はないのである。故に天に在す我等の父と叫ぶので、即ち耶穌が神を仰いで叫び給ふた反響である。爾名を崇めさせ給へとは孝子の已むにやまれぬ至情である。罪惡の世界に此父なる聖名が認識せられず、尊重せられず、愛慕せられざるは、孝子の一日も堪へられざる心情である。故に先づ此祈禱を發したのである。地上の孝子共は何を目的として居るか、天父の權能と恩愛とが地

上を支配して、罪惡の權能が征服せられることである。爾國を來らせ給ふとは亦自然の祈禱である。クリスチャンは至善を理想して至善に到達せんことを期して居る。しかして神の意志は至善である故に此至善の聖旨が、聖なる靈界に遵奉せられるやうに、人類界にも遵奉せられんことを祈る。聖旨に任せ給へは基督の祈禱、クリスチャンの祈禱も此外に出ないのである。神の聖旨と人の意志とが一致合體して、始めて人は靈界の聖域に達することを得るのである。さて神の聖旨を奉戴して聖國を地上に建設するには、之に附隨する需要物がある。即ち衣食住であれば、之を神に願ひ求めるのである。之れは固より附隨品であれば、惟天國建設の必要物として之を求むるのみ、天國を建設するには激烈なる大戦争をせねばならぬ。それは外ではない、罪惡との戦争である。此戦争を旨とするものは勝敗こそ、實驗するので、時としては凱歌を謠ふこともあれど、亦疾病慘憺の苦悶をなすこともある。分けて神の前に於て痛悔するので、罪惡の赦免を求めざるを得ない。此の如きものは亦同胞同志の兄弟に無限の同情を注ぐべきである。是れ其相互に弱點

を思ひ遣りて、相互の罪惡を赦しあひ、此深き厚き温なる同情を懷いて、神の前に赦罪を願ふは、實に孝悌の至情で、聖旨に合するのである。クリスチャンは神佑を保全し、進んで罪惡と奮闘するを恐れざるなれども、其弱點を認め、謙遜辭退して、暴虎馮河に陥らないやうに自省するを要する。しかもクリスチャンの進退、其期する所は、罪惡と其結果の災害より全く救ひ出されるのである。然かして神の萬善の權能が、全世界に承認せられるを祈願するは實にクリスチャンの熱血至誠で、國と權と榮とは神の有ちたまふものなればなり。アーメンとは、實に最後の祈禱たらざるを得ないのである。斯く天を仰いて祈願するに際して、造次顛敗忘るべからざるは同胞同志の同情である。此同情なきときは神との親密なる交際は期すべからず、人の罪を赦さざる者は基督の心なきもの、基督の心なきものは神の心なきもの、神の心なき者が果して自分の罪が赦されたるかを知るや否確言すべからず、故に耶穌は同情を以て神に親む重大なる條件となし給ふた。

論

主禱に二様の形式がある。一は馬太六の九より一三に至るもの、一は路加一の一の二より四に至るもの。彼此を比較して見るに、大同小異で、主意は毫も違ふて居らない。唯路加の方は簡にして、馬太の方は之を布延したものである。馬太の方は七ヶ條にして、路加の方は五ヶ條、且前には天に在す我等の形容辭が多い、又國と權云々の祝禱が加はつて居る。路加の主禱は左の五ヶ條である。

父よ、願くは、

聖名をあげさせたまへ、

爾國を臨ませたまへ、

我等の日用の糧を日ごとに與へたまへ、

我等に罪を犯す者を凡て免せば、我等の罪をも免したまへ、

我等を試探に遇せたまふ勿れ。

吾人は此主禱式を以て馬太のそれよりも古式と信する。聖旨の天に成る如

く地にもなさせ給へは、爾國を臨らせ給への註解として布延したものの、惡より救ひ出し給へは、我等を試探に遇はせ給ふ勿れとの消極的方面を補充したるものと考へられる。然かして馬太の祝辭は正しく附け加へられたるものである。この主禱の簡明にして豊富なる、豊富にして要領を盡したる、驚くべきの至である。吾人は此深遠にして豊富なる主禱の意義を説明して見やうと思ふ。蓋し吾人の信仰表白は則ち此主禱であるから。

天に在すとは尊敬の意義である。天は蒼々の天でなく、九天銀河の天でなく、空間を以ていふべき大虚でなく、道義上の境涯をいふので、聖なる境涯は則ち天である。吾人の境涯と神の境涯とを比較すれば、神のは天であつて、吾人のは地である。決して同じ境涯ではない。是れ吾人をして神に對するとき、天に在すと尊崇せざるを得ない所である。我儕の父よと號呼するは亦吾人のやむにやまれぬ所である。父は我れ一人の父ではない。世界衆多の父である。父は世界の同胞衆多を輕蔑する獨尊主義の人の近づき親しむべき神ではない。是れ父と號呼せざるを得ない所である。更に父といふ語に最も注意す

べきである。上帝といはず、造物者といはず、神明といはず、父と號呼するは基督彼れ自身の赤心である。蓋し子たる者の心情は父を呼び出すので、基督の此赤子の心は則ち此天父を呼び出した。神人本來の關係は實に父子の親である。是れは哲學者の呼聲でなく、道義學者の呼聲でもなく、實に宗教其ものの呱呱の聲である。此宗教的意識は内心の事實、敲き、敲き、敲き盡しての丹心、刺ぎに刺ぎ、刺ぎ盡しての衷情で、眞實無限なる祈禱の發する源泉である。主禱は孝子の至誠より發する所のもの。願くは聖名を崇めさせ給へは、第一の願で、孝子の至情である。毫も自己の事を思ふ所なく、一筋に父の事を思ふは孝子の至情である。爾名を崇めさせ給へ、父の聖名の崇められるは孝子の至情である。第一に子たる我れの心と言と行とに於て天父の聖名の崇められ、道の完うせられんことを祈るのである。第二に天父を崇拜する者供の間に、毛頭も天父の聖名の汚されざることを、否聖名の榮光の顯はれんことを熱望するのである。第三に世界人類の中に普く聖名の尊敬せらるべきことである。是れ至善の神を親愛する孝子のやむにやまれぬ祈禱である。

神は其聖なる國を地上に建設せんことを期し給ふのである。神子たるものが之れを識るを得たるは、則ち神子たる所以である。兎角宗教といへば、現世を厭ふて、來世を求むるの弊習がある。基督は此世に來つて、衆庶を濟渡し、永く未來永遠の幸福を得させんとせられたのではない。寧ろ其來られたのは地上に神の國を建設せんが爲であつた。故に神の國を地上に建設するは上天の使命であると確信せられたのである。是れ彼れと同じく神子たるの境涯に入るもの、等しく確信する所となつた。因て神の國の地上に建設せらるゝことは神子の熱望やむ能はざる所のものである。神の國とは義人の國である。神の政治である。道理の國である。道理の子が道理の國を興さんと熱望し、神の孝子が神政の聖代にせんと熱中するは、しかあるべきことである。爾旨の天に成ることく地にも成らせ給へとは、爾國を來らせ給への意義を細かに言ふたものである。天は理想界である。聖旨の行はるゝ理想界のあることは、神子の信仰である。此理想界が地上に實現せんことは神子の志望である。理想界とは何である。聖旨の行はるゝ所である。道理を有する活物が聖

旨を實行して悖ることなきことが、則ち聖旨の成るのである。無限の意思が有限界に實行せらるゝことである。此聖旨は機械的に實行せらるべきものではない。自主自由の道理界に實行せらるべきものである。故に聖旨の實行せらるる所の天といふは、則ち道理界である。吾人が住する地上の道理界は未だ不完全極まりたるものである。此道理界の完全ならんこと道理の子の切望祈願する所である。疑ひのないことである。衣住食の中最も重なるものは食である。大を擧ぐれば小は自ら其中に含んで居る。故に是れは衣食住を興へ給へといふの祈である。衣住食を興へよと願ふは、一見自分の爲にするが如く思はるれども、決してそうではない。元來衣食住はなくて叶はぬもので、分けても神の國の建設に鞠躬盡力する者に衣食住の需用あるは當然である。無事に生活するものすら之れを要す。況んや活動する者は大に之れを要求するのである。衣食住は神の國の建設の爲になくて叶はぬもので、建國者の願はざるを得ないものである。軍人が戰場に臨んで俵糧を要するが如きである。毫も私事の爲に要するのではない。愛

に衣食住を求むるは全く建國の爲である。若し夫れ自家一身の爲に願ふが如きは、是れ孝子の爲すこと能はざる所、否念頭にだも發すること能はざるものである。故に此祈禱と前段の祈禱とは同じく孝子の赤心より發したものである。

其日を善者にも悪者にも照らし、雨を義者にも不義者にもふらし給ふ神を父とする人々は、自然に兄弟の罪惡を赦す愛情を發する。況んや天父の前に於て同胞を思ひ遣らすしてはゐられない、神人の關係を宗教といひ、人々の關係を道德といふならば、此祈禱に於て宗教と道德との一致を見ることが出来る。此二者は本來決して二種ではない。畢竟するに明德を有する者の相互の關係である。若し其差違をいへば、枝々が同一の本幹に向ふのと、枝々が相互に對するとの外ではない。此祈禱を淺基に考ふれば、祈禱者自らが本位となつて自分が人の罪を赦すがごとく、神も我罪を赦し給ふかの様に思はるれども、此れは大間違である。自分に人の罪惡を赦す心の發するは、則ち至善至愛なる神に接し、自己の罪惡の赦されるを自覺するからである。赦罪の

D

徳は神が本源であつて、我儕は其支流である。神が本來人の罪惡を赦し給ふが故に、其子たる我儕も亦相互の罪惡を赦す心が發するのである。そこで先づ人々の罪を赦す心が發せずしては、天父の前に自分の罪の赦を願はれないのである。こゝが我罪の赦を願ふ前に當て、先づ人の罪を赦すことを自白する次第である。故に此祈禱の裏面には、父よ爾我罪を赦し給ふ如く、我をして我れに罪を犯せる者の罪を赦さしめ給へと祈る祈りがある。

我儕を試におはせずと祈れば、神は我儕を試みる者であつて、人は神に試みらるゝ者の如く考へられるのであるが、神は決して試みるものではない。雅名書第一章第十三節は斷々乎として此の誤謬を否定する。さらば試みる者は誰ぞや、曰く惡魔である(馬太四章一節及三節を參照すべし)。神は唯試に遇ふことを許可し給ふのである(約百記第一章六より十二を參照すべし)。試みらるゝに二種あり、一は各自の慾に引かれて試みらるゝなり、一は各自の品格の偉大なるを證明せんが爲である。ヨブ及び基督の試みの如きは第二の試みである。吾人は神子なれども、未だ不完全なるものである。慾情の如きも未

だ十分には征服せられてゐない。だから自から控へて危きに近かよらざるを旨とするのである。吾人は神の保護の優渥なるを知る、けれども自分の不徳を認めて險を冒すことを憚るのである。之を眞の謙遜といふ。去れども神若し吾人をして危険におらしめ給はゞ、毫も疑ふ所なく懼るゝ所なく、奮然として勇往猛進するばかりである。惡より救ひいだし給へとは前條の積極的方面である。試みに遇はせずば消極的であつて、其積極的裡面を發揮しないでは、クリスチャンは物足らぬやうに感ずる。神は本來吾人を救ふを以て其本領としたまふ。試に遇はすると否とは寧ろ吾人を救ひ給ふ一手段に外ならない。さて救ひ出し給へとの祈禱は、何より救ひ出し給へといふ義なるか、能く考ねばならぬ。苦痛よりでない、地獄よりでない、刑罰よりでない、唯罪惡よりである。罪惡より救ひ出さるゝ爲には苦痛をも忍ぶべく、地獄にも往くべく、災害をも受くべしと祈禱するが、すなはち神子の赤心である。彼武運長久惡事災難をのみ祈るが如きは、神子の心ではない。天父の純全なるが如く純全になるは、則ち天父の聖旨である。故に斯く祈るは則ち亦孝子の

至情である。凡そ神を天父と叫ぶものは斯く祈らざるを得ないのである。祈禱は赤子の至誠である。茲に此至誠あれば、必らず此祈禱がある。祈禱は至誠の表白である。故に至誠なくば祈禱はない。僅に言語を綴り祈禱文を誦するが如きは決して祈禱ではない。

第八章 生活と信仰

眞實の財寶 理性の光明

蠹くひ銹くさり盜人うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ、蠹くひ銹くさり盜人うがちて竊まざる所の天に財を蓄ふべし、そは爾曹の財のある所に心も亦あるべければなり。身の光は目なり、若し爾の目瞭かならば、全身も亦明なるべし。若し爾の目眊からば、全身暗かるべし。是故に爾の中の光もし暗からば、其暗きこと如何に大ならずや。

註

蠶は櫃に藏めてある衣服を食ふもの、分けて貴重衣服をほろぼすもの、
 くさりはもと朽ち腐るの義、倉庫にある穀物の朽ち果るをいふ、盗人うかち
 は盗人が壁を穿ちて金銀を盗むをいふ、衣服食糧金銀の如きは地上界の財
 方である、地は物質界のこと、天は心靈界のこと、信、望、愛、謙、義の如きは天上界
 の財方で、蠶もくはす、朽ち果てもせず、盗賊も奪ひ去ることを得ない、財のあ
 る所に心もある、云々、その人の財方はその人の貴重品である、従て其人の心
 は此貴重品を離れないのであれば、其財方の存する所に其人を支配する心
 もあるのである、天上界の財方は眞實の財方、眞實の財方に着眼する人は眞
 個の人物、目瞭かならば、瞭かなる目は惑はない、目一筋に注目する目である、
 眩しき目は惑ふ目、一物が二物の如く見ゆる目、五尺の身五分の眼に支配せ
 られる、中の光は理性の光明、人の眼は太陽の光に照らされて、身の光となら
 れるが如く、人の理性は神の光明に照らされて、全心全力の光明となられる、
 故に人の理性を暗ますほと悪むべきことはない、之を暗ますは惑ふより來

る、心を靈界の眞理に注がざれば、忽ち心の光は消へ失せるのである。

解

その頃の宗教家は兎角世上の毀譽褒貶に心を奪はれて、眞實に靈界の信望
 愛等に着眼しなかつた故に、其行事に付て見れば聖人のやうであつたなれ
 ども、其心事は毫も凡俗に異ならなかつたから、耶穌は之を看破して偽善者
 の行爲と斷せられた、耶穌は其弟子共が凡て世俗の凡情を脱して全く天上
 界の人たらんことを望み、天國の人たるものは一切地上界の慾情を制御し
 て一向に天上界の事に着眼せしめ給ふた、爾曹斷じて地上に財方を蓄ふる
 こと勿れ、地上のものは皆無常慕なきものばかりである、衣服は蠶にくいや
 ぶられ、穀物は朽ち果て、金銀は盜賊に奪ひ取られ、榮譽利達も功名富貴も無
 常の色香に過ないから、斯る地上の財方を爾の財方として之を地上に蓄ふ
 るの愚をなすこと勿れ、凡べての信、望、愛、謙、義の如きは天上に屬する靈界の
 財方で、永遠朽化することなきものを、爾の財方として神の國に於て蓄ふる
 ことを務めよ、爾の財方が神の國のものならば、之を求むる爾の心は最早地

上には屬して居らない、神の國に屬して居るのである。爾曹は此靈界の財方に着目して決して感ふこと勿れ。爾が眼は全身に比すれば、一小部分に外ならざれども、之を支配する所の光明である。其、瞭かなると眩なるとは、全身の安危に關するのである。其の如く爾が心裡の宗教道德的理性は爾が唯一の光明である。感ふ勿れ、此理性が唯一の眞理に向つて光明を放つときは、爾は光明界のものであるが、若しも爾の理性が疑ひ感ふて、世上の富貴功名にくらまされ、毀譽褒貶に蔽はれることもあらば、假令時々眞理の光明を仰ぐことあらんも、何の益あらんや、爾は暗黒界の人に異ならないのである。理性の疑ひ感ふこと程暗黒なることはない。

馬太は物欲を照らし去る上に付いて、内心の光明を連結したのであるが、路加は迷信を照らし去る上に付いて紹介した。しかして地上の財方に注目するの非なることは、馬太之を功名心に

人々おしあつまれる時、耶穌曰けるは、今の世は惡し、奇跡を求むるとも預言者ナの奇跡の外に奇跡はあたられじ、そはナがニネベの人に奇跡となりし如く、人の子は今の世に奇跡となるべし。南方の女王審判の日に共に起ちて、今の世の人の罪を定めん、彼は地の極よりソロモンの智慧なきいとて來れり、夫れソロモンよ

連結し、路加は之を兄弟の遺産争に結び付けたのである。
 (路加傳十二の十三以下を参照すべし)

リ大なるものこゝにあり、ニネベの人審判の日と共に起ちて、今の世の人の罪を定めん、彼等はナの勸言に因て悔ひ改めたり、夫れナより大なるものこゝにあり、……身の燈は目なり云々路加十一の二九以下

人には二様の生活がある、一は地につく肉體上の生活、一は天につく心靈上の生活、其輕重尊卑をいへば、心靈の生活は重且尊にして、肉體上の生活は輕且卑である。心靈につけるものは永久にして肉體につけるものは暫時である、此二生活は本來相矛盾撞着する筈のものではないが、兎角矛盾撞着の時代を経過するのである。本來此二生活は一致する筈なれども、若し相互の衝突を免れざるときは、無論輕きものを去つて重きものを取る筈、君子小人の分れる所は此輕重大小の撰擇による。其大且重を擇ぶものは君子、其小且輕を撰ぶものは小人、爾曹の財のある所に心も亦ありと、心のつけ所によつて人物の大小貴賤が分れる。故に耶穌は先づ人々に着眼點を明白に示し給ふた。地とは地球といふ意ではない、又は現世といふ意でもない、盡くひ鏝くさ

り、盗人の穿ち取る物質的生活といふ義である。天は蒼々の天でもなく、日月星辰の天でもなく、未來永劫の世界でもない、すなはち物質以上の心靈的生
活である。萬事を打破し、放棄しても、此の心靈的生活に自己の立場を定むべ
きことを、基督は示し給ふたのである。是れは一見天と地とを離間するもの
の如く見ゆれども、決して然らず、是れ正しく天地を和合せしむるの道であ
る。

すべからく理性の光明を照さねばならぬ。箴言二〇の二七に曰く人の靈魂
はエホバの燈火にして、人の心の奥を窺ふと、爾の中の光とは理性の光明で
ある。保羅曰く人の情は其中にある靈の外に誰れか之れを識らんや、此の如
く神の情は神の靈の外に知るものなしと。哥林多前書二の十二、爾の中の光
明とは神の靈によつて明にせられたる人の靈性、耶穌は此靈性の光明を放
つことの切要なるを警告し給ふた、此光明を放たざるは猶燈火を斗の下に
置くと同様である。此靈性の光明は猶眼目の如きである。眼目は僅かに身體
の一小部分を占むるのみなれども、其光明あざやかならば、全身を照すので

ある。之れに反して、若し夫れ眼目眩からば、全身は暗黒である。人の靈性の光
明は心意の全部を照らし、否天地をも照らす唯一の光明である。日月中天に
炳平たるも、人に靈性の光明がなかつたならば、天地は暗夜である。更に靈性
の光明に付て一言せしめよ、靈性の光明は流星の如き一瞬間の光輝ではな
い、又暗夜に明にして晝間に明かならざる鷓鴣の眼の如きでない、又神の光
明に接して眩惑する光明でない、靈性の光明は永遠の神の光明に照らされ
て、益光輝を放つ光明であつて、神の光明に更に光彩を加ふる所の光明であ
る。此光明を有する者は奇跡の必要を感じない（路加第十一章二十九節を參
照すべし）。元來奇跡の證明を要する如きは此光明の明かならざるが爲であ
る。此光明が天地を照らして見れば、天地は元來二個の反對物ではない。天を
支配する神は同じく地をも支配し給ふ。地上の見地より天を仰き見れば、天
地の衝突が見える。天より地下を見下して見れば、地は天の一小部であつて、
天の中に包容せられ、毫も衝突はしないのである。一足を地に立て、他足を
天に置かんとするものは忽ちくつかへるを免れない。見地を天上に置くと

きは地上の事物は皆随従して來るのである。先づ神の國と其義とを求めよ。さらば是等のものは皆爾に加へらるべしとは、之をいふのである。

處世の心得

人は二人の主しゅに事ふること能はず、そは之を惡にくみ彼を愛いとしみ、此を親おやしみ彼を疎とほむべければなり。爾曹神と財方さいほうとに兼ね事ふること能はず、是故に我れ爾曹に告げん、生命いのちの爲に何を食たひ、何を飲のみ、また身體からだの爲に何をきんと思おもひ煩わづふこと勿なれ。生命は糧かより優まさり、身體は衣かよりも優まされるものならずや。天空てんくうの鳥を見よ、稼たかくことなく、穡さくることをせず、倉くらに蓄たくふることなし、然るに爾曹の天の父は之を養やしなひ給へり。爾曹之れよりも大おほに勝まさるゝ者ならずや。爾曹のうら誰か能あたく思おもひ煩わづひて、其生命を寸陰も延のべ得んや。また何故に衣のこと

を思おもひ煩わづふや、野の百合花は如何にして長ながつかを思おもへ、勞あつめず、紡紡がざるなり。我れ爾曹に告げん、ソロモンソロモンの榮花の極たぎるときだにも、其装よそぎこの花の一ひとに及およびざりき。神は今日野にありて明日爐いろに投入いれれらるゝ草をも如此かく装よそぎはせ給へば、況いかんて爾曹をや、嗚呼ああ信仰しんぎやううすき者よ、然れば何を食たひ、何を飲のみ、何をきんと思おもひ煩わづふ勿なれ、是れみな異邦人の求もとむるものなり。爾曹の天の父は凡たゞて此等のものゝなくてならぬことを知り給へり。爾曹神の國と其義とを求めよ、然らば是等のものは皆爾曹に加へらるべし。是故に明日の事を思おもひ煩わづふなかれ、明日の事は明日の事を思おもひ煩わづへ、一日の苦勞は一日にて足たり。

註

二人の主は全く主義の反對するもの、同時に異主義の主人に奉事し得る奴僕は居らない、必ず一方に親めば、他方には疎くなる筈、神と財、財は専ら金銀を指す、財に事ふるは之を崇拜して偶像視するをいふ、財其ものは罪惡でも何でも無い、故に財を有する其れ自身は罪惡でも何でも無い、之を崇拜し之に使役せられるのが罪惡である、至善の神を崇拜し之に指導せられることは正義である、正義と罪惡とは并立することが出来ない、故に神と財とは之を崇拜する人から見れば、二人の主人公である、是故にとは正反對の二人の主人公には同時に兼ね事へられないから、一筋に神を崇拜して財を使役せといふのである、思ひ煩ふは心配苦慮することである、生命は糧より優り、身體は衣より優る、重且大なる生命を與へたる神は之に必要な輕且小なる糧を與へ給はぬ筈はなからう、重且大なる身體を與へたる神は之を纏ふ所の輕且小なる衣を與へ給はぬ筈はない、其生命を寸陰も延べ得んや、寸陰は極めて短きをいふ、之を延べ得ざるは人間の力の極小なるをいふ、此極小の力さへ持たない人の煩慮は愚の極である、野の百合花はギリラヤの野に千

々萬々に咲きさそう紅白の百合花である、ソロモンの榮華の極、ソロモンはユダヤの王、ダビデ王の子で、最も富貴榮花を極めた王である、其王子公妃が紅白の装束は實に美麗を極めたのである、爐に投げ入れらるゝ農夫は此百合花を刈り集め、日にかわかして燃料とする、此れ皆異邦人の求むるもの、異邦人は天父を知らざるもの、故に其身を托する者を持たないから、衣食住に依り頼むの外何をも知らない、深く思ひ煩ふて之を求むるのである、爾曹先づ神の國と其義とを求めよ、爾曹とは天父を知り、天父を有するもの、先づとは第一にといふ意義である、其義とは耶蘇の發輝し給ふた精神的義であつて、決して禮法、祭式、信條等の義ではない、然らば此等のものは皆與へらるべし、此等のものは衣食住である、此等がなくてならぬことは天父の能く知り給ふ所、神の國と其義とを求むるものには必ず與へらるべきである、明日の事を思ひ煩ふ勿れ、萬事を神に信頼して餘念なく日常の労働を取るべきをいふ、所謂取り越し苦勞をするなどの誠である、一日の苦勞は一日にて足れり、是れは苦勞多き人生に限りなき同情を注いだるものである、人生は

兎角苦勞が多いから、日々其日の苦勞だけすら中々に負ひきれない程多いから、其日の苦勞に明日の苦勞を加へるときは、人生は堪へられるものではない、人生は其日々の苦勞をなして、餘は天父に一任して餘念なきを要す、必ず天父が加護し給ふから安心して居れとの意である。

解

爾曹は惑ふ勿れ、其心を二にする勿れ、天と地とを二にして、或は天を仰ぎ或は地に附し、附仰の間に心を二にすること勿れ、天上の事に心を専にすれば、地上の事は自から従ふてくるのである。地上に於ける財方の必要丈は専ら神に奉事するものには必ず附隨し來るから、一筋に神の國と其義とを求めよ。衣食住の事に心を奪はれ、憂慮心配すること勿れ、身體を興へたる神はなんで衣服を興へ給はぬことがあらう。生命を興へたる神がなんで食物を興へ給はぬことがあらう。賜はらぬものは強て之を求めても興へられるものではない、寸陰の生命すら之を延ばすこと出來ない、吾人の運命は神に一任して餘念なく、日常の業務を勉るにあるのである。空の鳥、野の百合花、食足り

衣餘つて居るではない、是等を愛顧し養育し給ふ爾曹の天父がなんで爾曹を養ひ保ち給はぬことがあらう。衣食住は人生になくてならぬもの、天父は能く之を知り給ふ、吾人の第一に務むべきは神の國と其義とを求むることである。此の如く神に忠實にして人の本分を守るものには、必ず衣食住は賜はるから、天父を知らない異教人の如く衣食住にのみ憂慮苦心する筈はない。故に憂慮はやめよ、苦心はするな、一日の苦勞すら堪へがたきものなれば、明日までの取り越し苦勞をするは憐むべき愚なることである。明日の事は全く天父に一任し置いて、其日の苦勞をすれば足る、其れより以上の苦勞はするには及ばぬ、又無用である。

論

二人の主は主義の正反對なるものである。之れに事へんと欲せば主義を二つにせねばならぬ、神は天の主、財方は地の主なれば、同時に神と財方とに兼ね事ふること能はざるは明白である。神に事へんと欲するものまゝ、財方の欲を斷念すること能はざるを以て、胸中板挾の苦痛をなすことを免れざる

のである。斯る人は一をも取らず、二をも取らず、唯苦惱するばかりである。斯る人は寧ろ神を知らざる方が増である。寧ろ無知にして禽獸の生活をなすが増である。しかも人は既に本心あるを以て全く禽獸たること能はない。然らざれば或は浮き、或は沈み、流轉極りなく、輪回の鐵環につながれて、苦境に煩悶する外はないのである。之を流轉の生涯といふ。之より憐れなるものはない。

神を信任して之に奉事する以上は、この世の事物に思ひ煩ふは孝子の所爲ではない。神の許可し給はぬ事は、如何に思ひ煩ふても人の爲し得べきことではない。神は爲さんと欲し給ふことを爲し給ふに當て、必ずしも人の手を取り給はぬのである。人は徒らに苦勞に苦勞を加ふるも其功なく、其憂慮は其不信不敬なるを自證するに外ならない。其衣食の爲に憂慮するは、畢竟するに事物の輕重の分明ならざるが爲である。既に重き生命を與へたる神が、なんで輕き食を與へ給はぬことがあらう。既に重き身體を與へたる神が、何んで輕き衣服を與へ給はぬことがある。だから衣食の爲に憂慮して、身體を

傷ひ生命を害するは神に對しては不敬である。世間には食はんが爲に生き着んが爲に勞する者多い。是れ實に物の先後輕重を取り違へたるもの。天父の子たる者は宜しく此先後輕重を知つて、憂慮を心頭より取り除かねばならぬ。約百記三八の四一、詩百四七の九を參照して見るに、基督は猶太地方の鳥類の特徴を擧げ給ひたれども、之れは廣く世界の鳥類に適用して見るも差支はあるまい。鳥類は稼くことも、穡ることも知らない。況んや倉に蓄ふることは知らないのである。斯く無智なる無能なる鳥類さへ、飢えも凍へもしないのであるから、稼穡の業務に精通せる人類が、餓え凍えるの悲境に陥る筈はないのである。そこで人たる者は欣喜踴躍して家業に働かねばならぬ。若し夫れ神の許可し給はないならば、憂慮したところが無駄である。否、不信心の至りである。

又其憂慮の如何に恐なるかを示したのである。神の全權と人の無能とを識るもの。眼には憂慮ほど恐なるものはないが、又神の慈愛と人の信賴とを識るもの。念頭には憂慮ほど不敬なるものはない。此恐痴と不敬とに驅ら

れるは實に憫むべきの至りである。基督は此憫むべきを憫む見地より憂慮の去るべきことを主張せられたものと思はれる。

基督は其弟子の眼を一轉して野山の草花を思はしめ給ふた。此百合花は荊棘の中に生長する所の價值なき野草である。農夫荊棘と偕に之を刈つて燃料とする。しかも此百合花の美を嘆賞して惜く能はざりし基督の美感は實に天外の香薫を放ちつゝある。ソロモンの榮華は猶太人の理想であつた。其榮華の極にも野草の美に及ばすとは、さてさて又如何なる美であらうか。基督は如何なる美を觀じつゝ、又人にも如何なる美を觀せしめんとしつゝ、ありしかは、此段の一言にて推し置られるのである。神は今日野に在て云々の感如何ばかり深遠の義を含んで居るか玩味すべきである。佛者は百花爛漫を見て、直に其無常を感じ、朝には紅顔夕には白骨と觀ず、儒者亦觀樂極つて哀情多しと謠ふ。神の子は曰く慕なき朝露も無常なる草花も、如何ばかり神は之を奇麗に裝はせ給ふぞと、基督は常住不變の立脚地より無常變轉の美を觀じ、無常變轉の美を觀じて、常住不變の慈愛を感じ、是れが基督敎の特

色である。嗚呼信仰薄きものよ、眞に憂慮は不信仰の結果である。

衣食住の爲に憂慮して、其能力をそぎ、其意志を弱うするは不信の結果であつて、天父を識らざる異邦人の所爲に相應して居るのである。天父の慈愛を知るものよ、背て爲すべき所でない、異邦人とは外國人といふ義ではない、天父を識らぬものといふ義である。天父は吾人が願はざるさきに衣食住の必要を知り給ふ、吾人が願によつて始めて心付くが如き者は吾人の神ではない、爾曹先づの「先づ」は最も注意すべきである。それは第一といふ義である。神の國と其義とを求よの一句は此馬太傳第六章特に十九節以下の眼目である。神の國とは天國の事であつて、前段に説明して置いたのであるが、其義も亦同第五章にくわしく説き示されたのである。凡そ人たる者の生活の大目的は此神の國と其義とを求むるにあるのである。此大義を忘れるから、種々の間違が發するのである。此大目的に着眼して、毫も惑ふことなきときは、必要の財用は悉皆賜はるのである。信不信君子小人の分別せられるところ此一點にあるのである。

最後の一節は殊に貧者に深き同情を興へたものである。貧者は一日の苦勞をすら忘れることが出来ない。然るを此苦勞に更に明日の憂慮を加ふるが如きは、實に堪へ難きことである。一日の苦勞に更に明日の憂慮を加ふるときは、一日の業務を十分に盡すことが出来ない。憂慮に加ふるに又損害を加ふ。是れ貧者の苦境である。基督此慘情を察して此言あり。是れ第一義である。人は一日の事をのみ思ふて明日の事を考へずしては居られない。基督は強ちに將來を豫期するの非を説かれたのではない。日々の業務を行ふて將來の事を憂慮すべからざるを示されたのであるが、淺く見れば雲助と聖人が一致する所である。雲助は今日のみを思ふて明日の事を思はない。聖人も今日の事に熱中して明日の事を思ふに迫がない。然れども聖人の働きは百年の經營であり、雲助の經營は其日にて終る。聖人と雲助とは亦天地霄壤の別がある。是れ此教訓の第二義である。神は何人をも其天地經營の爲に採用し給ふ。賢愚各其必要がある。神の恩愛は一小個人の小事を擧取し給ふのであるから、此恩愛を信じて安心を全うすることは、固より賢愚の別はない。是

に於てか賢愚も同境涯で、乃ち此教訓の第三義である。吾人の天父は喜びて其國を吾人に賜ふべければ、吾人の熱誠に求むる神の國は必ず地上に建設せられること疑ない。此神の國が地上を支配するに至らば、一切萬物其足下に服従するので、クリスチャンたるものは固より天國に於て基督と偕に働くべければ、地上のものに心志を奪はれて、其使役となるべき筈ではない。故に俗界を超絶して餘念なきを旨とするのである。

第九章 社交道徳

不正の審判

人を議すること勿れ、恐らくは爾曹も亦議せられん。爾曹が人を議する如く己れも議せらるべし。爾曹が人を量る如く己れも量らるべし。爾ち兄弟の目にある物屑を視て、己れが目にある梁木を知らざるは何ぞや。己れの目に梁木のある

に如何で兄弟の目にある物屑を我に取せよと曰ふことを得んや。僞善者よ、先づ己れの目より梁木をとれ、然らば兄弟の目より物屑を取り得るやう明に見ゆべし。

馬太の二より五に至る

註

人を議するは人を批評するにあらず、罪することである。猥りに自から審判者の地位に立つて、有罪の宣告を與ふことをいふ。爾曹も亦議せられん。此の如き人は必ず神の公平なる審判を免かれないのである。蓋し自からも有罪を免かれないから、量るは議するの程度をいふ。議すること寛なれば、寛にせられ、議すること酷なれば酷にせられるのである。物屑と梁木とは極小と極大との比較をいふ。己を責むること輕うして人を責むることの重きをいふのみならず、自を知らずして強て人を知らんとするの愚なるをいふ。己れ

の目に梁木あるに云々、己の目に梁木ある者は人の目にある物屑を取る権利なきのみならず、自己に過失あつては正しく人を審判する眼識がないのである。己れの過失に心付ぬ位の者は人を正解することは出来ない。僞善者、自分に大なる過失あるを知らずして、人を咎むる者は自分を義人視するのであるが、其實は義人にあらずして罪人であるから、僞善者である。

解

猥りに施濟、祈禱、斷食等の修行を専らとして、竊に地上の名譽、富貴を求むるパリサイ派の如きは、心底と行爲と齟齬するものなれば、眞の僞善者である。此の如き僞善者は人を責むることを常とするのみならず、又極めて殘酷であるから、クリスチャンは大に此僞善主義を避けねばならぬ。又其心事を清うすること務むる者は、獨り自分の高傑を以て安んずべからず、必ず之を社會の人と共にすべきである。故にクリスチャンは其社交的態度を取るときには、極めて寛大忍容の態度を取りて、他人の罪惡を數へ咎めることなく、又

之に有罪の宣告を與へざるやうに慎まねばならぬ。若し人を責むること酷
 ならば、神も亦其人の罪を容赦なく咎め給ふのである。故に斷じて人を議す
 べからず、人を議すること酷ならば、神も亦此人を議し給ふに寛容ならざる
 べし。一體自分の目に梁木の如き大罪過あるに關らず、他人の行爲に小罪過
 あるを咎めるといふが間違である。又自分に大罪過があつては人の小罪過
 を責むる權利なきのみならず、明瞭に人の過失を認むる眼識がないのであ
 る。此の如きは自から欺く偽善者である。先づ自分の罪過を認認し、之を取り
 去つてこそ、始めて他人の罪過を識別する活眼も開くべく、此活眼あつてこ
 そ始めて他人の罪過を責むる權利も出来るのである。

(一) 保羅は當時の猶太人や道學

先生の言論が異邦人又は凡
 俗界を譴責するとの酷にし
 て、自分自身の行爲と心情と
 が異邦人や凡俗界のそれと

(二) 凡そ人をさばく所の人よ、爾ぢいひのけるべき
 なし。爾ぢ他人をさばくは正しく己れの罪を定
 むるなり。そはさばく所の爾も同じく之を行へ
 ばなり。此の如く行ふ者を罪する神の審判は眞
 理にかなへりと我儕は知る。此等のことを行ふ
 者をさばき、同じく之を行ふ人よ、爾ぢ神の審判
 を免れんと意ふや

羅馬書二の一以下

優劣なきを指的して、彼等が罪惡の決して輕からざるを教示した。

論

これはパリサイの人の己を義とし、人を罪する傲慢無禮の行爲に對し、大に
 訓誡を加へられたものである。世の所謂宗教家道德家の大弊害は、自己を義
 とし人を非難することである。保羅も猶太人の傲慢を譴責した(羅馬書二の
 一―三)。基督教徒たるもの時々刻々自反省慮することなくば、パリサイの人
 の覆轍を踏む恐れがある。基督が人の罪を定むるの非なるを示されたるは、
 至極尤なることである。我等は外國宣教師の舉動について之を徹する。基督教
 徒が世人に嫌惡せらるゝ一理由は、此訓誡を守らないからである。全体人の
 罪を定むるといふは中々六ヶ敷ことである。罪惡は行爲にあるでない、反て
 心意にあるが故に、人の肺肝を見透すものでなくば、人の罪を定むることとは出
 來ない。況んや仁愛もなく人の罪を定むるに至つては、其罪決して輕ろくは
 ない。神は斯の如き無慈悲なる、不見識なる、不道理なる、無禮無義なる人の罪

を定め給ふ馬太十八の二一以上を見るべし人と人との間柄も我より酷に人に接すれば人亦我れに接すること酷なるべし我れより寛に人に接すれば人亦我れに接するに寛の道を以てす然れども是れ強ちに適面に報い來らざるを以て随分横着を構ふるものがある乍去神は侮るべからず神は必ず弱者の爲に辨訴して不義者の罪を糾し給ふべし彼のガリレオを牢に下し、ブルノーをやき、ソルウイトスを殺し、スピノザを逐ふたる人々如何にして上天の責罰を免れ得やう基督の言は凜乎として萬古に反響する此言を讀んで猶自己を義とする者は我れ頑迷古陋の宗教道德家に於て之を見る其宗教といひ道德といふものは形式の事のみ。

物屑は小なり、梁木は大なり、比較にならない、西洋人の東洋人に接する、猶此梁木を眼中に有して人を議するの類である、此類の基督教徒は實に基督の罪人である、盲目なる案内者である、獨り盲者の案内者たる盲者でなく、自ら盲目たるを識らずして、具眼者の案内者なりと自負する、其恐や實に救ふ可らず。

我れに大罪あつて人の小罪を咎むるの権利はないのである、我れに此大罪あらば、其理性の眼は已に盲するのである、其盲する眼を以て罪なりと認むるものは多くは眞の罪ではあるまい、其罪なき人を罪せんとするに至つては、其罪決して輕からない、基督が斯る人を偽善者といひ給ふも、尤なる次第である。

基督此偽善者を改善せんとして教訓し給ふ、其親切丁寧なる實に思ふべきである、偽善者とは強ひて善を飾るものではない、善を飾るものはまだ其惡を自覺するのである、眞の偽善者は其眼を外界に放ちて、他人の罪のみを責め、毫も自己の罪惡を見るの遠なきものである、眞の盲目とは此偽善者である、基督がパリサイ人を或は盲目といひ、又偽善者といひ給ふは深く味ふべきである、斯る盲目者の常語は「聖書々々、聖書」によつて善惡を定むといふのである、彼等大に過てり、聖書は替者之を解すれば唯に益ないばかりではない、實に大害となる、若し替者果して自己の盲なるを知らば、救はるべきも自から盲者でありながら見ゆるといふに至つては、其盲の甚しき、到底救ひ

求よは必要のものを求むること。尋ねよは失ひたるものを尋ねること。門を叩くは外より内に入らんが爲である。求むるも、尋ねるも、門を叩くも、同じく祈禱である。祈禱は吾人が無きものを得んとする向上心、失ひたる物を取り返さんとする修養鍊磨の心、門を叩くは外部より愈堂奥に入らんとする勇猛進取の心、皆現在の状態を以て満足しない人々の祈禱の熱誠である。求むる者は、え、尋ねる者は、あひ、門を叩く者は、開かる。よは、神は是等高大正明なる願望を遂げさしめ給ふをいふ。パンと石とは一見能く相似て其實全く異なつて居るもの、魚と蛇とも亦同様である。路加一一の一二には卵と蠍ともある。爾曹惡しき者は道義上不完全なるもの、罪惡のあるものとの意、父母の子女を愛するは人の愛の至極である、しかも神より見れば、完全の愛を去ること遠い、去りながら父母は其子女に善物を與ふるを知る、況んや完全の愛である天父が其求むる者に善賜を與へざることがあらうにと、最も適切なる比較、天父の授け給ふ善賜は聖靈である。(路加一一の一三を参照すべし) 聖靈とは基督と同情の靈能をいふ。是故には天父の恩愛を理由とするもの、天父

の恩愛は實に此の如きが故に其子たる者の心得は云々といふ理由である。總て人にせられんと欲ふとは爾また人にも其如くせよ、はクリスチャンの倫理原則である。我より人に求むる所を標準として、我より之を人に施すをいふ、即ち人の我に爲すべきことと認むるを我れより人に盡すべきをいふ。此倫理原則の本位は我れであれば、此倫理の價値は我れ其者の如何による。儒教では之を忠恕の道といふ、耶穌の前後に出でたる聖賢の口より發したる倫理原則は此原則に外ならない。唯不思議にも己れが欲せざる所を人に施す勿れと、凡ての聖賢が消極的に言ひあらはしたが、耶穌獨り之を施せと積極的に斷言し給ふた。是れ律法と豫言者なるなりとは、律法と豫言者との内容は此原則の外ではない、又律法と豫言者との成就是此原則の實行に外ならない、之れが實行せらるれば、舊約書の目的は十分達し得られるのである。

解

兎角に他人の非を數へ擧げて、殊に其信條の標準に従はざるの非を責めて、

之に有罪の宣告を與ふる偽善者は、眞實なる宗教及道德の眞理をも其私欲を恣にするが爲の名義方便となして、大罪を犯すのである。右手に無事の兄弟を不義者として有罪視するかと見れば、左手に其托せられたる宗教道德の眞理を犬や豕の類なる惡人に與へて、大罪を行ふを常とする。爾曹自反して己れの罪過を戒めて、兄弟を責めざる者は固より人を見るの眼明かなれば、爾曹の所有する眞理を犬豕の俗物に與へて、其が邪慾を遂行する名義方便となさしむること勿れ。彼等の慾情は眞理其ものに由て飽き足らせ得らるべきものではない。彼等の求むる者は眞理其ものではない。眞理を方便として其慾情を遂げやうとするのであれば、斷じて眞理を與へてはならぬ。彼等は眞理を授けらるべきではない。眞理の授けられたる者は眞理其ものを求むる者であるから、爾曹之を求めよ、必ず與へられる。之を尋ねよ、必ずあふ。門を叩いて眞理の堂奥に入るべし。神は求むる者に與へ、尋ねる者にあはしめ、門を叩く者の爲に之を開き給ふ。何なる父母が其子女の請求に應じて善賜を與へないことがあらう。罪惡を免れない人類ですら、善賜を其子女に與ふ

るのであれば、況んや至善至愛なる爾曹の天父が求むる者に善賜を與へ給はないことがあらう。斯くも恩愛限りない天父を戴いて居る爾曹は固より神の子であれば、相互に其請求する者を與ふる心得が最大至上の行爲でなければならぬ。律法と豫言者との内容も總て人の我に爲すべきことは我も亦之を人になすといふに外ならないから、爾曹は此原則を總ての事に應用するを要するのである。

論

犬も豕もユダヤ人には、不潔、恥知らずの動物とさげしめられた。彼等は異邦人を呼ぶに犬や豕といふた。馬太八の三〇及十五の二六を参照せよ。古代の頑迷派は異邦人に福音を傳ふ可からず、又異邦人に聖餐を與ふべからずとの意義に之を曲解したのであつたが、基督が斯る意味の言を吐き給ふ筈はない。尙詳に考ふれば、此犬豚は普通の俗物を言ふこともある。彼得後書二の二二腓立比書三の二を参照せよ。世間には宗教道德の眞理を聞て、之を嘲笑

誘漬する人々がある、犬豚の寶器眞珠の投せられるを見て、或は食物ならんかと近寄り見れば、其しからざるを知り、たゞ之を蹂躪するのみでない、之を投じたる人に向て仇せんとするが如く、福音の眞理を利用して其慾情を恣にする事が出来ないときは、直に之に反抗して讒謗罵詈するものがある。是等に道を説くことは警戒せねばならぬ、人を議せずといふて、更に人々の品性をも顧みざるは、決して基督の本意でない、基督ほど人を見て法を説いたかたはない、基督の福音は古來幾多の俗僧や政治家に利用せられて、社會人心の害毒となつたことがあつたか、擧て數ふべからず、斯る俗僧や政治家は犬豕よりも甚しきものである、 그리스チャンたるものは斯る犬豕に其福音を投せざるやうに警戒せねばならぬ。

聖物や眞珠を受くべからざるは眞實から之を尋ね求むる心なきが爲である、故に物を得んと欲せば尋ね求むるといふことが肝腎である、求むれば則ち尋ね、尋ねれば則ち叩くとは自然の順序であるが、求めさへすれば必ずえ、尋ねさへすれば必ずあひ叩きさへすれば必ず開かる、申命記第四節、第二十九節神が預言者の

口をかつて、全心全力を盡して我を尋ね求むる者は、必らず我れにあふべしといはれたが、是ればかりは万古を貫く所の眞理である、斯く切實に尋ね求めて神を見出さなかつた者のあつたことは未だ聞かないのである、然れども求めるものが必ず得られないのは如何なる譯であるかといふと、外ではない、求めやうが間違つて居るからである、ヤコブ曰く爾曹求めてなほ得ざるは爾曹慾の爲に費さんとして妄りに求むるが故なりと、雅各書四の二三、然らば求めて得ざるは得ることの難きでなく、求むることの難きである、約翰傳には基督の名によつて求めよとある、(約翰傳十四の十三、十四)基督の名によるとは其名をかるのではない、又其名を冒すのではない、機械的信仰を有する人々は全く形式的に之を解するのであるが、實に誤りである、基督は約翰傳十五の七に、爾曹もし我れに居り、又我が言ひし言なんぢらに居らば、凡て欲ふ所求めに従ひて與へらるべしといはれた、さらば基督と神精が一致になつて居るものは、願ひ求むる所亦基督と同様である、基督は神の聖旨の外は願ひ求め給はなかつた、故に基督と一體となつて居る者の願は成就せ

らるべきである。蓋し神の聖旨であるから、故に神の聖旨に合することを求むるが、神に求むる者の急務である。神の聖旨に合することは、聴かれるに相違ない。此道理を知らないならば、假令齋戒沐浴して千遍祈り求るとも決して聴れない。

基督は求むれば必ず得るの真理を説明し給ふに、父子の例證を引きて其類似となされたことは意味深長なるものがある。凡そ生とし生ける者の中に、父母の子を愛するより眞實なるものはない。若し夫れ人間の言葉を以て神人の關係を言ひ顯はし得べきものありとせば、父子の眞情ほど適切なるはない。故に神を父と呼び人を子と呼ぶは、基督の本心を言ひ得たる者である。人事上の父子の深き關係は本來神人の最も深き關係の不完全なる説明前者は後者の雛形にして、後者は前者の原型、この父母の眞情は則ち求むれば必ず得るの保證である。斯の如き確實なる擔保はない。天地は假令崩壊することあらんも、父母の眞情は變性するものではない。然れども之れは基督の民衆を愛撫し給ふた眞情に比するときは、尙不完全なる批議を免れるこ

とが出来ない。爾曹惡しき者ながらの一言は實に天下の父母が天父の前に責を免れざる所である。父母の眞情も時あつてか私情の雲霧に蔽はれることがある。けれども子に善賜を與ふることばかりは決して忘れない。況んや父母の父母たる天父は善賜を其求むる子に與へ給はぬことがあらう。善賜とは何であるか、能く能く考へておかねばならぬ。路加十一の十三を参照すれば、聖靈とある。此聖靈は總ての善徳の根本元理、保羅がガラテヤ書五の廿二に靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節等といった。(一)聖靈は基督の靈であつた。(二)凡そ神の靈に導かれる者は是れ即ち神の子なり。爾曹が受けし靈は奴たる者の如くふた、び懼を懐く靈にあらず、アハ、父とよぶ子たる者の靈なり。羅馬書八の十四以下、汝ら既に子たることを得しが故に、神その子の靈を爾曹の心に遣り、アハ、父と呼べしむ。是故に爾曹はもはや僕にあらず、子なり、既に子ならば、亦神に由て嗣子たるなり。加拉太書四の六以下

給ふ所は、神彼れ自身の徳性の外ではあるまい。神は其至善とし給ふ所の神

性を其子に賦與せんことを欲し給ふことは神の至情である。是れ實に吾人が神に求むる祈願の擔保である。

是故にこの二字最も深く味ふべきである。この理由の根據は近く人事にあるではない、實に遠く至善至愛の神に存するのである。又此神と人とは最も親密なる關係があつて、其關係はヤット人間父子の親を以て説き明すことが出来るのである。神人は眞の父子である。子たる者が其父母に效ふことは實に自然である。天父の純善なるが如く人の純善となるべきは既に基督の示し給ふた所、馬太五の四八、吾人の父である神は吾人の願ひに應じて善賜を吾人に與へ給ふのであるから、神の子たる吾人の爲すべきことは自ら明で、即ち人にせられんと欲ふことは爾亦人にもその如くせよといふことである。此倫理の原則は左の如く譯する方が本意を能くいひあらはすものである。あらう、人に爲られんといふよりは、人に爲らるべきとおもふことはこの方宜敷からう。吾人は既に神の子である、神の子たるが故に神の前に於て吾人は相互に兄弟である。兄弟なるが故に此倫理の仁道を実踐するは實に當然で

ある。天父の聖旨を遵奉せんことを旨とする孝子共は相互に此人道を実踐するは則ち仰では天父への孝道、附しては相互の悌道である。宗教と道徳と一致和合す、前者は根幹であつて、後者は枝葉である。此根幹なくば此枝葉はない。兄弟の道を説きて父子の道を明にせざるは、根幹によらずして枝葉を求むるのと同様である。

さて此倫理原則は吾人相互の常道であつて、日用彝倫の事此道の外に出ることはない。孔子が吾が道一以て之を貫くといつたが、此原則の外ではない。忠恕の道は此常道である。儒教も之を説き、基督教も之を説く、しかして其實行上に於て一様ならざるは篤と思慮を加ふべきことである。簡単に之を言へば人に爲らるべきとおもふ此の一句によるのである。儒教で誠意正心をいふは實に此一句を公明正大ならしむる工夫であらう。吾人が爲らるべきとおもふ心底及判断が其當を得ざるときは、如何ほど人に恕道を行ふても、社會を神聖ならしむることは出来ない。故に先づ自己を深くすることの如何ばかり急務なるかは論を待たないのである。基督教は悔改を説き、更生を説き、

儒教は誠意正心を説く、是れ孰れも自己を深くし、恕道の根本發動を潔うするのである。儒教は誠意の標準を何ものにも取らんと欲するか、基督教は天父の聖旨に取るのである。天父の聖旨は基督の心底に發動する原則である。基督は天父の聖旨が人格を以て吾人の間に顯現したものである。吾人は此標準を以て誠意正心の實を全うせんと務むる。神の善賜として示されたる聖靈は即ち誠意正心の良能である。基督教徒は基督と靈的生命の命脈を結ぶものであるから、基督的人物に外ならないのである。既に基督を信するに由て基督と靈的命脈を有するからは、常に基督に倣ふて忠恕の人道を全うすることを期するものである。若し夫れ基督教徒と孔子教徒と異なる所あらば結局基督と孔子との人格の相異なる所に基因するのであらう。

此原則は之を實行する人々に由て異様の結果を生ずべけれども、實踐道德の規則としては之れに越したるものはないのである。兎も角も利己主義を脱却するは此規則である。小人は小人なりに、君子は君子なりに、此規則に従へば其れ相應の本分を全うすることが出来る。然し基督を標準として天父

の聖旨を全うすることを勵まざれば何時までも上達することはない。何時までも凡情を脱却して、神子の境涯に到達することは出来ないのである。

眞に此原則は一言にして總ての教訓誠律を包括するものである。千萬の律法も千萬の豫言も之を一括すれば僅に此原則にて盡きる。此一言既に吾人各自の性情の原理とならば、實に心の欲する所に従つて規矩を超えないのである。保羅曰く愛する者は總ての律法を全うすと、眞に其通である。羅馬書十三の八以下、舊約書を二部に大別すれば律法部と豫言部となる。舊約全書全部の啓示訓誡も此原則の、簡明なるには及ばない。基督は此の原則の中に天國の大道を一括綜合し給ふたのであるが、天國憲法の宣言は之れにて終結したのである。

第十章 獎勵と警告

獎勵と警戒

窄き門より入よ、沈淪にいたる路は濶く、その門は大なり、之

れより入る者多し。生命にいたる路は窄く、その門は小し、其路を得るものまれなり。偽の豫言者を謹めよ、彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども、内は殘狼なり、是れ其果によりて知るべし。誰れか荆棘より葡萄をとり、蒺藜より無花果を採ることをせん。凡て善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結べり、善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざるなり。凡そ善果を結ばざる樹は斫られて火に投げ入れらる。是故に其果に由て之を知るべし。馬太七の十三より二〇に至る。

註

窄き門は謙遜と悔改と克己との門をいふ。此門が生命に入るの門である。生命にいたる路はせまく、義と和と聖靈に由れる喜悅の路である。沈淪にいたる路は濶く、古來の習慣や儀式や信條を旨とする行狀は凡人俗僧には最も

行き易い路である。是等凡俗の行狀や、傳説や、學説を以て容易く入ることを得るの門である。生命の門は是等の俗習、傳説、祭式、信條等を放棄し、悔改克己の精神一筋にて始めて入ることが出来るのである。生命は靈的生命で、義と和と聖靈に由して到底入り難しと感ずるのである。生命は靈的生命で、義と和と聖靈に由れる喜悅との實驗せられる。即ち仁愛、喜樂、平和、信、望、愛等の果を結ぶ生命である。此生命は個人、家庭、社會、國家等のそれとなつて實現するもの。沈淪は義と仁と信との活動を有しない、即ち仇恨、争闘、妒忌、忿怒等の横行で、個人を滅ぼし、家庭を滅ぼし、社會を滅ぼし、國家を滅ぼす滅亡其ものである。此門は習慣や祭式や傳説や信條にさへ従うて居れば、自由自在に入られるので、實に眞の生命其ものはない。天下大多數の人々が行く路、入る門であれば、何の苦痛もなく、何の懸念もなく、悉々盲動して行くことも出来、入ることも出来るので、其路濶く、其門大なりといふ所以である。偽の豫言者は教會外のものにあらずして教會内に顯はれ來るべきものをいふ。凡ての精神的ならざる教師は偽の豫言者となり易い。ユダ教の頑迷固陋を墨守して、基督の恩恵と眞

理とを専一としないもの。綿羊の姿は無邪氣なる溫柔の風彩をいふ。殘狼は綿羊の正反對にして毒惡殘忍なる腹黒をいふ。何の時代にも眞偽の豫言者が居る。之を辨別することは至難である。其果に由て之を知るべしとは豫言者の眞偽を辨別するの標準をいふ。果は教理にあらず、儀式にあらず、教會組織にあらず、奇跡にあらず、凡て人にせられんと思ふことを人にもまた其の如く行ふ。人道の實行をいふ。博愛の行爲は吾人の最も注目すべきもの。誰れが荆棘より葡萄を採る云々、眞實の宗教道徳は必ず善良なる行狀品格となり、博愛の行爲事業となる。教理や儀式や教會組織や奇跡や靈驗等は必ずしも善果惡果の辨別せらるべき特色ではない。決して之に感ふべからず、識者にあらざれば、能く之を辨別することは出来ない。尋常の人は善良なる行狀博愛の所行に注意すれば、豫言者の眞偽を分ち得られる。凡そ善果を結ばざる樹は斫られて火に投げ入れらる。之れは自然の成行に放任して其様子を察し、人類史を支配する神の審判に一任して、謹んで其終了を觀ることである。善果を結ばない偽の豫言者の教は決して盛大を極め得ぬのである。然し

之れは長き歲月を要する判決である。

解

己れが欲する所を人に施すは人道の極致であれば、之を實行するがクリスチャンの道である。此道は彼の儀式を守り、傳説に従ひ、習慣を重んじ、信條を奉ずるが如き所行とは全く其趣を異にして居るので、天下の最少數が實行し得る所なれば、勵んで進んで此人道の窄き門より入ることを務めよ。大多數の人々は人道の原則を履行せずして、生命の門に入らうとすれども、其れは斷じて望むべからざることである。此一筋なる小路を行くこと甚だ難い。多くの人々は沈論の大道に往來するのであるから、偽の豫言者は容易く人々を誘惑し得る。彼等は奇跡や靈驗を以て人々を誘惑する。古傳説や信條を以て人々を威嚇する。神秘の名目や聖人の名稱を以て人々を誘惑する。一見綿羊と外思はれないのであれど、耶蘇の人道を旨として居らないから、偽豫言者に相違ない。既に人道の原則を旨として居らないものなれば、假令外部には聖人の信條を奉じ、教會の神聖を唱ふるとも、或は兄弟を議し、或は忌む

べき顔色を装ふて斷食し、或は殊更に長き祈を捧げ、宗教の眞理を邪慾の方便となす等、本來の荊蒺なれば、到底葡萄を結ぶことは出来ない。又其最も看破し難き偽善の教は歴史の發展に一任して神の審判を待つべきである。必ず社會より絶ち滅ぼされるものである。故に人道の善良なる果實を結ぶや否やに付て深く注目すべきである。

論

是れより以下は獎勵勸告の言である。生命は永遠の生命、永遠の生命は神の生命で、生命は則ち活動である。永遠の生命は永遠の活動であつて、總て神の性情の活動をいふのである。沈淪とは永生の境涯より墮落せるもので、永遠の滅亡である。沈淪は神徳の沈淪で、神的活動の消滅である。永生は必ずしも現世を去つて後のことではない。過去、現在、未來を問はず、長へに生活する所の神的生命である。故に人は現世より此永生に入る事が出来る。神的生命の活動を亡ぼしたる所の人は現世に於ても既に死者である。肉體の生命ありと雖、永生はない。既に永生なし、肉體の生命終るの日に於て復活すべき道

なきこと明白である。永生を有するものは然らず、肉體の生命を失ふとも、永生は傷はれることはない。故に永生を有する人は肉體死して、尙長く生くる事が出来る。永生の路は必ずしも狭いのではない、又必ずしも小なるのではない、之れに入らんと欲する者共の私欲我見は、此路を狭くし、此門を小ならしむるのである。基督は永生の路を狭しといはれたではない、之れに至る路が狭いといはれたのである。之れに反して沈淪に至る路は人々の邪欲我見を以て自由に到られる所であるから、何も修行を要することではない。基督は人性の善なる、猶水の下に就きて流れるが如しとは、決していはれなかつた。又人性の悪なる、猶家鴨の水に入るが如しとは、いはれなかつた。人は神的人格なる耶蘇基督に觸れて、能く悔改し更生することを得るものである。乍去天國に入るを得るものは決して多くない。基督人々の勉勵して入るべきことを獎勵せられた。路加十三の二四以下、馬太十一の十二同廿の十六を参照せよ。豫言者とは強ちに先知者といふものではない、教師といふ意義である。支那にては聖賢といひ、ギリシヤにては哲人といひ、印度にては佛菩薩

といひ、猶太にては豫言者といふ、偽の豫言者とは必ずしも自ら偽つて豫言者となるものではない、自ら豫言者と自信自任するものである。斯る豫言者は第一世紀に於て多く起つた。馬太二四の四、五、十一及使徒行傳二〇の二九を参照せよ。一陽來復して櫻花爛熳たる春の日は必ずしも櫻花のみ爛熳たるではない、此時に當つて万草忽ち咲き、共に春日を歓迎する、又佳木繁茂するときは雜木も亦繁茂する。基督は豫言者の長である。大豫言者の起るときは即ち小豫言者の群起するときは、眞豫言者の起るときは即ち偽豫言者も亦群起するの時である。因て豫言者の眞偽を判別する眼識は最も必要である。此眼識なくては到底時勢に乗じて、大綱を万世に垂れることは出来ない。故に此警戒を授けられた。然るに豫言者の眞偽を判別することは容易の事ではない、基督は彼等の結果によつて之を知れといはれたが、此れには多くの時日を要することである。速断を以て判別することは眞の豫言者でなくては爲し能はざる所、凡人は靜に時期の熟するを待つて眞偽を判別することを得る。若し急に眞偽を判別せんとすれば、恐くは眞の豫言者を逐ふに至る。

保羅が猶太教徒に偽豫言者視せられたのも、亦此倉卒なる判断に出でたのである。凡そ善果を結ばざる樹は斫られて火に投入せらるの一言は、眞に人々をして神の審判を待つて、然る後に正しき判決を下さしめんことを教ふるものである。

警告

我を召びて主よ、主よといふもの、盡く天國に入るにあらず、唯之に入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ者のみなり。其日我に語りて、主よ主よ、主の名に託りて、教へ、主の名に託りて、鬼をおひ、主の名に託りて多く異能を行ししにあらずやといふもの多からん。其時彼等に告げ、我れ嘗て爾曹を知らず、悪をなす者よ、我を離れ去れといはん。是故に凡て我がこの言葉を聽て行ふ者を磐の上に家を建たる智人に譬へん。

雨ふり洪水いで、風ふきて其家を撞てども、倒るゝことなし、是れ磐を基礎となしたればなり。凡て我がこの言葉を聽て行はざる者を沙の上に家を建てたる愚なる人に譬へん。雨ふり洪水いで、風ふきて其家を撞ば、終には倒れてその顛覆大なり。

註

我を召びて主よ主よ、ユダヤにて弟子が其師を呼ぶ言葉である(馬太二三の七)。 그리스チャンは耶穌を主よと呼び慣うた(哥林多一二の三)。主とは尊稱である。盡く天國に入るにあらず、耶穌を師として尊稱を唱へ、敬禮を盡くすものが盡く天國に入るではない。唯これに入る者は我が天に在す父の旨に違ふもののみなり。天國に入るの條件は唯一あるのみ、即ち天父の聖旨に違ふことのみである。天父の聖旨に違ふは耶穌の言を實行することである。天父の完全さが如く完全くなり、凡て人にせられんと欲ふことを人に施す、即ち

愛隣の道は天父の聖旨である。之を實行して心意の原則とすることが、聖旨に違ふことである。其日は審判の日をいふ、必ずしも天地最末の日をいふのではない。神の審判は時々來るのである。深く考ふれば、時々刻々神の審判にあらざるはない。然し遂に外患襲ひ來り、家亡び國亡ぶる日は、則ち其家其國の審判の日である。其日は天國が勝利を得て罪惡の社會が滅亡するの時をいふ。ユダ國の滅亡は多數の舊社會滅亡して基督教の新社會が建設せられるの時であつた。此日は紀元七十年に相當する。初代の 그리스チャンは此日に於て世界審判の模型を徴したのである。其日我に語りて主よ主よ云々、天國が大勝利を得て耶穌が其大將軍たるの資格が證明せられるの日、我を主よ主よと呼び親み來る者あらん云々、主の名に託りて教へ、此處にては、名は名義といふに當る。主耶穌の名義に託りて、或は教を説き、或は豫言し、或は方言を語り、或は之を説明することである。教を説くは舊約聖書を講義し、其豫言を説明し、耶穌の實行を祖述することである。豫言するは一種のインスピレーションに由て意想外の言を吐くこと、即ち超自然的知識をいひあらは

すことをいふ。方言とは非常なる感情におふれて、感歎鳴號することはいふ。斯る一種の現象が初代の教會に行はれた。其後も間々行はれたことがある。哥林多前一四の三以下は詳に其状態を叙してある故について見るべし。鬼をおよは其時分のならばしであつた英雄豪傑の名に託りて鬼を逐へば鬼忽ち去つたのである。是れは一種の神經病であつて、日本の狐つきと同種類のもの。清正の名に託りて狐を逐ふが如くに、基督の名に託りて鬼を逐ふたのである。異能は病氣等を醫する力である。是れにも色々の種類があつた。我れ嘗て爾曹を知らず、爾曹は我名に託りて或は教へ或は鬼を逐ひ、或は奇跡を行つたのであらうが、我れは爾曹が我と同主義の弟子たることを毫も知らない。奇跡を行ふや鬼を逐ふや豫言することが必ず我が弟子たるの證ではない。我が弟子の證は愛隣の原則を實行するものに限る。爾曹は此原則を守らぬ人だから斷じて我弟子にあらず。惡をなす者よ、我を離れ去れ。爾曹は外面は我弟子の姿をなしたれども、實は我れの敵である。外綿羊の姿あれども、實は殘狼である。爾曹の心底には毫も愛隣の實がないので、爾曹は偽善者。

偽豫言者、偽クリスチャン、我を離れ去れ、斷じて天國に入るべきものではない。

我が此言を聽て行ふ者、此言は愛隣の人道である。聽て行ふ、聽くのみの人はい。未だクリスチャンではない、行ふことに由つて始めて耶蘇の弟子たる資格が備はる。(一)

を固く守りて、實行家の模範となつた。磐の上に家を建てたる。智人、磐ほど堅固なる基礎はない。ユダヤは急激なる驟雨多く、河床急下して忽ち

爾曹道を行ふ者となるべし。只之を聞くのみにして、自己を欺く者となる勿れ。それ道を開くのみにして、之を行はざる者は鏡に向て本來の面をみる人に似たり。彼れ己を照らし、視て去り、後直に其如何なる相貌なりしかを忘る。雅名書一の二二以下

洪水となることがある。磐上の家は容易に倒れない。耶蘇は大工であつたら、能く此邊の消息を知り給ふた。沙の上に家を建てたる。愚人、之れほど危険な家屋はないのである。磐上の家と正反對、言行一致のクリスチャンは智人、言のみあつて行なきのクリスチャンは愚人。神を畏るゝは是れ智惠、惡を離

る、は是れ明哲(約百記二八の二八)愚者は言詞を多くし、愚者は暗黒に歩む(傳道書二の一四、同十の一四)とあるを見れば、智愚の別は心情と品格とにある、其言に至つては愚者も智者に真似ねることが出来る。大風と大水とは尋常ならぬ外患である、智人と愚人との分れる所は外患に逢ふと否とではない、之に遭遇して顛覆すると否らざるとにある、高潔なる心情と堅固なる品格とは外患に堪へ得るのである。大風と大水との外患は神の審判をいふ。

解

天國の憲法は博愛人道である、仰では天父の憐憫なるが如く憐憫なるを學び、附ては己の欲する所を人に施すことを旨とするが、天國の人である、故に天國に入るの條件は耶蘇を主よ主よと呼ぶことではない、如何に耶蘇を尊崇して信頼するとも、耶蘇が私意を以て之を天國に入れ給ふことは出来な^い、天國に入るは唯天父の聖旨を遵奉することのみである、耶蘇は其親愛するヤコブとヨハ子の懇望にすら應じ賜はなかつた、其時の耶蘇の應答は更にこの聖言を明瞭ならしむる、耶蘇曰く、我が左右に坐することは我が賜

ふべきにあらず、只我が父に備へられたる者は賜へらるべし(馬太二十の二十以下)故に審判の日に於て如何に耶蘇を主よ主よとなつかしく呼ぶとも無駄である、如何に耶蘇の名に託つて信條の保護者であり、福音の宣傳者であり、悪鬼を逐ひ、奇跡を行ひ、靈驗を示す者であろうとも、天國には入られないのである、耶蘇は是等の人々に向つて我れ嘗て爾曹が我れの弟子であつたことを知らない、爾曹は我兄弟を磔殺し、我姉妹を切迫したる悪人である、斷じて天國に入るべき者ではない、我を離れ去れと宣告し給ふのである、故に耶蘇の言を實行するものは磐上に家を建つる智人、之を實行しない者は沙上に家を建つる愚人、平日は其智愚の別が分からざれども、審判の日には分明に別れるのである、大風と大水とに由つて沙上の家が顛覆し去られるが如く、愚人は外患に遭遇して顛覆してしまうのである、耶蘇の口より示されたる真理の言を行ふと否らざるとは全く聴く者の責任である。

論

耶蘇は最も嚴なる言を以て其聽衆に警告し給ふた、人は自から欺くの危険

ほど恐ろしきものはない。基督を主よ主よと召ぶは固より其所なれども、基督と同情の人となるでなくば、決して基督の徒輩ではない。羅馬書第 八章五節保羅が基督の靈なき者は基督に屬せざるものであるといつたが、彼れは能く基督教徒の本色を言明したのである。既に此靈を有する者は亦基督の行爲に效ふことを得る。基督の行爲とは何であるか。天父の聖旨に遵ふことである。基督の言によれば何人にも天父の聖旨に従ふ行爲さへあらば、天國に入ることを得る。天父の聖旨に従ふとは外ではない、基督の親しく教へ給ふた天國の憲法を遵奉する事である。然るに基督教徒の一弊習ともいふべきは、兎角人々をして基督を主よ主よと召ぶことを旨とせしめて、天父の聖旨に遵ふことを專一とせぬ。基督の靈を有するものが基督を主と召び又天父の聖旨に遵ふことを欲するは其本心である。故に基督の靈其ものを有することが基督教徒の急務である。基督更に語を重ねて、天地改まり天國の全く地上に建設せられるの日を指し示して、其日とはいひ給ふたのである。其時種々の條件を以て天國の臣民たらんと欲する者がある。或は基督の教を聞き、彼れ

と共に飲食し、彼れと共に同郷たるの故を以て天國に入らんと欲する者がある。或は方言を語り預言をなし、安息日ごとに説教禮拜等を司どり、又は不思議なる奇跡を行ひ病人を醫したるを以て、天國に入るの條件とせんと欲するものがある。是等の人々の中には信條保護者を以て自任し、能事終れりと思惟するものもあらう。基督は是等の人々に向て爾曹は我が徒でない、我れ嘗て爾曹が我が徒たりしことを知らぬといふであらうと明言せられた。惡を爲す者よの一言は凡ての迷信を打殺しえた所の正氣である。惡とは何である。宗教的禮式を行はざることであるか、教會の信條を遵奉せざることであるか、教會政治の制度に服従せざることであるか、斷じて然らず、道義的行爲を實行せぬことである。道義的行爲とは山上の教訓其ものにあらずして何んであらう。

斯く明々白々の教訓あるにも關らず、此天國の憲法の外に、信條や儀式や政治などの條件を作為して、天國の門戸を閉ぢる計でない、其中に安居する者をも驅逐せんと企圖したるの例は、教會史上擧げて數へられない。之をしも

非基督主義といはないならば、何が非基督主義であらう。宗教道德の善悪邪正を辨別することは、決して忽諸に付すべきことではないが、既に善と知り正と認めたることを實行すると否とは、亦智愚の別れる所である。善悪を辨別するは智ではあるけれども、之を實施して惡を斷ち善を行ふことがないならば、未だ全い智とは謂はれない。知らずして善を行はざるよりも、知つて猶之を行はないのは、恐も又甚しいといふべき。基督は知つて行ふものを磐上に家を建つる智人に比し、知つて行はざる者を砂上に家を建つる愚人に比し給ふた。猶太の川々は、大抵砂川であつて、雨降れば忽ち溢れ、晴るれば忽ち涸れる。故に此砂上に家を建つれば、忽ち風雨の爲に覆へ倒される。人は單に智能を有するばかりではない、智能とても記憶力のみには限らない。高論名説を聞きて之を記憶するは極めて淺き智識である。智能は記憶力を有するばかりではない、又理解力を有する、否理解力ばかりではない、又發明力を有する。高論名説を聞きて之を記憶し之を理解し之を發明することを得るも、人格の上に於てはまだ不具である。人には情感がある

から、高論名説を理解したる上に之を愛慕し悦樂して、所謂手の舞ひ足の踏むを知らずといふほどに至らねばならぬ。斯く高論名説は情感に消化せられて、情操の要素となれば、最早他人のものではない、自己のものとなる。更に一步を進めて、高論名説の爲に身命をも投げうつといふほどに熱心するばかりでなく、之を決行し、之を修行するときは意志其ものとなる。是に於て高論名説は始めて人格全體の骨肉血氣となる。是れ磐上家を建つる所の智人である。斯の如きは富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、永久賞罰も動かすこと能はざる大丈夫である。之れが即ち天國の臣民。

此比喻は山上大説教の結尾として眞に莊嚴を極めたものである。唯彼の信條を信じ此の禮式を行ふを以て宗教の事、能事終れりといふ人々は、この莊嚴なる結尾を聞き、耳を蔽ふて逃走するであらう。

聽衆の感想

耶蘇此言を語りはてたまへるとき、集りたる人々其教を駭きあへり、そは學者の如くならず權威をもてる者の如く教へたまへばなり。馬太の二八より二九に至る。

註解

此言は山上の説教全體をいふ。集りたる人々は耶蘇の周圍に四方より集まり來た人々、學者の如くならず、學者は舊約聖書や不規定書や聖傳に通曉し、猶太民族を教導する人々である。彼等の中にはヒルレルもあり、ガマリエルもあり、シヤムマイもあり、博學多識、篤實温公の人々もあつたけれども、其説く所煩瑣的論辯にして、舊約書の一句を二十五種に説明するを常とし、或は千有餘種に説き分るを以て其誇りとなしたのであつた。權威をもてる者、耶蘇の説教の仕方が全く學者のそれと違つて居つた。耶蘇は古人の言を引照して自己の説を確實ならしめ給ふたでもなく、聖書の辭句を論題として之を説明し給ふたでもなく、又は煩瑣的議論の組立を旨とせられたでもなく

短刀直入自己の肺腑より吐露して、聴衆の本心に訴へ給ふたのである。故に言々句々嶄新にして各自の心底に感徹した。しかのみならず其舊約聖書に對する態度は、弟子のそれにあらずして、寧ろ批判者のそれであつた。唯批判者のみならず、舊約書の眞義を啓發して、之を超絶するの見識があつた。故に彼れの人格に存する宗教道德の權能が正々堂々として、其肩にあふれ其額に輝いたのである。是れ彼れが全く學者と其風彩を異にした所である。

論

吾人は耶蘇の山上に於ける大説教を読み去り讀み來りて、驚駭に堪へないもの多い。當時の人々が耶蘇の姿勢を視、耶蘇の音聲を聞き、耶蘇の威風を仰ぎ、耶蘇の眼光に照らされて、驚歎措く能はざるものあつたことは、實に思ひ遣られるのである。吾人は既に之を紹介して置いたから、今言々句々に付いて之を批評するの要ないのである。其言々句々は各千万無量の深意を包含するので、幾度之を説教しても盡くすことをえない。若し山上の説教を三段に區別することを得るならば、毎段に主眼とすべきものあるを見出すこと

を得る。第一段を馬太傳第五章とすれば、其主眼は則ち天に在す。爾曹の父の完全さが如く、爾曹も完全うすべし。といふの言にありと思はれる。凡そ人たるもの、希望は之に越したるものはあるまい。支那の儒者が聖は天を希ひ賢は聖を希ひ、士は賢を希ふといふた。耶蘇は聖人の希望するものを吾人に紹介し來つて、吾人の希望となし給ふた。神の子たるものに取りては此希望の如く切實なるものはない。そは孝子の希望は其慈父の如くならんことであるから。耶蘇は吾人の衷心に孝子の赤誠を喚起し給ふた。既に此赤誠ある者にして、若し其慈父の完全なるが如く完全なる希望をもたせられるを得ば、實に無限の慰藉である。

第二段を馬太傳第六章とすれば、其主眼とする所は、爾曹先づ神の國と其義とを求めよ。といふ勸告にありと思はれる。凡ての善行義舉は此動機より發するにあらざれば、利己となり、凡俗となり、偽善となり、固陋となるのである。此勸告は孝子の歡迎する所のもの、大早の雲霞を望むが如きである。中心に靈活の元氣を有するものは何事をか爲さざるを得ない。しかして其爲さん

と欲するの動機は孝子の至情に外ならないので、地上に神國を建設し、其義を擴張することほど願はしきものはない。施濟も祈禱も斷食も何も彼も地上に神の國を建設せんが爲の仕事に外ならない。故に凡ての善行義舉は地上に神の國を建設する大目的の方便に外ならないのである。

第三段を同第七章とすれば、其主眼は、凡て人にせられんと欲ふことは、爾亦人にも其如くせよ。といふ社會道德の原則、則ち神子等が異口同音に歡迎する所の憲法である。慈父の聖旨を以て其衷心の理想とし、祈願とする所の神の孝子共は、其欲する所も亦同一であらう。此同一の欲求を以て神子社會の原則となし、憲法とするは、決して外界より我を壓制し來る所の權威あるが爲ではない。孝子の衷心より發するものなれば、正しく自由の憲法である。然かして之を實行するは自由意志の所爲なるが故に、此憲法を遵奉するものは則ち自主である。

是等の三大主眼は山上説教の三大綱である。第一綱は神子が天父に對する希望、第二綱は神子が地上に於ける事業、第三綱は神子が相互の交情である。

然かして是等三大綱の精神は一以て之を貫いて居る、即ち孝子の至情である、しかして又この至情を養育愛撫するものは、則ち天父の限りなき恩愛である、是れ則ち天國の奥義で、耶蘇は靈の貧しきより説き起して、天國の奥義に説き到り給ふた、吾人は耶蘇の啓發し給ふた人道の卑近より高遠に到る、其廣さ長さ深さ高さを窺うて、實に驚歎惜く能はざるのである。

基督の大訓註釋 終

明治三十六年十二月一日印刷
 明治三十六年十二月五日發行

基督之大訓與付
 正價金六十錢



著 者 海 老 名 彈 正

發 行 者 東 京 市 本 郷 區 四 丁 目 五 番 地
 清 水 金 右 衛 門

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 美 神 保 町 二 番 地
 三 島 宇 一 郎

印 刷 所 同 所 (電 話 本 局 二 三 一 六 番)
 弘 文 堂

發 兌 元 東 京 本 郷 四 丁 目 五 番 地
 (電 話 下 谷 九 百 九 十 九 番)
 賣 捌 所 東 上 田 屋 同 東 京 堂
 大 福 音 社 京 聖 書 房

海老名 禪正先生編

耶蘇基督傳

增補第七版

並製價五十五錢 稅八錢
上製價六十五錢 稅十錢

本書は主として歴史的考察に基きて叙述したるものます。我讀書界の歡迎する處となり第七版を重ねるの盛況を呈せり。單に福音書の切抜又は主觀的。理想的基督の讚評に止りたるものと同視するなかれ。

トルストイ 伯著 加藤直士氏譯

我宗教

第三版發行

▲菊版三百三十五頁餘
▲實價七十五錢 稅十錢

此書は實に翁か生命なり、真髓なり。骨子なり、危然たる翁か無數の著述は一に此書の主旨を布演するのみ。翁か人觀。宗教觀。社會觀。實行主義。禁慾主義。文明論。非戰論等活如として卷中に誦る。

文學博士 高橋順次郎先生序

梵語戲曲シヤクンタラ

梵文學十二原書
第一編 既成

詩聖カーリダーサの作にして、獨のゲーテ、ヘル 有名の脚本 なり、ゲーテはその自

デル、等の人物に依りて歐洲に吹聴せられたる 作の詩「シヤクンタラ」に於て「天地間美の極」と賞讃せられたる 獨逸ブルカルド版により梵字を以て印刷致し候

洋裝菊版二百十二頁餘 原價金貳圓郵稅金拾貳錢

クローズ紙質印刷精撰 本書は、東京帝國大學。東西佛敎大學。曹洞宗大學等の教科書に採用せられたり。

發行所

東京市本郷四丁目五番地

文

明

堂

海老名正先生編

耶蘇基督傳

增補第七版

並製價五十五錢稅八錢
上製價六十五錢稅十錢

本書は主として歴史の考察に基いて叙述したるものます。我讀書界の歡迎する處となり第七版を重ねるの状況を見せり。單に福音書の切抜又は主觀的。理想的基督の畫像に止りたるものと同視するなかれ。

トルストイ伯著加藤直士氏譯

我宗教

第三版發行

▲菊版三百三十五頁餘
▲背價七十五錢稅十錢

此書は實に翁が生命なり、眞髓なり。骨子なり、危然たる翁が無數の著述は、一に此書の主旨を布演するのみ。翁が人觀。宗教觀。社會觀。實行主義。禁慾主義。文同論。非戰論等活如として卷中に誦る。

文學博士 高橋順次郎先生序

梵語戲曲シヤクンタラ

梵文學十二原書
第一編既成

詩聖カリーダーサの作にして、獨のゲーテ、ハル 有名の脚本 作の詩シヤクンタラに於て、等の人物に依りて歐洲に吹聴せられたる。

之を 天地間美の極 獨逸ブルカルド版 印刷致し候

洋裝菊版二百二十頁餘 原價金貳圓郵稅金拾貳錢

クロース紙質印刷 東西佛大。曹洞宗大學等の教科書に採用せられたり。

發行所 東京市本郷四丁目五番地 文明堂

文學博士 松本文三郎先生著

最新版九月十五日發行

佛教史論 佛典結集 第一編

紙質特撰印刷鮮明
菊版二百八十頁餘
上製價金八十錢
郵稅金十二錢
並製價金六十錢
郵稅金八錢

本篇は 最古の信賴すべき紀傳により 佛典結集 四回の顛末を詳叙し傍ら後代の書が如何に之を紛亂せしめたるかを指摘し、併せて 東西學者の妄

說を列舉論破し、從來曖昧模糊の裡に沒了せられたる佛教史上の一大事實をして一見明晰ならしめ學者をして 眞贋 立るに之を辨せしむ。附録には彼の最近最

要の印度史料たる 阿育王碑文の一切を翻譯し、錫蘭島佛教傳 來の状態を記述し、古代 印度王統年代 を比較對照したる等、皆是 佛

教學者並に 東洋史家の 座右に缺くべからざる 珍書 なり。

發兌元 東京本郷四丁目 文明堂